

島根大学構内遺跡第3次調査 (深町地区 1)

—宍道湖北東側における低湿地遺跡の調査—

1998年

島根大学埋蔵文化財調査研究センター



櫂・棒状木製品出土状態（西から、VI d層最上部）



1. 調査区北壁断面（南西から、現代盛土・I～VII層）



2. a-a'ライン断面（南西から、VI～VII層）

序 文

島根大学の敷地内には、かつて薬師山古墳や菅田丘古墳等の存在が知られており、また大学周辺においても著名な遺跡が豊富に残っています。とりわけ、近隣の内川津遺跡やタテヨウ遺跡等は、かつての宍道湖沿岸部に展開した低湿地遺跡として、膨大な量の遺物の存在が明らかにされ、全国的にも注目されています。同様に、敷地の大部分が宍道湖沿岸部にあたる島根大学においてもこうした遺跡の存在が予想されていたことから、平成6年4月に島根大学埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構内遺跡発掘調査ならびに研究の体制を整備する運びとなりました。

本書は、武道場新営に伴って、平成8年2月から6月まで実施した構内遺跡第3次発掘調査成果の研究報告書です。本次調査では、縄文時代前期と推定される櫛とヤスの柄が完全な状態で出土するなど、当時の生業活動の実像を生き生きと現在によみがえらせる、まことに意義のある発見に恵まれることが出来ました。こうした成果は、今後の地域史の叙述に新たな展望を開く、きわめて貴重な資料になるといえます。本書が、今後の埋蔵文化財に対する理解と研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査の開始以来、本書の刊行に至るまで、学内の関係者を始め、島根県教育委員会等各方面から多大な御協力、御支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 北川 泉

例　　言

1. 本書は、島根県松江市西川津町1060番地（旧字名：深町）島根大学構内において実施した島根大学構内遺跡第3次発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名称は島根大学構内遺跡、地区名は旧字名に従い深町地区と呼称している。
3. 発掘調査は、武道場新営工事に伴い実施した。
4. 発掘調査は、1996年2月22日から1996年6月11日にかけて実施した。調査面積は、約450m²である。
5. 発掘調査は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した。体制は第1章に示している。
6. 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系図によった。
7. 遺物の洗浄、実測、製図は、会下和宏、埴生典子、様田頼久、和田浩幸が行った。
8. 材化石樹種鑑定用のプレパラート作製は埴生が行い、鑑定、記載は能城修一氏に委託した。
9. 土壌の水洗選別作業は様田が行い、種実鑑定には秋村喜則氏（島根大学生物資源科学部）の御教示を得た。
10. 材化石の¹⁴C年代測定を島根大学汽水域研究センターに委託した。
11. 本書の原稿執筆は会下があたった他、以下の各氏、機関に玉稿を賜った。

第6章1 中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

第6章2 川崎地質株式会社

第6章3 能城修一（農林水産省森林総合研究所木材利用部）

（敬称略）

12. 本書の構成・編集は、田中義昭の指導のもとに会下が行い、埴生、様田が協力した。
13. 出土遺物と発掘調査に関わる記録類は、全て島根大学埋蔵文化財調査研究センターで保管している。
14. 調査及び本書の作成にあたっては、以下の方々に御協力・御指導を賜った。記してお礼申し上げます。

赤澤秀則（鹿島町教育委員会） 麻生 優・岡本東三（千葉大学） 足立克己・内田律雄・角田徳幸・吉道正年・守間利栄・中川 寧（島根県埋蔵文化財調査センター） 綱谷克彦（敦賀女子短期大学） 池田満雄（島根考古学会） 伊藤隆三（富山県小矢部市教育委員会） 上原真人・高橋克壽（京都大学） 木沢直子・塚本敏夫（元興寺文化財研究所） 鈴木裕明（奈良県立橿原考古学研究所） 西尾克己（島根県教育委員会） 野坂俊之（湖陵町教育委員会） 平野芳英・松本岩雄（島根県古代文化センター） 松井 章（奈良国立文化財研究所） 松井整司（島根地質学会） 山田昌久（東京都立大学） 山本 清（島根大学名誉教授） 柳澤亮（長野県埋蔵文化財センター） 吉野健一（千葉県埋蔵文化財センター） 渡邊正巳（川崎地質株式会社） 王 義（中国社会科学院考古研究所）

（敬称略）

本文目次

第1章 調査に至る経緯と組織	1
1 調査に至る経緯	1
2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則	2
3 調査研究組織	4
第2章 遺跡の環境とこれまでの調査成果	6
1 地質構成と自然史	6
2 歴史的環境	7
3 これまでの島根大学構内遺跡調査成果	9
第3章 調査の方法と経過	17
1 調査の方法	17
2 調査の経過	17
第4章 基本層序	18
1 層序	18
2 ^{14}C 年代測定	24
第5章 遺構と遺物	25
1 縄文時代の自然流路と遺物	25
(1) VI層・VII層・VIII層・IX層上面の縄文土器・石器	25
(2) VI a 層上面の自然流路と縄文土器・石器	25
自然流路03	25
自然流路03出土土器・石器	25
(3) 木製品	29
櫛・棒状木製品	29
その他の木製品	33
(4) 自然遺物	33
自然木	33
種実	35
2 弥生時代以降の遺構と遺物	36
(1) 「III b 層・IV層」上面の遺構と遺物	36
流路状遺構01	36
流路状遺構01出土遺物	36
溝02	39
杭	40
(2) II層・III a 層の遺物	40

第6章 島根大学構内遺跡(深町地区)の古環境復元	45
1 島根大学構内遺跡第3次調査(深町地区)の地質的検討(中村唯史)	45
2 深町地区的花粉・珪藻分析(川崎地質株式会社)	56
3 島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区)・第3次調査(深町地区)出土木材の樹種 (能城修一)	64
4 大型植物遺体	86
第7章 考察	88
1 遺跡の景観と人類活動	88
2 標・棒状木製品について	90
第8章 まとめ	96

図 目 次

図1 調査地位置図(1/10000)	1
図2 島根大学構内遺跡周辺の地質	6
図3 1918(大正7)年の調査地周辺(1/20000、大日本帝国測量部発行地形図をもとに作成)	12
図4 島根大学周辺の遺跡(1/25000、国土地理院発行地形図をもとに作成)	13
図5 調査区北壁断面図(1/60)	19
図6 a-a'ライン断面図(1/60)	21
図7 遺物出土分布図(その1、1/200)	26
図8 遺物出土分布図(その2、1/200)	27
図9 遺物出土分布図(その3、1/200)	28
図10 VI・VII・IX層上面出土遺物(1/3・2/3)	29
図11 自然流路03(下底面)出土遺物(1/3・2/3)	30
図12 標・棒状木製品(1/8)	31
図13 木製品(1/6・1/3)	34
図14 木製品(1/3)	35
図15 「III b層・IV層」上面遺構平面図(1/150)	37
図16 流路状遺構01埋出土弥生土器(1/3)	38
図17 流路状遺構01埋出土石器(2/3)	39
図18 杭(1/3)	39
図19 II・IIIa層出土遺物(1/3)	41
図20 第3次調査区の模式層序	45
図21 火山灰中に含まれる角閃石の化学組成	49
図22 炭素・窒素濃度およびC/N比	51
図23 尾根を取り巻く砂層の模式図	52
図24 第3次調査区と第1次調査区の層序対比	54

図25	試料採取地点	57
図26	花粉ダイアグラム	58
図27	珪藻ダイアグラム	59
図28	珪藻総合ダイアグラム	60
図29	縄文・弥生時代の櫛（1／10）	92
図30	鳥浜貝塚出土のヤス柄（1／4）	93
図31	縄文海進期の古宍道湾における漁撈活動生産用具	93

表 目 次

表 1	^{14}C 年代測定値	24
表 2	櫛・棒状木製品法量計測値	33
表 3	出土遺物観察表	42
表 4	地域花粉帶の対比	62
表 5	島根大学構内遺跡第1次、第3次調査出土自然木の樹種	68
表 6	島根大学構内遺跡第3次調査出土木製品の樹種	69
表 7	島根大学構内遺跡第1・3次調査出土木材一覧表	70
表 8	大型植物遺体一覧表（現地採集試料）	87
表 9	大型植物遺体一覧表（水洗選別試料）	87
表10	縄文時代の櫛一覧表	91

第1章 調査に至る経緯と組織

1 調査に至る経緯

島根大学では、構内の諸施設を長期にわたって継続的に増改築していく計画が立案され、それに伴い埋蔵文化財の調査、保存を行う必要性が生じていた。こうした状況の中で、1994年6月に埋蔵文化財調査研究センターが発足し、組織的な発掘調査に着手することになった。

これまでに実施した第1～2次調査では、島根大学構内遺跡が、縄文早期末から近代まで、広範間に渡って営まれた、大規模な低湿地遺跡であることが判明し、多くの諸成果を得ることに成功した。加えて、本遺跡が、いわゆる古宍道湾ないし古宍道湖の沿岸部に該当することから、海面・水面変動を始めとした古環境変遷に適応する人類遺跡の展開過程を追及する上で、有効性が認識された。

本次調査は、武道場新館に伴って実施されたものである。

調査区は、第1次調査区の北東約120m、金崎丘陵の西側裾部と沖積地の変換部に位置する(図1)。第1次調査では、縄文早期末～前期の土器群や丸木舟の出土、古環境復元などの諸成果を得ていることから、同様の立地環境にある本次調査区でも、縄文海進高頂期前後における既成果の追認及び新たな考古学的解明に期待が持たれた。

こうした課題認識と問題定位を行い、1996年2月から調査を開始した。

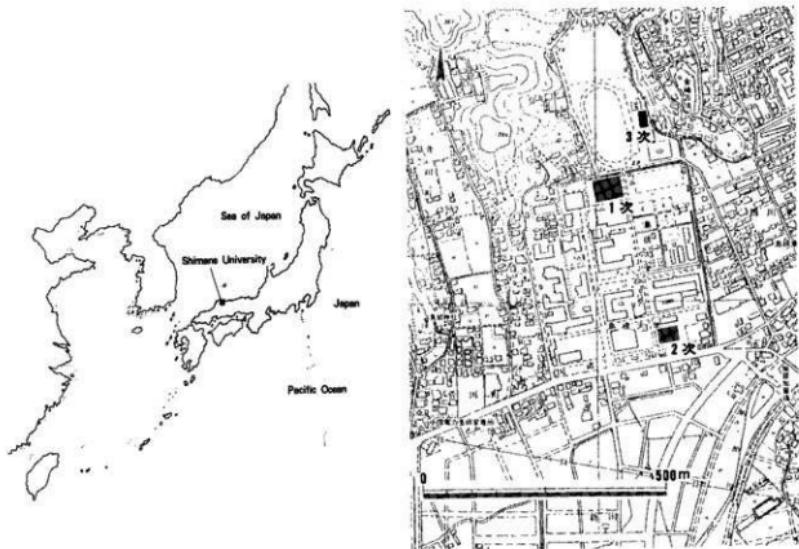


図1 調査地位置図 (1/10000)

2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則

(平成6年島大規則第9号)

[平成6年4月22日制定]

(趣旨)

第1条 島根大学構内の埋蔵文化財（以下「埋蔵文化財」という。）の発掘調査及び修復保存に関する重要事項を審議するため、島根大学に島根大学埋蔵文化財管理運営委員会（以下「管理・運営委員会」という。）を置く。

(審議事項)

第2条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる事項について企画し、審議し、及び決定する。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に係る基本計画に関すること。
- 二 埋蔵文化財の修理保存に係る基本計画に関すること。
- 三 その他埋蔵文化財に関する重要な事項

(組織)

第3条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
 - 二 各学部長
 - 三 第7条第3項に規定する副センター長及び同条第1項に規定する研究員のうちから1名
 - 四 各学部教官代表 各1名
 - 五 事務局長
- 2 前項第3号に掲げる研究員である委員は、学長が選考する。
- 3 第1項第4号に掲げる委員は、学部長の推薦に基づき学長が任命する。
- 4 第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補次の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 5 委員会に委員長を置き、委員長は、学長をもってこれに充てる。

(会議)

第4条 委員会は、委員長が召集し、議長は、委員長をもってこれに充てる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

3 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、出席委員の過半数をもって議決する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者を出席させ、その意見を聽くことができる。

(調査研究センター)

第6条 管理運営委員会の下に、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たるため、埋蔵文化財調査研究センター（以下「調査研究センター」という。）を置く。

(調査研究センターの組織)

第7条 調査研究センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- 一 研究員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官若干名

二 調査員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官1名

三 調査補助員 必要に応じて採用する非常勤職員

2 調査研究センターにセンター長を置き、センター長は学長をもってこれに充てる。

3 調査研究センターに副センター長を置き、副センター長は第1項に規定する研究員のうちから学長が任命する。

4 センター長は、調査研究センターの管理・運営を総括する。

5 副センター長は、センター長を補佐し、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存の指導・監督を行なう。

(研究員及び調査員)

第8条 研究員及び調査員は、当該教官の所属する学部長等の承諾を得て、学長が任命する。

2 研究員は、必要に応じて埋蔵文化財の調査研究を行う。

3 調査員は、副センター長の指導の下に専ら埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たる。

(報告)

第9条 副センター長は、埋蔵文化財の発掘調査を終了したときは、センター長を通じて管理運営委員会に調査結果を報告するものとする。

(事務)

第10条 管理運営委員会の事務は、庶務課が処理し、調査研究センターの事務は、施設課において処理する。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、管理運営委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会において定める。

附 則

1 この規則は、平成6年4月22日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される第3条第1項第4号の委員の任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

3 調査研究組織

(平成 8 年 2 月 22 日～平成 8 年 3 月 31 日)

管理運営委員会

委 員 長	学長	北川 泉		
委 員	法文学部長	島居 一康	教育学部長	渡辺 悅男
	総合理工学部長	吉川 通彦	生物資源科学部長	本田 雄一
	法文学部教授	富野暉一郎	教育学部教授	相良 英輔
	総合理工学部教授	大西 郁夫 <small>(平成 8 年 3 月 29 日就任)</small>	生物資源科学部教授	平塚 貴彦
副センター長		田中 義昭	研究員	渡邊 貞幸
事務局長		佐竹 良夫		

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部教授	片桐 成夫	汽水城研究センター助手	竹廣 文明
事務局	施設課長	中間 一男		
調査員	助手	會下 和宏		
調査補助員		埴生 典子	大橋 覚 野崎 裕臣	

(平成 8 年 4 月 1 日～平成 8 年 6 月 11 日)

管理運営委員会

委 員 長	学長	北川 泉		
委 員	法文学部長	岡崎 勝彦	教育学部長	中川 政樹
	総合理工学部長	吉川 通彦	生物資源科学部長	本田 雄一
	法文学部助教授	松井 嘉徳	教育学部教授	相良 英輔
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	生物資源科学部教授	仙田久仁男
副センター長		田中 義昭	研究員	渡邊 貞幸
事務局長		佐竹 良夫		

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部教授	片桐 成夫	汽水城研究センター助手	竹廣 文明

事務局 施設課長 斎藤 健次
調査員 助手 會下 和宏
調査補助員 塙生 典子 槙田慎久 和田浩幸

第2章 遺跡の環境とこれまでの調査成果

1 地質構成と自然史

本遺跡の所在する出雲地域は、大別的には、日本海に臨む島根半島、宍道湖・中海といった汽水域沿岸部、山陽地方につながる中国山地等によって構成されている。

宍道湖・中海は、後氷期における海水準変動の関与によって、三角州や砂州が内湾を閉塞した海跡湖で、その過程については、時代ごとの具体的な古地形が復元されつつある¹⁰⁾。繩文海進期の本地域は、概括的には、現在の宍道湖が大社湾と繋がった古宍道湾（仮称）と中海が美保湾と繋がった古中海湾（仮称）とからなり、その沿岸部は、浅海性砂泥底で樹枝状のおぼれ谷が形成されていたとみられる。

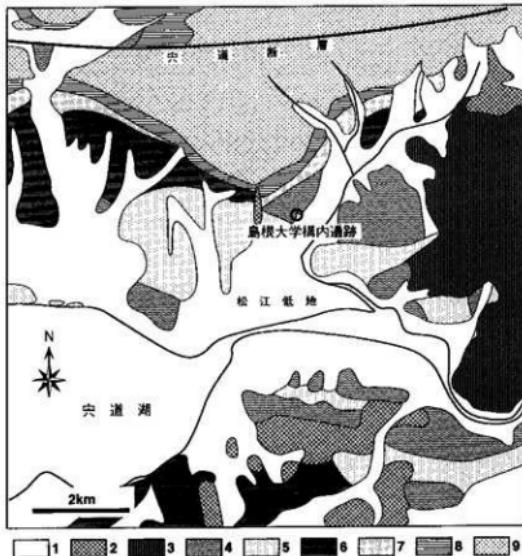


図2 島根大学構内遺跡周辺の地質（中村唯史氏作図）

- 1 完新統 2 段丘堆積物 3 和久瀬山安山岩 4 松江層玄武岩
5 松江層砂岩 6 布志名層泥岩 7 大森層砂岩・頁岩および礫岩
8 久里・川合層頁岩 9 久里・川合層流紋岩～右英安山岩溶岩および同質火砕岩
(鳥取県地質図編集委員会編、1982年をもとに作成)

本遺跡は、宍道湖北東側の松江低地部北縁に位置している。松江低地は、朝酌川の下流に形成された小規模な冲積地で、この地には、軟弱な完新統中海層泥層が分布し、宍道湖湖底、出雲平野下に連続している^②。

中海層泥層中には、内湾性の貝化石や、アカホヤ火山灰（K-A h）層^③が挟在しており、古環境復元の有力な資料となっている。アカホヤ火山灰層は、島根大学構内遺跡（橋繩手地区）の調査成果によって、纖維土器包含層と轟B式包含層の間に挟在していることが確認されており、その降灰は、概して、縄文早期末と前期初頭の移行期に求められる。ところで、日本海採取の海底コアをもとにした有孔虫殻酸素同位体比の検討によれば、温暖化に伴う縄文海進によって少なくともアカホヤ火山灰降下時までは、日本海に対馬暖流が本格的に流入、現在の日本海域と同様の海洋・気候環境形成をみていたと推定されている^④。この仮説を肯定すれば、縄文前期における本地域は、既に温暖湿润な日本海型の気候環境であったことが想定出来よう。

本次調査の深町地区は、北から南に開口する谷の出口に相当し、金崎丘陵の西側裾部と沖積地の変換部に位置している。この谷の集水域は、新第三系松江層の玄武岩、砂岩によって構成されている。

遺跡周辺の植生史については、これまでのボーリング調査や、西川津遺跡、島根大学構内遺跡（橋繩手地区）等の資料によって復元されつつある^⑤。縄文早期末～前期前半頃の植生を要約的に述べると、古宍道湾水辺には、イネ科の草本が繁茂しており、流入河川沿いには、エノキ、ムクノキ、ケヤキを要素とする河畔林が存在していたと想定されている。また、島根大学構内遺跡周辺の陸域には、暖温帯中の二次林と考えられるコナラ、クマシデを要素とした落葉樹林の存在が推定される。一方、東隣の朝酌川流域、西川津遺跡周辺では、クロマツを要素とする海岸林、ないしアカマツを要素とする二次林の存在が想定されている。以上の植生復元は、花粉分析に依拠した結果であり、その追認とあわせて、材化石樹種鑑定資料の蓄積を進め、より点的かつ細密な沿岸部陸域生態系を明らかにしていく必要があろう。

2 歴史的環境

島根県は、山陰地方の西方に位置し、旧国制では、県東部「出雲」と県西部「石見」、日本海に浮かぶ「隱岐」より成る。日本海に突出した島根半島は、九州地域や北陸地域等との沿岸交流の結節点的役割をなし^⑥、加えて、山越えルートによる山陽、近畿地域との交流も頻繁であったといえる。こうした周辺地域との文物交流が認められる一方で、青銅器大量埋納^⑦や弥生後期土器様式、墓制^⑧に代表される様に、地域性を強く発揮していることも看取される。

以下、本遺跡周辺を中心に、出雲地域の遺跡を、通時の観察する。

本地域では、現状で、縄文早期末纖維土器の時期から、本格的な遺跡形成の開始が認識されている。該期の遺跡は、森林と汽水域、河川等、異なる環境の遷移帶付近に設営される傾向があり、縄文人の複合的、総合的な資源利用をうかがうことが出来る。こうした資源利用の中核をなすのが、古宍道湾、古中海湾を主要なテリトリーとした「内湾性漁業」の展開で、そのことは、遺跡から出土する魚貝類遺存体^⑨や漁撈具、丸木舟、石器組成によって端的に示されているよう。

前期初頭段階になると、九州地域や朝鮮地域等で出土する轟B式土器が、山陰地域の遺跡でもみられ、海洋を介した該期の広域的交流がうかがえる。本遺跡から北東約900mに位置する西川津遺跡

(海崎地区)³⁷で出土した前期初頭の土器群は、刺突文、押引文、隆帶文など多用な様相を示しており、九州縦B式の他、近畿地域前期初頭土器との関連も指摘されている。また、宍道湖北側に位置する佐太講武貝塚は、縄文前期に所属する日本海側では希少な貝塚として、早くから著名である³⁸。後続する羽島下層II式段階以降は、近畿、中国地域の齊一的な土器圈に包摂されていくが、九州曾畠式土器等も点的に散見出来る。宍道湖、中海沿岸では、中期の遺跡が比較的希薄であるのが特徴的で、該期の遺跡は米子市日久美遺跡³⁹、陰田遺跡⁴⁰、安来市島田黒谷I遺跡⁴¹等、中海南岸地域でのみしか認められていない。こうした早期から中期にかけての遺跡の消長については、水域沿岸部生産領域の生態系や植生等、食料資源獲得上の生態諸条件の推移に大きく規定されていたと予察され⁴²、今後の古環境復元成果が問題とされるところである。

後期以降は、古宍道湾の埋積進行による出雲平野形成に伴って、沖積地にも遺跡が形成される様になる。出雲平野では、例えば、湖陵町三部竹崎遺跡⁴³、出雲市三田谷遺跡⁴⁴、矢野遺跡⁴⁵、大社町原山遺跡⁴⁶等がある。また、中海北岸には、美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡⁴⁷、崎ヶ鼻洞窟遺跡⁴⁸、権現山洞窟遺跡⁴⁹、小浜洞窟遺跡⁵⁰等の海蝕洞窟遺跡が存在し、後期を中心とした遺物が出土している。近隣の朝鈴川流域、西川津遺跡、タテチョウ遺跡⁵¹からも後～晚期諸型式の土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、前記した西川津遺跡やタテチョウ遺跡が著名である。西川津遺跡では、前・中期の掘立柱建物跡、貯蔵穴、木製農耕具保管施設、貝塚等の検出をみており、前～後期における大量の土器、土笛、ヒヨウタン製容器、ゴホウラ製貝輪、結合式釣針等、特筆される遺物も出土している。こうした成果は、付近に、手工業生産、交易、祭祀等の機能を具備した「撲点的」集落⁵²の存在を想定させる。当地域における初期農耕の生成、進展の歴史的過程や撲点集落の様相、特質を追及する上で、重要な位置を占める資料である。

古墳時代の遺跡としては、本遺跡西側の菅田丘陵に、薬師山古墳⁵³、小丸山古墳⁵⁴、菅田丘古墳⁵⁵などが存在していたが、いずれも消滅している。薬師山古墳は、1922（大正11）年の夏、島根大学の前身である旧制松江高等学校の学生寮北方で土取り工事が行われた際に発見され、武田雄三氏の尽力によって出土遺物が保護された。本古墳は、一種の箱式棺を主体としたものと考えられ、徹製四乳鏡、刀、鉄鎌、滑石製有孔円板、須恵器等が出土している。

また、東側の金崎丘陵には、2基の前方後方墳と9基の方墳で構成される金崎古墳群⁵⁶が存在していたが、一部は破壊されて、現在は国指定の1～5号墳のみ残存している。このうち、1号墳は、1947（昭和22）年8月、梅原末治氏、山本清氏等によって発掘調査されている。全長約32mの前方後方墳で、竪穴式石室（竪穴系横口式石室とみる説もある）を主体部にもち、副葬品として徹製内行花文鏡1、勾玉（碧玉5、メノウ6）、碧玉管玉4、碧玉素玉2、ガラス小玉多数、滑石白玉多数、滑石製子持勾玉2、大刀1、須恵器（はそう4、長頸壺1、連管五壺1、高坏7、筒型器台1）等が発見されている。本墳及び薬師山古墳出土の須恵器は、山本清氏によって山陰須恵器編年I期の標式とされた⁵⁷。

また、朝鈴川流域の西川津遺跡、原の前遺跡⁵⁸、タテチョウ遺跡では該期にも遺物出土が認められ、付近に集落の存続していたことが推定される。その他、提廻遺跡⁵⁹では、低丘陵斜面から、18棟の竪穴住居跡が検出されており、該期集落の実相を知る上で貴重である⁶⁰。

奈良時代以降についても、前記した朝鈴川流域の遺跡で、大量の遺物出土をみている。このうち、原の前遺跡では、緻密な調査によって古墳前期から平安時代までの朝鈴川河道変遷が把握され、平

安時代の人形、箸（斎串）状木製品、舟形木製品等、律令祭祀に関わる遺物や長さ4.38mの橋脚等が出土している。

3 これまでの島根大学構内遺跡調査成果

島根大学構内遺跡は、松江市市街地の北東郊外、菅田丘陵と金崎丘陵の谷部にあり、丘陵裾部や低湿地一帯にかけての広範囲に形成され、前記した朝酌川流域、西川津遺跡、原の前遺跡、タテヨウ遺跡とも隣接している。

縄文海進期には海岸線がこの地域まで進入していたと考えられ、古宍道湾最奥部付近に相当する。また、低湿地遺跡であることから、植生変化や火山灰降下など、古環境変遷を復元する上で、有力な資料が得られることを可能としており、これに即応した人類遺跡の動態を具体的に追及する上で、格好のフィールドである。

本遺跡の調査は、1994年度以降継続的、広域的に進められており、第1次調査地（橋繩手地区）³²は、菅田丘陵の東側裾部と沖積地の変換部にあたる。特筆すべき成果は、アカホヤ火山灰層（約6300年前）を挟んで、下位から縄文早期末纖維土器が、上位から前期初頭縄B式土器が、層位的に分離して検出されていること³³や、前期初頭～前半に比定される丸木舟が出土していること等である。また、地質学的な調査成果によって、海面変動の具体的な様相を知る手がかりが得られ、上記の諸成果と併せて、文化内容と自然景観、生態系との相関を考察する資料となった³⁴。

第1次調査地の南約300mに位置する第2次調査地（諸田地区）³⁵では、水域の沿岸流によって、西側から東側へ伸長する砂州が検出されている。また、縄文前期と推定している海成層中からは、現地性のシジミ死滅貝が多量に検出されており、該期の水域が、シジミの再生産される砂泥底の水環境であったことが判明している。

参考文献

- (1) 徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨昂「中海・宍道湖の地史と環境変遷」『地質学論集』36 1990年
小畠浩『中国地方の地形』古今書院 1991年
- 徳岡隆夫・中村唯史他「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『汽水域研究』3 島根大学汽水域研究センター 1996年
林正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』3 島根県古代文化センター 1996年
山中義昭「山陰地方における弥生時代の海水準について—遺跡立地からの検討—」『島根大学地域資源環境学研究報告』15 1996年
- (2) 中村唯史「1 地理的環境」『島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- (3) 中村唯史・徳岡隆夫「宍道湖ボーリングSB1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討」『島根大学地球資源環境学研究報告』15 1996年
- (4) 新井房大・大場忠道他「後期第四紀における日本海の古環境」『第四紀研究』20-3 1981年
大場忠道「日本海の環境変化」『文明と環境』10 朝倉書店 1995年
- (5) 大西郁夫「中海・宍道湖底表層コアの花粉分析と環境変遷」『山陰地域研究（自然環境）』2 島根大学汽水域研究センター 1986年
大西郁夫・渡辺正巳「松江市西川津町タテヨウ遺跡の花粉分析」『山陰地域研究（自然環境）』3 1987年

- 大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳「松江市西川津遺跡の花粉分析」『山陰地域研究（自然環境）』5 1989年
 大西郁夫・干場秀樹・中谷紀子「宍道湖底下完新統の花粉群」『島根大学地質学研究報告』9 1990年
 大西郁夫「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉帯と植生変化」『地質学論集』39 1993年
 渡辺正巳・会下和宏「島根大学構内遺跡第1次発掘調査における花粉分析」『山陰地域研究（自然環境）』13 1997年
- (6) 松本岩雄「荒神谷遺跡出土の遺物と地域間交流」『古代王権と交流』7 名著出版 1995年
 渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」『同上』1995年
- (7) 田中義昭「加茂岩倉遺跡の発見とその意義」『公誌・歴史地名通信』22 1997年
 渡辺貞幸「青銅器大量埋納期の出雲」『東アジアの古代文化』93 1997年
- (8) 田中義昭・渡辺貞幸他「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- (9) 竹広文明「汽水域周辺の生業－繩文・弥生時代における中海・宍道湖周辺の漁撈活動－」『海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化－その地域性と一般性－』平成7年度報告・資料集 1996年
- ⑩ 内田律雄他「朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書I～V」島根県教育委員会 1980～1989年
 中川寧「朝鶴川中小河川改修工事区域内発掘調査概報 よみがえるあさくみがわのながれ」島根県教育委員会 1997年
- ⑪ 山本清「佐太講武貝塚」「講武村史」1955年
 赤澤秀則・竹広文明他「佐太講武貝塚発掘調査報告書」2 1994年
- ⑫ 米子市教育委員会他「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 目久美遺跡」1986年
- ⑬ 米子市教育委員会他「一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 除山」1984年
- ⑭ 島根県教育委員会他「才ノ神遺跡・普請場遺跡・鳥山黒谷I遺跡 一般国道9号（安米道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV」1994年
- ⑮ 会下和宏「島根大学構内遺跡にみる『縄文海進』とその社会的影響」『社会システム論集 島根大学法文学部紀要社会システム学科編』1 1996年
- ⑯ 野坂俊之・角田徳幸他「神南地区邑営國場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領川遺跡・三部竹崎遺跡」湖陵町教育委員会 1994年
- ⑰ 島根県教育委員会「出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」1980年
- ⑱ 池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」『島根考古学雑誌』4 1987年
- ⑲ 村上勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討－前期弥生土器を中心として－」『島根県立博物館調査報告』第2巻 1979年
- ⑳ 竹広文明他「島根半島洞窟遺跡の研究－島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査－」『汽水域研究』3 1996年
 竹広文明他「サルガ鼻燈台洞窟遺跡の第1次発掘調査」『汽水域研究』4 1997年
- ㉑ 佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡－中海沿岸縄文式文化の研究1－」『考古学』8-10 1937年
 山本清「美保關町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書』第3集 1967年
- ㉒ 文獻20に同じ
- ㉓ 山本清「山陰地方の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1967年
- ㉔ 柳浦俊一他「朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書I～IV」島根県教育委員会 1979～1992年
 囲崎雄二郎他「タテチヨウ遺跡発掘調査報告書」松江市文化財調査報告書第51集 松江市教育委員会 1992

年

- ④ 田中義昭「弥生時代摸点集落の再検討」「考古学と遺跡の保護 甘柏健先生退官記念論集」 1996年
　　山中義昭「弥生時代摸点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12 1996年
- ⑥ 山本清『島根大学敷地秦師山古墳遺物について』『島根大学論集（人文科学）』5 1955年
- ⑦ 穴道正平「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」『菅田考古』11 島根大学考古学研究会 1969年
- ⑧ 山本清『島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について』『山陰文化研究紀要』17 1977年
- ⑨ 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『山陰古墳文化の研究』 1971年
　　山本清『遺跡と歩んだ70年 古代出雲の考古学』ハーベスト出版 1995年
- 岡崎雄二郎他「史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書」松江市教育委員会 1978年
- ⑩ 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』1960年
- ⑪ 西尾克己他「朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡」島根県教育委員会 1995年
- ⑫ 萩雅人他「提廻遺跡」松江市教育委員会 1987年
- ⑬ 会下和宏「山陰地方における縄文早期末～前期初頭の土器様相について」『島根大学法文学部紀要文学科編』 23 1995年
- ⑭ 会下和宏編『島根大学構内遺跡第1次調査（横堤手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1番 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- ⑯ 会下和宏編『島根大学構内遺跡発掘調査概報II（諸田地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1996年



図3 1918(大正7)年の調査地周辺(1/20000)

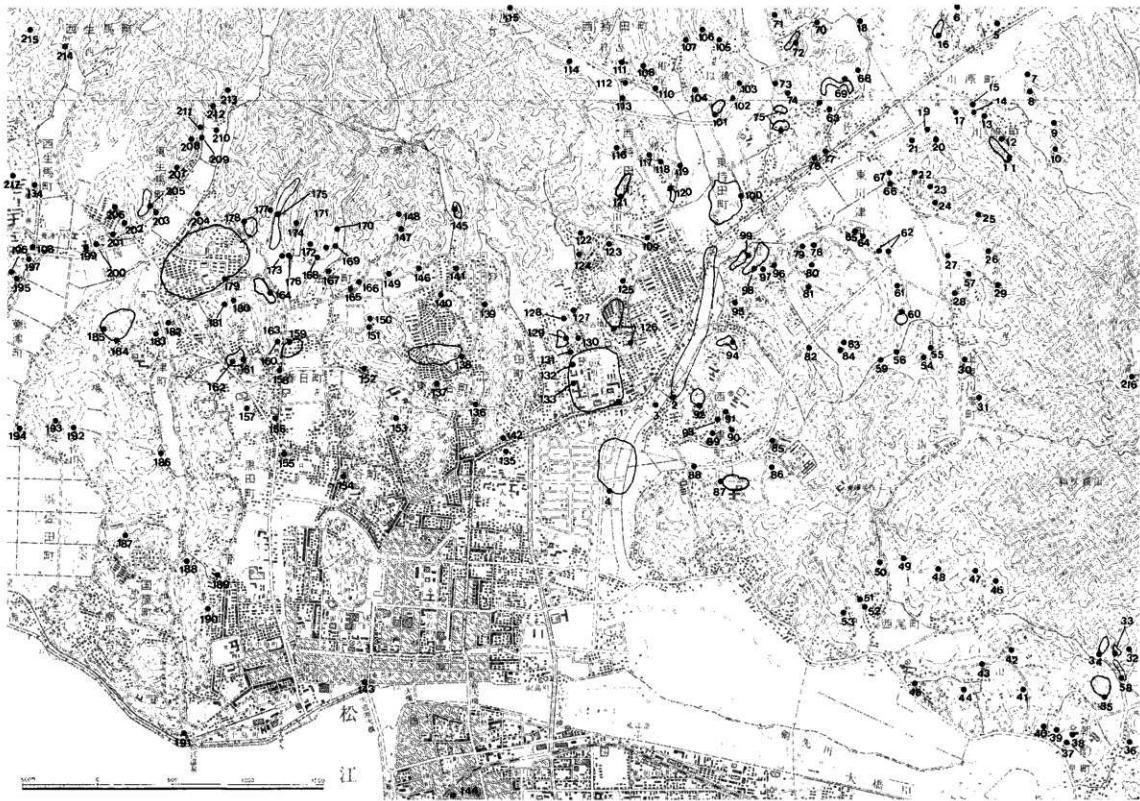


図4 島根大学周辺の遺跡（1/25000）

周辺遺跡

1. 島根大学構内遺跡
2. 西川津遺跡
3. 原の前遺跡
4. タテチョウ遺跡
5. 流山遺跡
6. 小林古墳群
7. I 2 4 古墳群
8. I 1 8 古墳群
9. I 2 7 遺跡
10. I 1 9 遺跡
11. 後谷古墳群
12. 荒神古墳
13. I 2 0 遺跡
14. I 2 2 遺跡
15. 川原庄の上横穴群
16. 香々廻古墳群
17. I 2 1 遺跡
18. 常熊古墳
19. 小松谷古墳
20. J 5 7 古墳群
21. J 5 5 古墳
22. J 3 7 古墳
23. J 3 6 古墳
24. J 3 5 遺跡
25. 仁王ヶ谷横穴群
26. 向屋敷横穴群
27. J 1 8 遺跡
28. 西宗寺古墳
29. 山根横穴
30. 嵩山麓遺跡
31. 卷遺跡
32. 九日宮古墳群
33. 運倉横穴群
34. 藤谷B遺跡
35. 那原古墳群
36. 朝酌上神社跡古墳
37. 朝酌小学校前古墳
38. 朝酌小学校校庭古墳
39. 新山遺跡
40. 松ヶ鼻墓跡
41. 間谷遺跡
42. 草安切遺跡
43. 廟所古墳
44. 観音山古墳
45. 南尾横穴
46. 安藤主遺跡
47. 米坂遺跡
48. 米坂古墳群
49. 桐尾遺跡
50. G 2 3 遺跡
51. G 2 8 遺跡
52. G 2 2 遺跡
53. G 2 1 遺跡
54. J 2 6 古墳群
55. J 3 1 遺跡
56. J 2 1 古墳
57. 葉佐馬古墳
58. 藤谷A遺跡
59. J 3 2 遺跡
60. J 2 2 古墳群
61. J 2 7 古墳群
62. 八色谷遺跡
63. 才ノ神遺跡
64. 川津第1 1号墳
65. 川津第1 2号墳
66. 中尾古墳
67. J 5 8 遺跡
68. I 4 8 古墳
69. 納佐池遺跡
70. I 4 9 古墳
71. I 4 5 遺跡
72. 石野古墳群
73. 立花横穴
74. 谷田遺跡
75. 太田古墳群
76. 納佐遺跡
77. I 4 6 遺跡
78. 後田古墳
79. 前田古墳
80. 家の上古墳
81. 井上古墳
82. 一の谷古墳
83. 祖子分長池古墳
84. 祖子分胡麻煙遺跡
85. 荻窪遺跡
86. J 1 6 遺跡
87. 堤廻遺跡
88. 橋本遺跡
89. 萩丘遺跡
90. 萩古墳群
91. 山崎古墳
92. 馬込山古墳群
93. 旧川津小学校裏古墳
94. 空山古墳群
95. 古屋敷古墳
96. 貝崎遺跡
97. J 4 3 古墳
98. 貝崎古墳群
99. 西川津貝崎遺跡
100. 持田川流域条里制遺跡
101. 小丸山古墳群
102. I 4 4 遺跡
103. 城の越横穴
104. 松の前古墳
105. I 4 3 遺跡
106. 鎌治屋谷横穴
107. 穴の口横穴群
108. 洞泉寺裏古墳
109. J 5 3 古墳
110. I 4 0 遺跡
111. 堀の内古墳
112. I 3 9 遺跡
113. I 4 2 遺跡
114. I 3 7 遺跡
115. 金刀比利羅谷古墳
116. 国石古墳
117. 尾山横穴群
118. 大源古墳
119. I 4 1 遺跡
120. 和田上遺跡
121. 宮垣古墳群
122. 深町横穴
123. J 5 4 古墳
124. 深町古墳群
125. 福山古墳
126. 金崎古墳群
127. 上浜弓古墳群
128. 浜弓古墳群
129. 普田ヶ丘古墳群
130. 宮山古墳群
131. 小丸山古墳
132. 普田丘古墳
133. 薬師山古墳
134. 元井出遺跡
135. 赤崎横穴
136. 桜崎横穴
137. ひのさん山横穴群
138. 折廻古墳群
139. 松ヶ峠古墳
140. 岡田薬師古墳
141. 二反田古墓
142. 切通横穴
143. 茶町遺跡
144. 人參方跡
145. 白鹿谷遺跡
146. なつめ谷荒神古墳
147. コゴメダカ山遺跡
148. 長谷窯跡（推定地）
149. 長谷藏徳神古墳
150. 栗元古墳
151. 栗元横穴
152. 煙舎倉古墳
153. K 3 4 古墳
154. 赤山横穴群
155. 摩利支天山横穴
156. 法吉小学校裏山横穴群
157. 春日遺跡
158. 中代遺跡
159. 法吉遺跡
160. 石在経塚
161. 久米横穴群
162. 比津が崎横穴群
163. 唐梅古墳群
164. 久米古墳群
165. 山積経塚群
166. 山積古墳群
167. 吉岡町之助宅前古墳
168. 下り松II遺跡
169. 鶯谷遺跡
170. 下り松I遺跡
171. 伝宇牟迦比姫命御陵古墳
172. 新宮古墳
173. 塚山古墳
174. 松崎金一郎所有山林古墳
175. 山中谷遺跡
176. 下り松遺跡
177. 下り松窯跡
178. 田中谷古墳群
179. 月廻横穴群
180. 久米遺跡
181. 久米第2横穴群
182. ひやくだ横穴
183. 水酌崎横穴群
184. ゴルフ場内横穴群
185. ゴルフ場内古墳群
186. 小丸山古墳
187. K 3 8 古墳

188. K 3 3 古墳 189. とねり坂横穴群 190. K 3 2 古墳 191. 天倫寺前遺跡
192. 小池谷横穴群 193. 殿山横穴群 194. 東前横穴群 195. L 3 6 古墳 196. 大北古墳
197. 名尾荒神古墳 198. 名尾丘古墳 199. かいつき山古墳群 200. 井原古墳 201. 山玉神社跡
202. 山王古墳 203. 櫻本古墳 204. 大門遺跡 205. 櫻本古墳群 206. 名尾遺跡 207. 平遺跡
208. 法恩寺遺跡 209. 法恩寺瓦窯跡 210. 宮ノ下遺跡 211. 東生馬遺跡 212. 邊山横穴群
213. 生馬神社旧社地 214. 大岩遺跡 215. 郷戸横穴群 216. 布自根見烽跡
217. 高専敷地内古墳群

第3章 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.0m前後下までの現代盛土を重機によって排除した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げた。包含層は、I層からVI層までに大別され、層厚約4m以上である。

遺物の取り上げにあたっては、調査区の西端ライン、南端ラインを基準として4m四方のグリッドで区分し、出土したグリッド名を記録した。グリッド名は、東西ラインを北からA～G、南北ラインを西から1～4とし、たとえば東西ラインのA、南北ラインの2に位置するグリッドは「A 2」グリッドと呼称した(図15)。また、縄文～弥生時代の遺物に関しては、グリッド名に加え、出土地点とレベルを全て記録した。流木や倒木といった自然遺物は、1/20面図に図示し、レベルを記録した後、全て取り上げ、樹種鑑定を行った。

また、適時、研究員による調査指導会を行い、調査方法、留意点を再検討しながら作業を進めた。

その他、花粉・珪藻分析、硫黄・石膏分析といった自然科学的調査も行い、考古学以外の情報についても総合的に得られるよう務めた。

2 調査の経過

調査面積は約450m²、調査期間は1996年2月22日から6月11日まで、約4ヶ月を費やした。

最初に、現代盛土を重機で排除した後、下位の遺物包含層、遺構面について、精査を開始した。

その結果、I層は近代の旧水田土壤、II層は古墳～奈良時代、中世の遺物包含層、IIIa層は古墳時代の遺物包含層であることが判明した。

IIIb層・IV層の上面で、弥生中期初頭の遺物を包含する流路状遺構01、溝02等を検出した為、4月10日、南側から遺構面の全景写真を撮影した。4月16日に開いた調査指導会では、検出したこれらの遺構の性格や下位層の堆積環境、供給源等についてが検討課題となった。

下位のIV層、V層の掘り下げは、粘土が硬く縮まっており、かなり困難な作業となった。

VIa層上面から自然流路を検出、記録した後、さらに下位層を掘り下げた結果、縄文前期に比定されるVId層最上部から、櫛、ヤス柄と推定される棒状木製品が完形の状態で良好に検出され、急速、5月17日に記者発表、5月18日に市民向け現地説明会を行った。

さらに下位層について安全面に充分配慮しながら、最終的に、地表下約6mのIX層(基盤層)上面まで掘り下げ、6月7日、南側から全景写真を撮影した。セクション図、平面測量図の作成、土壤サンプルの採取、地質学的調査等を行った後、6月11日、全ての作業を終了した。

第4章 基本層序

1 層序

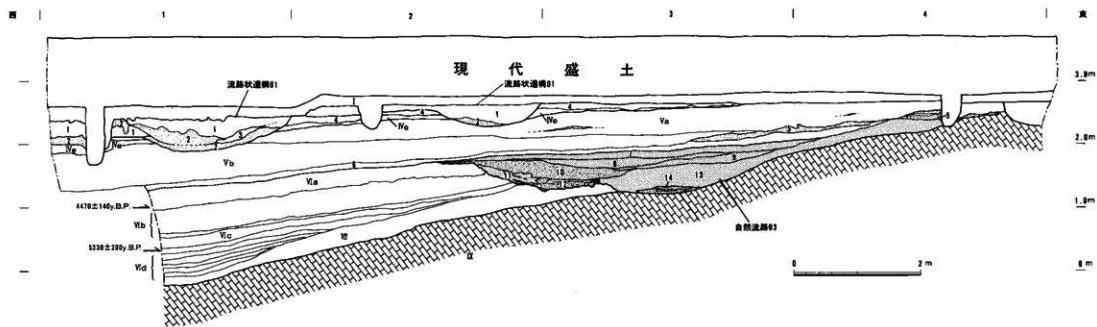
図5は、調査区北壁断面図、図6は、基盤層の傾斜に平行する様に、調査区の北東から南西方向へ残したセクション（図15のspa-a'間）の南側断面図である。

現地表から約1.0m前後下までが現代盛土、その下位が近代以前の堆積層で、堆積順序とは逆に、上位層からI層～IX層に大別した。堆積層の識別と区分は、基本的に、現場作業段階での層相の観察や出土遺物が示す時期をもとに判断・決定し、なおかつ堆積環境の変遷を叙述し易くさせる点も考慮して命名している。

基盤層（IX層）は、概して、北東側から南西側へ傾斜しており、上位層も、これを反映して同様の傾斜堆積を示している。

堆積層の概要（図5・6、巻頭図版2）

- I層 グライ化した近代の旧水田土壤で、しまった灰色泥土。主として近世末～近代の陶磁器を包含する。
- II層 灰色泥土。主として古墳・奈良時代の須恵器、土師器、円筒埴輪等を包含するが、15世紀、備前の底部等も出土していることから、中世の2次堆積層と推定される。
- IIIa層 黄褐色粘土。古墳時代の須恵器、円筒埴輪などを包含する。
- IIIb層 黄褐色粘土。上位のIIIa層と同質の層相で、層理面は判然としない。上面で弥生中期初頭と推定される流路状遺構01、溝02などを検出している。
- IVa層 黒褐色粘土。
- IVb層 黄褐色粘土。
- IVc層 黑褐色粘土。
- IVd層 黄褐色粘土。
- IVE層 黑褐色粘土。
- Va層 灰白色粘土。酸化鉄分含む。遺物なし。
- Vb層 灰白色粘土。酸化鉄分含まない。遺物なし。
- VIA層 黒色腐植土。遺物なし。上面で、自然流路03を検出している。また、上部には、調査区南半部で厚さ0.3cm以下の三瓶角井降下火山灰層（第2ハイカ層）¹¹が部分的に挟在する。
- VId層 最下部に包含されていた自然木材を試料とし、¹⁴C年代測定を行った結果は、4470±140yr.B.P.を示している。
- VIb層 黒色腐植土と黒褐色泥土の互層。遺物なし。
- VIc層 黑褐色泥土。遺物なし。
- VId層 黑色腐植土と黒褐色泥土の互層。木製品、縄文土器出土。最上部に包含されていた自然木材を試料として、¹⁴C年代測定を行った結果は、5330±200yr.B.P.を示している。
- VIa～d層からは、全般にバブルウォール型火山ガラスが含まれ、特に、VId層最下部



流路状造構01

1. しまって固い黄褐色粘土
2. 黄褐色粗砂（径2～5mmの小礫、炭化物含む）
3. 黄褐色粘土（径2mmの小礫含む）

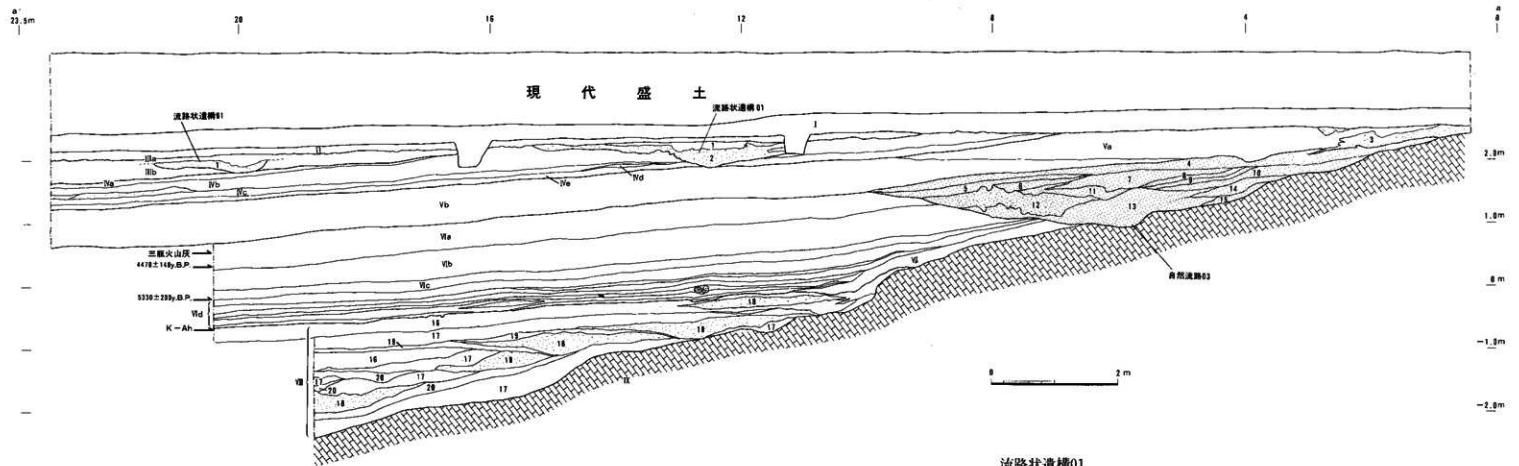
自然流路03

4. 暗オリーブ褐色粘土
5. にぶい黄橙色粗砂（径2～6mmの白色小礫含む）
6. 黒褐色粘土

自然流路03

7. 黑褐色粘土
8. 暗灰黄色粘土
9. 暗灰黄色粘土
10. 灰黄褐色粗砂（径2～10mmの小礫含む）
11. 黑褐色泥土（有機物、木片含む）
12. 暗オリーブ褐色粗砂
13. 黑褐色泥土（有機物、木片含む）
14. 黑褐色粗砂

図5 調査区北壁断面図 (1/60)



流路状遺構01

1. しまって固い、黄褐色粘土
2. 黄褐色粗砂（径2～5mmの白色小礫、炭化物含む）

3. にぶい黄褐色粗砂（径2～6mmの白色小礫含む）

自然流路03

4. 黒褐色粘土（図5～7と同じ）
5. 暗灰黄色粘土
6. 黑褐色砂泥
7. 暗灰黄色粘土
8. 暗灰黄色粘土（図5～9と同じ）
9. 黑褐色泥土（有機物含む）
10. 黑褐色泥土（有機物含む）
11. 黑褐色泥砂（有機物含む）
12. 灰黃褐色粗砂（径2～10mmの小礫含む）
13. 黑褐色泥土（有機物、木片含む）
14. 黑褐色砂泥（有機物含む）
15. 黑褐色泥土上と基盤層粘土が混在

図6 a-a'ライン断面図 (1/60)

では、全砂粒中の約半分を占める程、最も多く濃集している。アカホヤ火山ガラスが二次的に含まれていると考えられる。

VII層 黒褐色粘土。遺物なし。VII層は、一部でVIII層の上位に重なるが、VIII層最上部とはほぼ同時堆積と想定される。

VIII層 黄灰色粘土、暗灰黄色粘土、オリーブ褐色粗砂、黒褐色泥土、黒褐色粘土から成る。遺物なし。上位VIId層との層理面にアカホヤ火山灰二次堆積物、VIII層最上部にアカホヤ火山灰堆積物が点的に挟在する。

16 黄灰色粘土

17 暗灰黄色粘土

18 オリーブ褐色粗砂

19 黒褐色泥土

20 黒褐色粘土

IX層 基盤となる玄武岩が粘土化した層。緑灰色粘土。概して北東側から南西側へ傾斜下降している。調査区南半部では、標高0～-0.7m付近と標高-1.1～-1.8m付近において基盤層が抉られる様に、傾斜変換している箇所が認められる。

推定される各層位の堆積年代を整理すると、I層が近代、II層が中世、IIIa層が古墳時代、IIIb層が弥生中期初頭以前、VIa層が縄文前期末ないし中期、VIId層最上部が縄文前期後半、VIId層最下部、VIII層が縄文前期初頭、VIII層が縄文早期末となる。IIIb層とIV層の上面は、同一の生活面をなし、弥生中期初頭の流路状遺構01と溝02が検出されている。また、VIa層上面からは、縄文前期末・中期以降の可能性をもつ自然流路03が検出されている。

なお、第6章1で地質的に検討した層相、堆積環境が詳述してあるので、あわせて参照されたい。

注

(1) 三瓶角井跡下火山灰(第2ハイカ層)は、これまでの¹⁴C年代測定で、4780±100yr.B.P.を示している。また、島根県頓原町板屋田遺跡の層位的成果で、前期末里木I式と大歳山式の間に降下したことが判明している。

角田徳幸「島根県飯石郡頓原町板屋田遺跡—三瓶山火山灰と縄文時代の遺跡—」『月刊考古学ジャーナル』9
No421 1997年

角田徳幸「32 烏根県飯石郡頓原町板屋田遺跡」『日本考古学年報48(1995年度版)』1997年

2 ^{14}C 年代測定

本遺跡から出土した材を試料として、 ^{14}C (放射性炭素) 年代測定を鳥根大学汽水城研究センターに依頼した。

^{14}C 年代測定は、いずれもベンゼン液体シンチレーション法による。前処理として、試料の木片は、水洗いの後、水酸化ナトリウム溶液中で煮沸しフミン酸を抽出、水洗い乾燥後、400°Cで2時間蒸焼きにしてある。スタンダードには NBS 硝酸 (SRM4990C)、測定は低レベル液体シンチレーションカウンター (Wallac社、1220QuantalusTM) を使用し、 ^{14}C の半減期を5568年として年代を求めている。測定値は、y.B.P. (years Before Presentの略号) で表示してあり、西暦1950年を基準に起算してある。

試料は、いずれも埋没していた自然木材片 (図7・8) で、帰属層準は、SUJ-192がVIa層最下部、SUJ-193がVId層最上部である。SUJ-193は、権、棒状木製品出土位置に隣接した同一層準に帰属するもので、本測定結果は、木製品の埋没年代を想定する上で参考となる。

表1 ^{14}C 年代測定値

コード番号	試料出土地区	出土層位	試料	年 代
SUJ-192	B 1	VIa層最下部	木材	4470±140y.B.P.
SUJ-193	B 2	VId層最上部	木材	5330±200y.B.P.

第5章 遺構と遺物

1 繩文時代の自然流路と遺物

(1) VI層・VII層・VIII層・IX層上面の縄文土器・石器(図10・図版4-1)

VI層、VII層、IX層上面からは、縄文土器片、石器、拳大～人頭大の自然礫が出土している。また、図示していないが、VIII層からも自然礫の出土をみている。出土層位は、1、2、5がVIa層、3がVII層、4がIX層上面である。これらは、いずれも腐植土、泥上、粘土層中で検出されていることから、プライマリーな産状と推定され、人為的に水域の汀線付近に運棄されたものである可能性がある。総じて、土器、石器の出土数は希薄である。

1は、縄文土器片で、外面が条痕調整、内面がナデ調整である。内外面とも二次的な煤が付着している。2は、縄文土器片で、外面が条痕調整、内面がナデ調整である。内面に二次的な煤が付着している。棒状木製品出土位置の南隣から出土している。

3は、人為的に割られたと推定される直方体状の礫である。

4は、長軸10.1cm、短軸9.3cm、厚さ6.2cmの円礫で、磨石と推定している。斑状輝石安山岩製で、周辺では、島根半島に産出する。

5は、黒曜石製の剝片。

(2) VIa層上面の自然流路と縄文土器・石器

自然流路03(図7・図版3-1)

自然流路03は、調査区北東部、A3・4グリッドからE3・4グリッドにかけて北西から南東方向に検出されている。下底面の最深部は、標高0.9m。VIa層上面を切って流れおり、層位関係から縄文前期末・中期以降に属する。埋土は、泥上と粗砂からなり、埋積土を切り込んで再堆積しており、流路が、画期を有しながら数回に渡って機能していたと想定される。

下底面からは、縄文土器片、石器、拳大～人頭大の自然礫等が出土しており、いずれも人為的に投げ込まれたものと推定出来る。埋土からは、大量の自然木、種実が出土している。

自然流路03出土土器・石器(図11・図版4-2)

1、2、3は縄文土器片。1、2は内外面ともナデ調整、3は内外面とも条痕調整である。1、2、3とも内面に煤が付着している。

4は、扁平な隅丸方形形状の礫の四周を打ち欠いて製作した石錐。長軸7.5cm、短軸6.4cm、厚さ1.7cmを測る。重量は、85g。

5、6は、人為的に割られたと推定される礫。7、8は黒曜石製の剝片である。

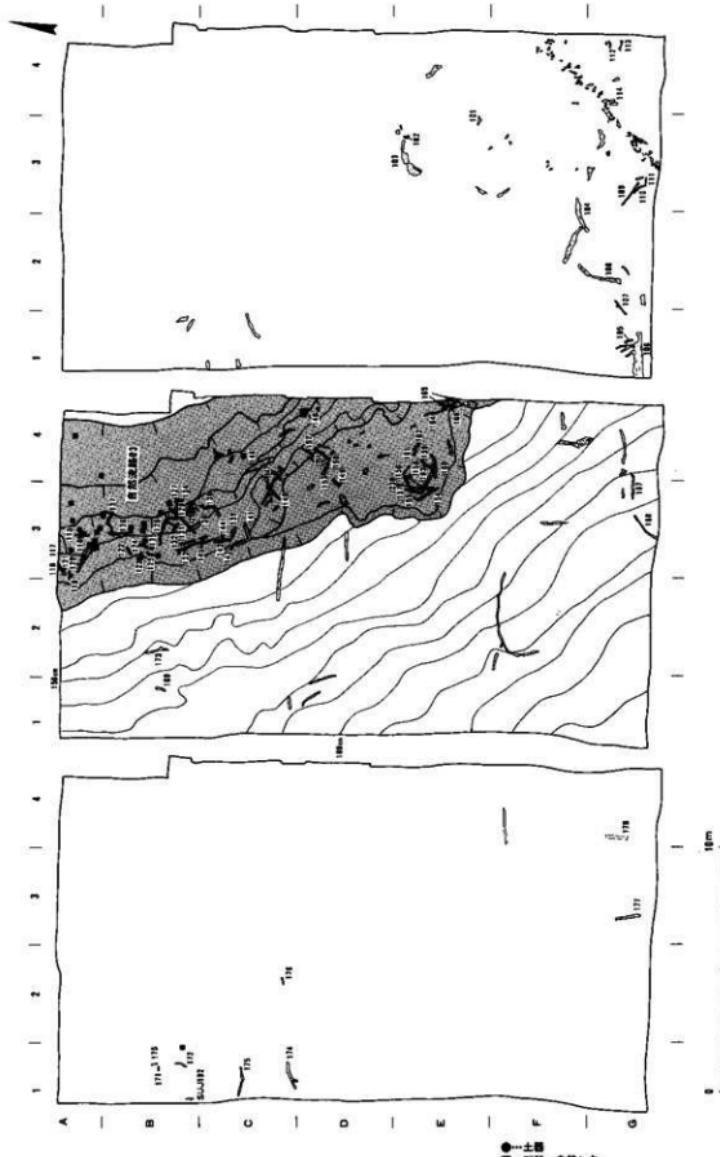


図7 遺物出土分布図（その1、1/200）

●…土器
■…石器・自然レキ
材に付した数字は表7のSHM番号を示す。

1. Vb層最下部出土遺物
2. Va層上面等高線と出土遺物
自然流路03出土遺物

3. Va層出土遺物

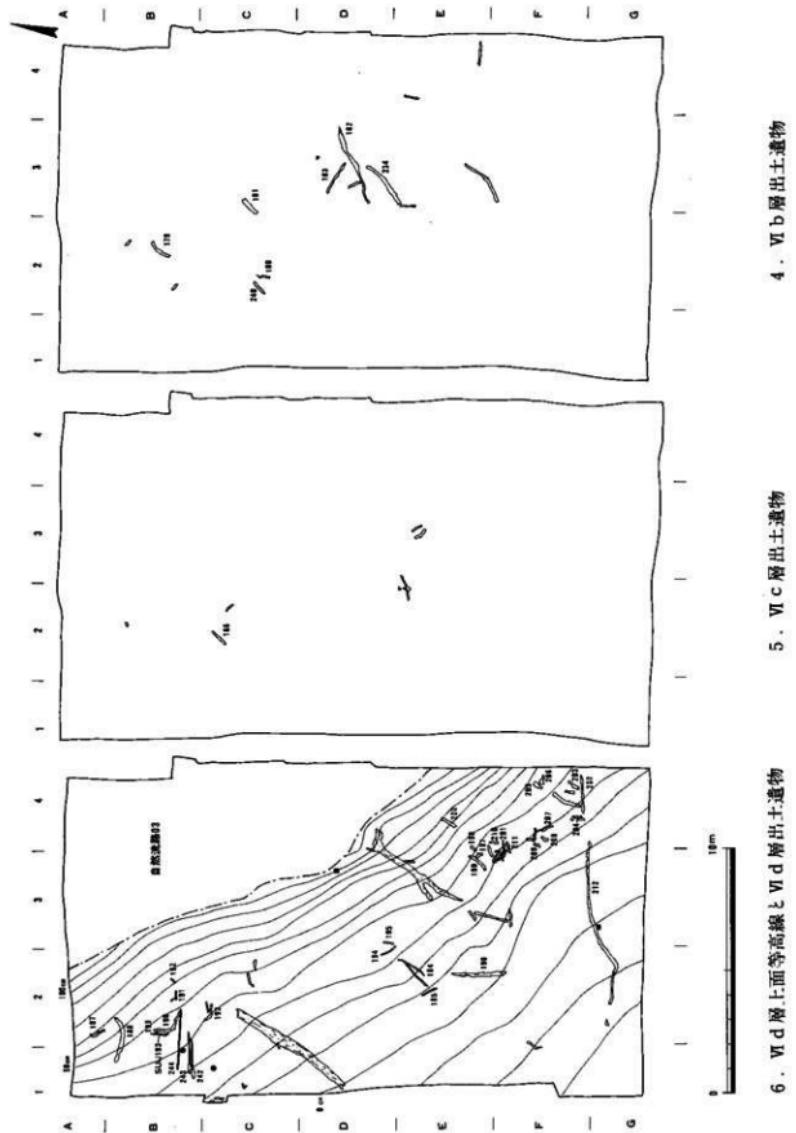
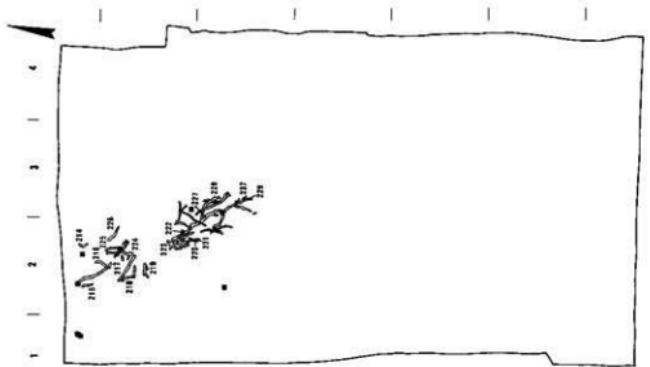
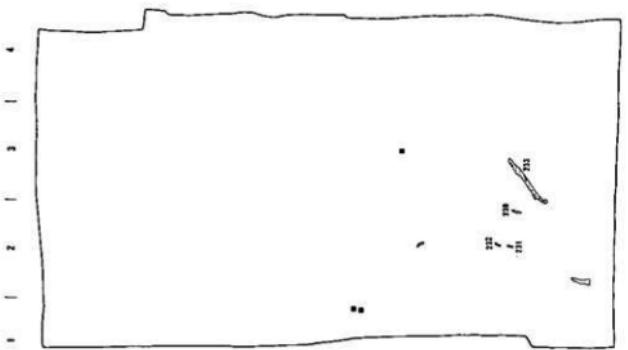


図6 遺物出土分布図（その2、1/200）

7. VII層出土遺物



8. VI層出土遺物



9. IX層上面等高線と出土遺物

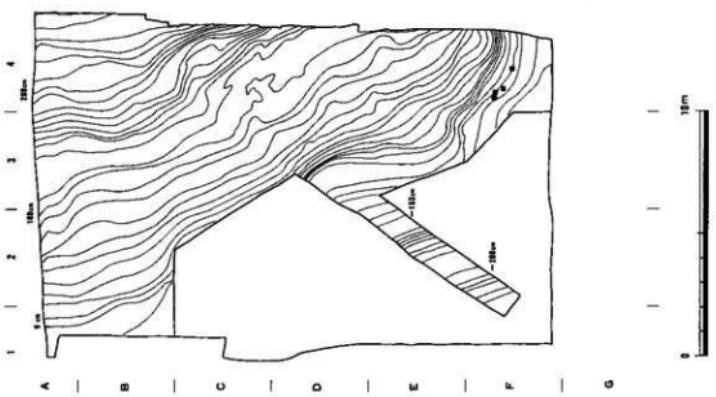


図8 遺物出土分布図（その3、1/200）

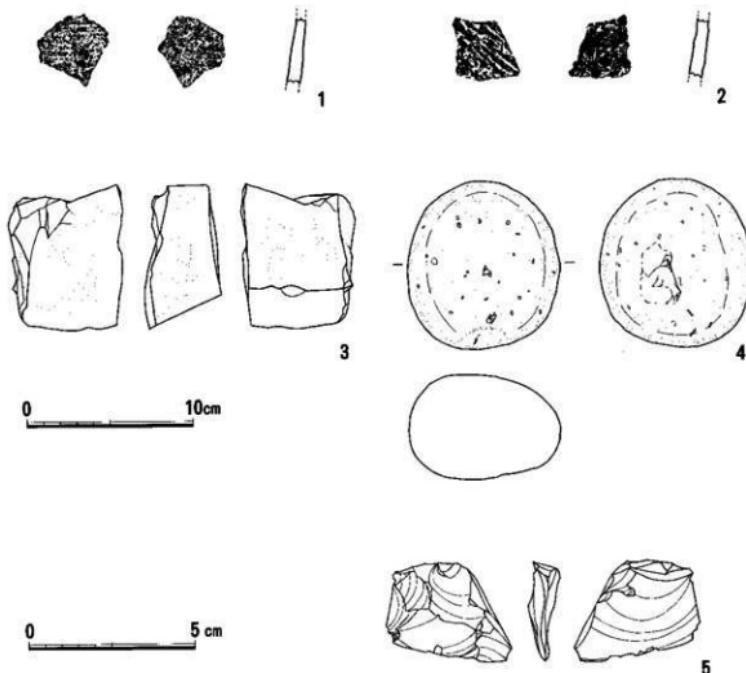


図10 VI・VII・IX層上面出土遺物（1／3・2／3）

（3）木製品

櫂・棒状木製品（図8・12、巻頭図版1・図版2）

木製品は、櫂2本、棒状木製品1本が完形で出土している。

出土位置は、調査区北西部隅のB1・2グリッドで、VI d層最上部、上位VI c層との層理面付近に埋った状態で検出されている。本製品は、アカホヤ火山灰層上位出土で、同一層位出土木材¹⁴C年代測定値が¹⁴ 5330±200y.B.P.を示していることから、概ね、前期後半の所産と推定出来る。VI d層は北東から南西方向へ傾斜しており、木製品は、この裾部において、長軸を傾斜に対し約30°（等高線に対し約60°）振る状態で検出されている。また、2本の櫂と棒状木製品が、ほぼ平行に向きをあわせて出土している（図8-6、棒状木製品：244、櫂A：243、櫂B：242）ことから、そろえて置かれた状態のまま、ほとんど移動することなく埋没したものと考えられる。

これまでの調査の知見から、木製品が置かれた時期の出土地が、内湾の汀線付近とみられることを考慮すると、この木製品が櫂であると確定してよく、棒状木製品もヤス柄といった漁撈具と推定できる。さらに、想像を膨らませるなら、この3者がセットとして、ひとつの丸木舟なし筏で使

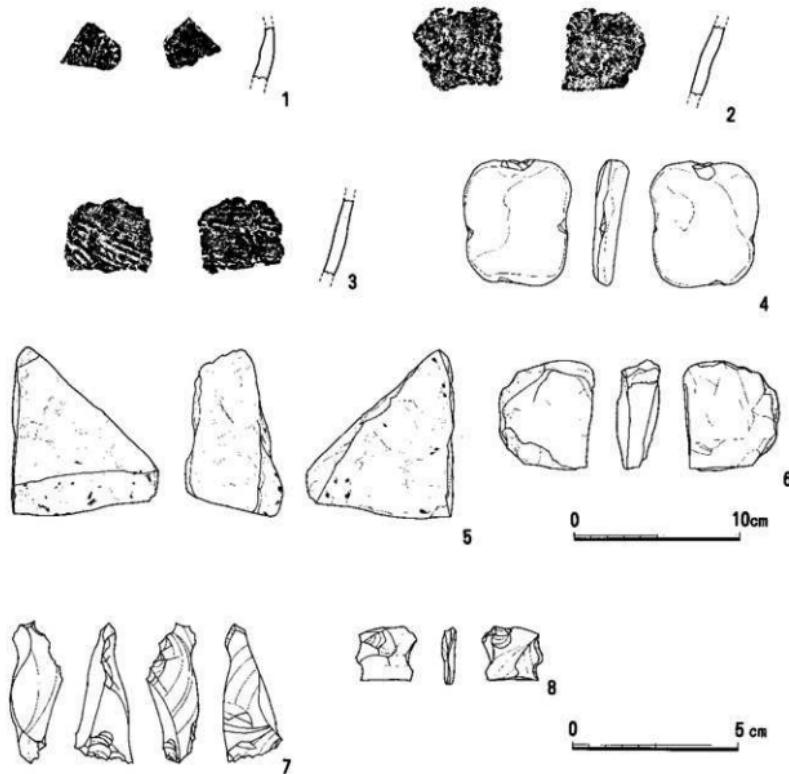


図11 自然流路03（下底面）出土遺物（1／3・2／3）

用されていた可能性が想定される。

また、木製品の保存状態がきわめて良好であることから、出土位置が、湿地状の場所で飽水状態のまま埋没し腐植を免れた可能性が推定される。

検出時の木製品上面の標高は、棒状木製品の東側の柄先端部が標高0.57m、西側の柄先端部が標高0.31m、櫂Aの柄先端部が標高0.45m、水搔き部先端が標高0.27m、櫂Bの柄先端部が標高0.41m、水搔き部先端が標高0.26mである。

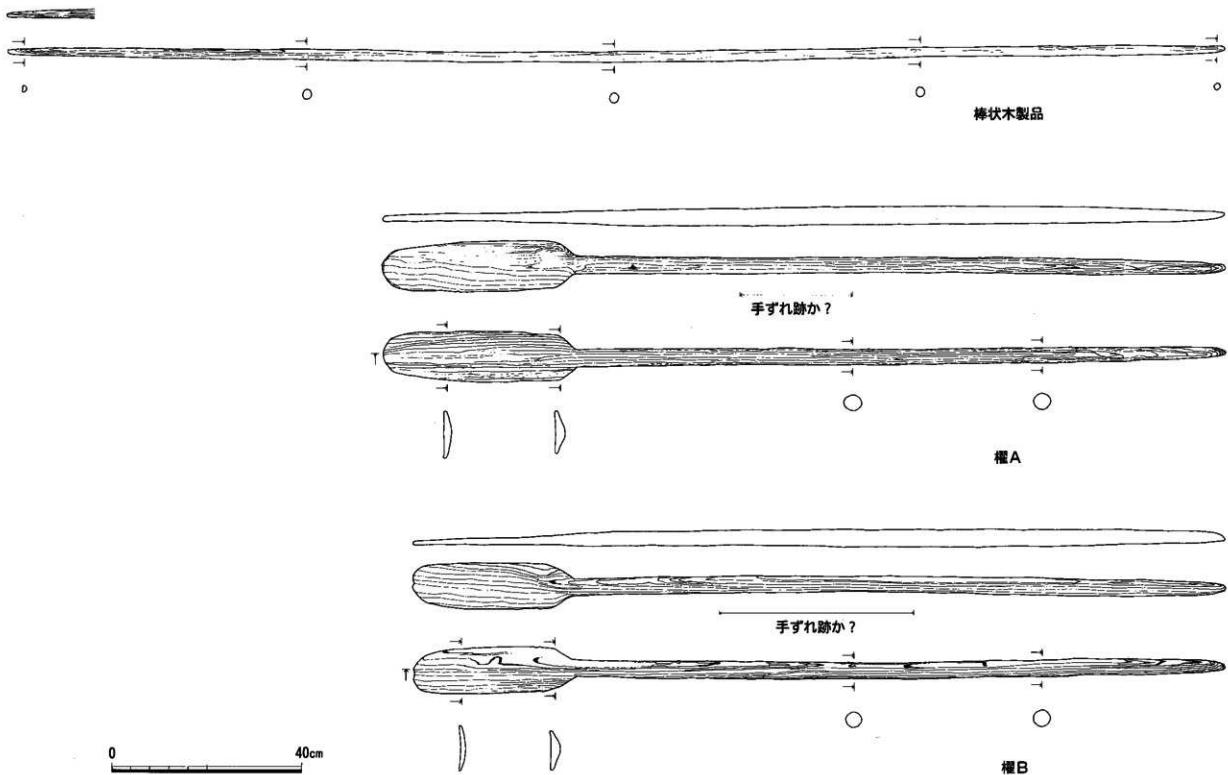


図12 櫛・棒状木製品 (1/8)

部位の法量は以下の通りである。

表2 標・棒状木製品法量計測値

	全長	最大径	水搔き部の長さ	水搔き部の幅
標A	178cm	3.5cm	42cm	11cm
標B	172cm	3.5cm	33cm	10cm
棒状木製品	258.5cm	2.5cm		

標は、一つの原材から柄部と水搔き部を成形した「一本式」である。形状は、全長に比して柄部の長いことが特徴的で、柄部の先端部にグリップが付随せず、尖り気味に丸くおさまることから、この部分が別の用途として機能したとも想定出来る。また、柄部の中央より水搔き部寄り部分が若干細まっており、使用時の手ずれによって摩減した可能性がある。水搔き部は、柄部との区分が明瞭で、片面のみが平坦ないし内湾する形状を呈しており、舟の推進具として、水をつかみ易い、より機能的な構造となっている。表面は、一部に焦痕をとどめ、削出の後、磨きないし焦がし磨きを施し、平滑に仕上げてある。材質は、スギである。

棒状木製品は、両端が尖り気味に丸くおさまる。両端部とも、横断面が半円状になる様に平坦面が確保されており、特に図12の左端側はより広範囲に認められる。これらの部分にヤス等を着装して、あるいはそのままの状態で、あるいはさらに短い柄をソケット状に組み足す等して使用したと考えられる。表面は、標と同様、一部に焦痕をとどめ、削出の後、磨きないし焦がし磨きを施し、平滑に仕上げてある。材質はスギである。

その他の木製品（図13・14、図版5）

人工的な切断痕、切削痕や焦痕が認められるものを図化した。出土層位は、図13-1がVI d層、図13-2～3が自然流路03埋土内、図14-1がV b層最下部内のF～G 4グリッド東壁付近範囲のみに挿在する砂層中から。

図13-1は、長さ65.4cm、幅10.0cmの木片。円材の周縁部を半截し、両端を尖り気味に丸く削った舟形状を呈している。外面に焦痕を留める。図13-2は、長さ16.0cm、幅3.8cmの角材で、左面の数ヶ所において、打ち削る際の工具が停止した痕跡が認められる。下端部は切断してある。図13-3は、長さ32.6cmのミカン割り状に打ち削られた板材。図14-1は、破損が激しく、2個体に分かれているが、同じ地点でまとめて出土しており、元は同一個体である。角材と扁平な板材とからなり、復元すると約文字状の形態になるとされる。数ヶ所に焦痕を残す。

（4）自然遺物

自然木と種実がある。動物遺体の検出はみなかった。

自然木（図7～9）

特に加工痕のない材化石は、焦痕が認められても、自然木に含めた。V b層最下部、自然流路03、VI層、VII層、VIII層で大量に出土している。本層位における材化石の多寡は、埋没時の飽水状態の堆積環境が大きく寄与していると考えられる。このうち、自然流路03埋土内が最も出土量が多い。VI

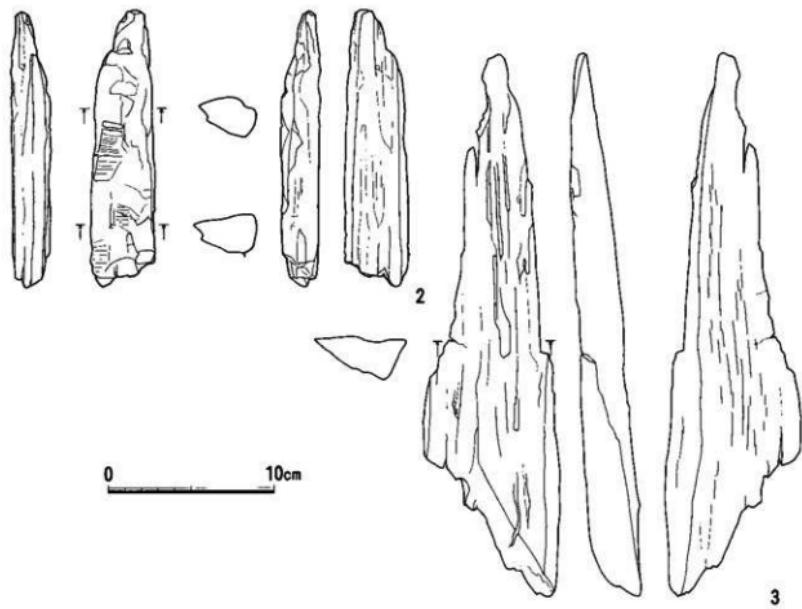
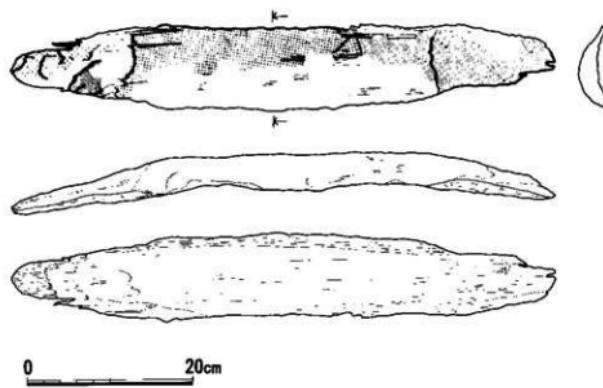


図13 木製品 (1/6・1/3)

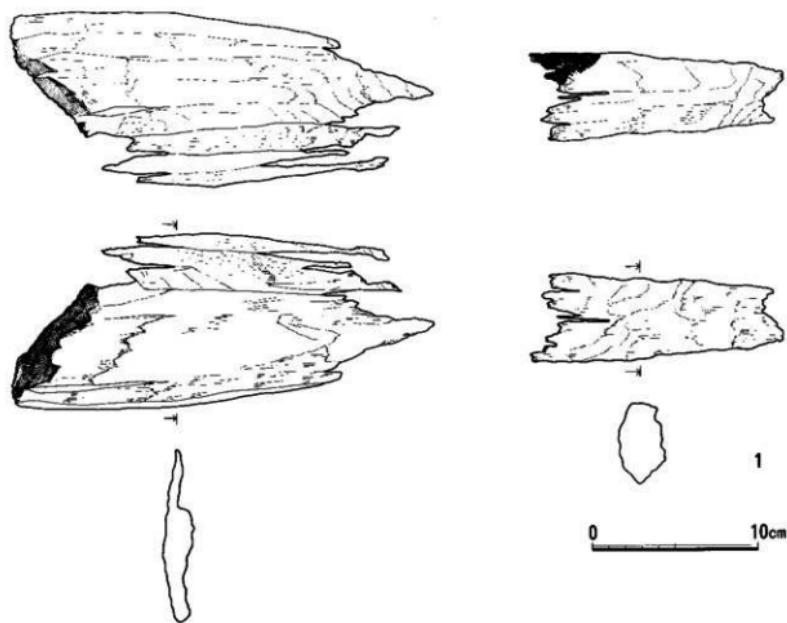


図14 木製品（1／3）

層内でVId層に比較的出土量が多いのは、層厚が相対的に厚いことに起因する。

層位によっては、平面分布の集積密度に高低が認められる。Vb層最下部では、調査区南東部に、VII層では調査区北西部に集積している。なお、図7-1-114（Vb層最下部）は、倒木の幹部分が腐植し、枝付け根部分のみ残存した結果、見かけ状、列をなした様に検出されている。また、VIa・b・d層出土の自然木は、総じて傾斜に対し長軸を一致（等高線に直交）させる定方向の配列性が認められる。自然木は、水域側から漂着したものと、丘陵上方から流れ込んだ、ないし人為的に遺棄されたものがあると想定出来るが、その区別は判然としない。焦痕のあるものは、伐採林が破棄された可能性を示していよう。

自然木の樹種については、「第6章3」で詳述してあるので、参照されたい。

種実

種実は、調査の過程で現地で認識し、考古遺物と同様に採取したものと、持ち帰った堆積物を水洗選別した結果、検出したものがある。水洗選別を行った層位は、VIa～d層、VII層、自然流路03埋土内から、比較的まとまって検出している。

種実の種類、内訳については、「第6章4 大型植物遺体」で後述する。

2 弥生時代以降の遺構と遺物

(1) 「III b層・IV層」上面の遺構と遺物

遺構は、「III b層・IV層」上面で弥生中期初頭と推定される杭1本、流路状遺構01と溝02を検出している。なお、南西側のみ堆積するIII b層とIV層の上面は連続した同一遺構面である。

流路状遺構01(図15・18、図版1)

調査区の北西隅A 1・2グリッドから、やや東側に向きをカーブさせながら南東方向に伸びる。平面形態から、複数の流路が重複している可能性があるものの、セクション断面の観察からは、切りあいは判然としない。検出時の幅は、狭い箇所で約3.3m前後、最大で4m以上、深さは深い箇所で約50cm前後である。底面は凹凸がある。埋土は、黄褐色粗砂と黄褐色粘土で、砂層は水流に伴う運搬によって堆積したものと考えられる。弥生中期初頭の土器片を包含しており、比較的小片で、磨滅が激しいことから、水流の営力による二次堆積と考えられる。周辺地形から判断して、北西から南東に向かって流れていたと想定している。

流路状遺構01は、不定形な平面形態や断面の形状、埋土の様相などから、自然流路である可能性が高い。しかし、「III b層・IV層」上面は、北東から南西方向にゆるやかに傾斜しているにもかかわらず、地形に反して、流路の進行方向が北西から南東側に向かっており、やや不自然な様相を示す点に問題が残る。また、E・F 4グリッドでは埋土を人為的に掘り返した痕跡が、東壁断面からも認められることや、F 3グリッドから、後述する人工的な溝02が枝別れしていることから、この流路に対して、人為的な何らかの関与や利用が想定される。今後、隣接する周辺の調査が行われることによって、この流路の性格や機能などが明らかにされると考えるが、本次調査区の範囲内のみでは決め手に欠けるため、現段階ではとりあえず「流路状遺構」と仮称しておく。

流路状遺構01出土遺物(図16・17、図版6・7)

図16-1～15は弥生土器で、概して器表が磨滅している。中期初頭に属する。

1～8は、甕である。1は、口縁部が短く、ゆるく外反する。頸部に14条の櫛描文。胎土に白色砂粒、石英含む。焼成は良好。色調は黒褐色。2は、胴部上半の破片で、櫛描直線文と三角形の刺突文が施される。胎土に白色砂粒、石英を含む。焼成は良好、色調は、外面が黒褐色、内面がにぶい黄褐色。3は、口縁部が短く、ゆるく外反する。胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。焼成は良好。色調は、灰黄色。4は、胎土に白色砂粒、石英を含む。焼成は良好、色調は黒褐色。5は、胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。焼成は良好。色調は灰黄色。6は、器壁が比較的厚い。胎土に白色粗砂粒、石英を含む。焼成は良好。色調は橙色。7は、胴部が比較的張り出す。胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。焼成は良好。色調は灰黄色。8は、器壁が比較的厚い。胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。焼成は良好。色調は橙色。

9は、比較的大型品と想定される、壺の口縁部。胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。焼成は良好。色調は橙色。

10～15は底部。10は、胎土に白色砂粒、石英を含む。色調は、外面が灰黄色、内面が黒褐色。11は、外面にハケメ調整を残す。胎土に白色砂粒、石英を含む。色調は外面が黒褐色、内面が灰黄色。12、13は、胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。色調は、内外面とも暗赤褐色。14は、底径8.9cmと

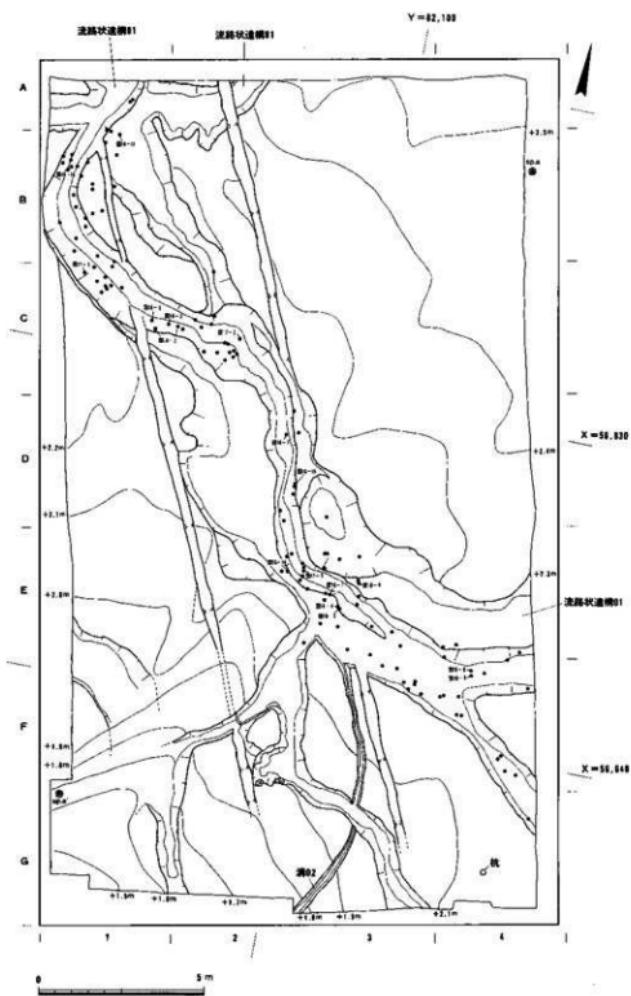


図15 「III b層・IV層」上面造構平面図 (1/150)

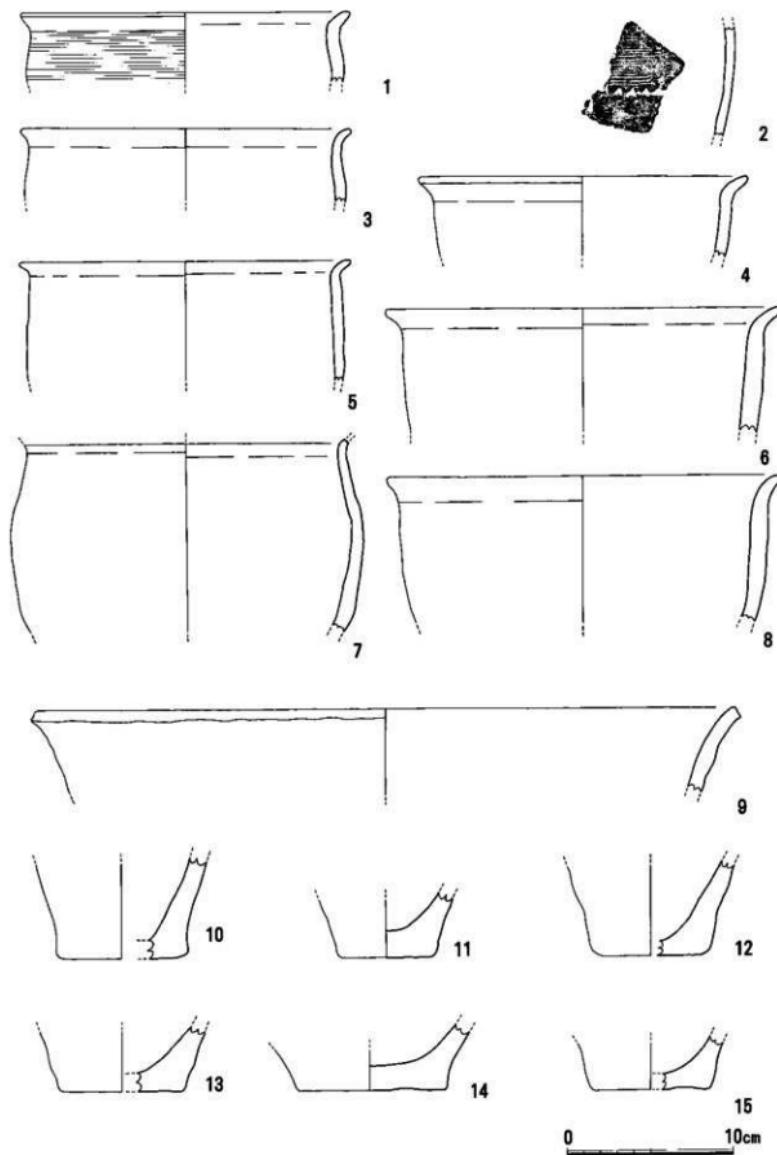


図16 流路状遺構01埋土出土弥生土器 (1/3)

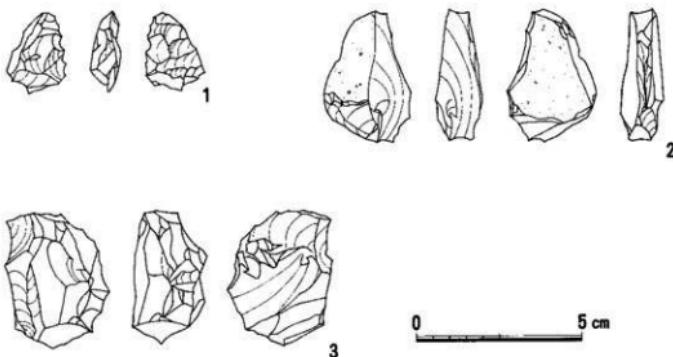


図17 流路状遺構01埋土出土石器（2／3）

比較的大型。胎土に白色粗砂粒、石英を多く含む。色調は内外面とも黄褐色。15は、胎土に白色砂粒、石英を含む。色調は内外面とも黄褐色。

図17-1～3は、黒曜石製。

溝02（図15、図版1）

流路状遺構01のF3グリッドから枝分かれし、やや西側にカーブしながら、南方向に進路をとる。幅は最大で45cm、深さは20cmほどと、きわめて貧弱である。埋土は黄褐色粗砂である。断面の形態が台形状であることや、平面形態から、明らかに人工的に掘削された溝であると理解されるが、規模が貧弱であることから、その利用は比較的短期間であったと推測される。機能、用途としては、導水溝としての使用を想定している。

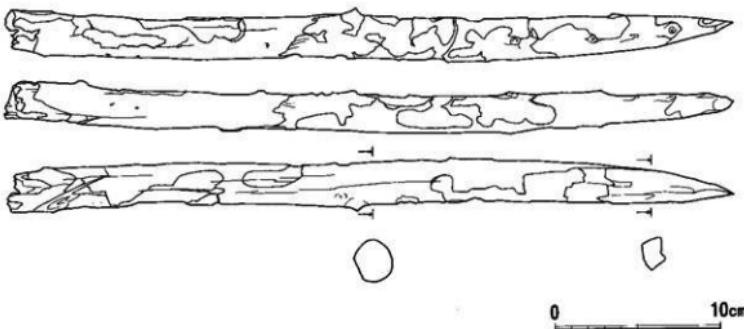


図18 杭（1／3）

杭（図18・図版10）

杭は、G 4グリッドのIV b層上面で上端部を検出している。ほぼ、垂直方向に突き刺さり、下端部は、V層まで達している。標高は、上端部が2.16m、下端部が1.28mである。長さ44.0cm、最大径2.4cmで、斜方向に切断された下端部は、金属器によるものと推定される鋭利な痕跡を残す。上端部は折損している。用途、機能は不明。上記の流路状遺構01、溝02と同時期に所属する可能性がある。

（2）II層・III a層の遺物（図19、図版8・9）

1～13がII層出土。II層出土遺物は、黒曜石剝片、古墳～奈良時代の土師器、須恵器片を中心とするが、備前等、中世の遺物も若干出土している。14～16がIII a層出土。III a層からは、古墳時代の遺物が若干量出土している。

1は、備前のすり鉢底部。15世紀に比定。

2、3、4は、須恵器壺の無高台底部で、表面が磨滅する。焼成はやや軟質で、胎土は白色微砂粒を少し含む。

5～8は、須恵器壺の底部で、高台が付く。5は、回転糸切り痕を残し、焼成は良好、胎土は白色砂粒を少し含む。7は、焼成が良好、胎土は白色微砂粒を少し含む。8は、回転糸切り痕を残し、焼成は良好、胎土は精良。

9は、須恵器蓋で、口縁部が内側に屈曲し、わずかに外反しながら、丸くおさまる。焼成は良好、胎土は白色砂粒を含む。7世紀後半から8世紀のものか。

10は、須恵器壺身で、たちあがりは短く内傾、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。焼成は良好、胎土は白色微砂粒を少し含む。7世紀前半代か。

11は、須恵器瓶。口縁部はやや内湾気味に直立し、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。頸部外面に一条の凹線がある。焼成は良好、胎土は白色微砂粒を少し含む。

12～15は、円筒埴輪片。表面がかなり磨滅しており、調整は不明。胎土に白色砂粒を含む。12、13、15は明褐色、14は浅黄色。

16は、須恵器壺の体部片。外面は格子目状の平行タタキ目、内面は同心円状の当て具痕を残す。焼成は良好、胎土は精良。

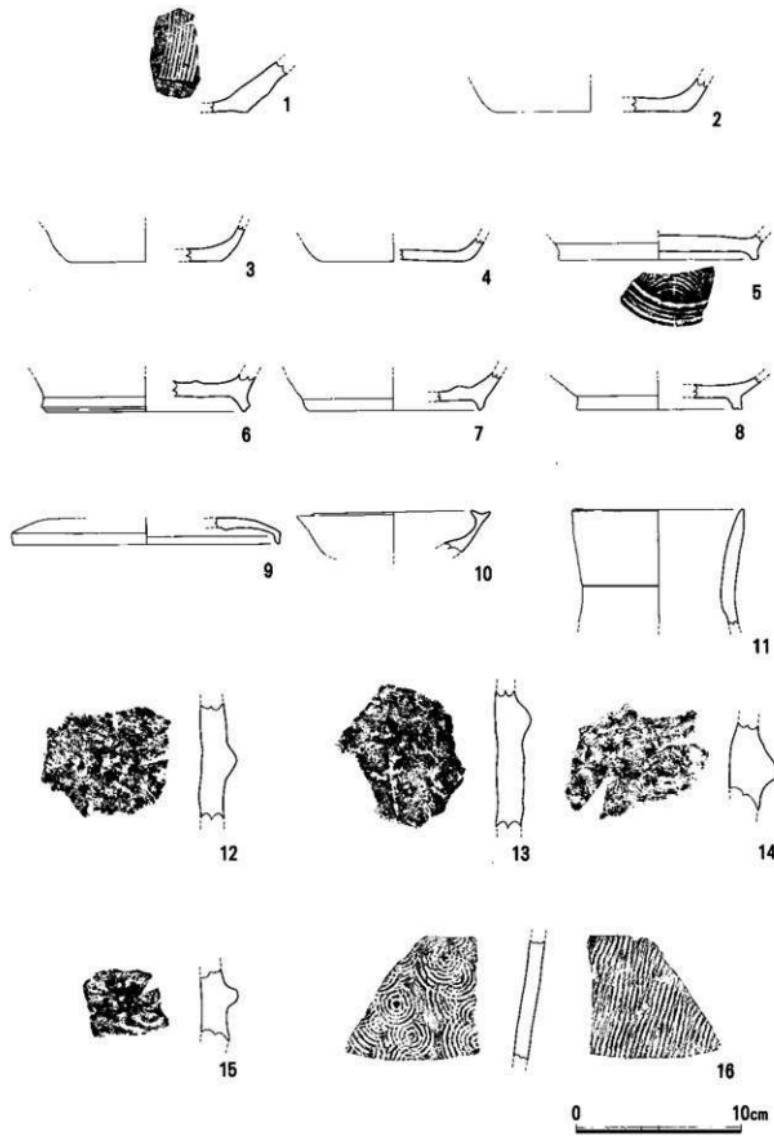


图19 II・IIIa层出土遗物 (1/3)

表3 出土遺物観察表

図番号	出土区	層位	器種	石 材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考
10-3	C 2	堆層		砂岩	85	63	42	
-4	F 4	Ⅳ層 上面	磨石	斑状輝石 (安山岩)	101 (長軸)	93 (短軸)	62	
-5	G 3	Ⅵd層	スクレーパー	黒曜石	36	28	8	
11-4	A 3	自然流路 03	石錐	砂岩	75 (長軸)	64 (短軸)	17	
-5	A 3	自然流路 03		安山岩	101	89	59	
-6	A 3	自然流路 03		泥岩	66	57	25	
-7	B 3	自然流路 03	剥片	黒曜石	43	17	14	
-8	B 3	自然流路 03	剥片	黒曜石	16	15	4	
17-1	C 1	流路状 造構01	剥片	黒曜石	24	16	8	
-2	C 2	流路状 造構01	剥片	黒曜石	39	15	12	
-3	E 3	流路状 造構01	剥片	黒曜石	43	32	23	

図番号	出土区	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色 調	①胎土 ②焼成	備 考
11-1	B 3	自然流路 03	縄文土器 深鉢	外：ナデ 内：ナデ	外：赤褐色 内：黒色	①2 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	内面 煤付着
-2	B 3	自然流路 03	縄文土器 深鉢	外：ナデ 内：ナデ	外：黄褐色 内：黒褐色	①2 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	内面 煤付着
-3	B 3	自然流路 03	縄文土器 深鉢	外：右下がり方向の条痕（幅4 mm） 内：横方向の条痕（幅4 mm）	外：灰褐色 内：灰黒色	①2 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	内面 煤付着

図番号	出土区	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色 調	①胎土 ②焼成	備 考
10-1	C 1	Ⅵd層	縄文土器 深鉢	外：条痕（幅3~4 mm） 内：ナデ	外：墨褐色 内：黒褐色	①2 mm以下の白色砂 粒を含む ②良好	外・内面 煤付着
-2	B 1	Ⅵd層	縄文土器 深鉢	外：条痕（幅4~5 mm） 内：ナデ	外：褐灰色 内：灰褐色	①1 mm以下の白色砂 粒を含む ②良好	

器番号	出土区	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①船上 ②焼成	備考
16-1	E 3	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：口縁部が短く、ゆるく外反 頸部に14条の櫛描文（幅2 mm） 内：ナデ	外：黒褐色 内：灰青褐色	①2 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-2	E 3	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：15条の櫛描直線文と三角形 の刺突文を施す 内：ナデ	外：黒褐色 内：にぼい黄 褐色	①3 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	外面煤 付着
-3	C 1	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：口縁部が短く、ゆるく外反、 ナデ 内：ナデ	外：灰黄色 内：灰黄色	①4 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-4	E 3	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：不明 内：不明	外：黒褐色 内：灰黄褐色	①3 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-5	C 1	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：不明 内：不明	外：灰黄色 内：灰黄色	①5 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-6	F 4	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：不明 内：不明	外：橙色 内：橙色	①5 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-7	D 2	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：不明 内：不明	外：灰黄色 内：灰黄色	①4 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-8	F 4	流路状 遺構01	弥生土器 甕	外：不明 内：不明	外：橙色 内：橙色	①5 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-9	E 3	流路状 遺構01	弥生土器 甕 口縁部	外：不明 内：不明	外：橙色 内：橙色	①3 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-10	B 1	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：不明 内：不明	外：灰黄色 内：黒褐色	①3 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-11	E 3	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：ハケメ 内：ナデ	外：黒褐色 内：灰黄色	①4 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-12	北 ナブトレ	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：不明 内：不明	外：暗赤褐色 内：皓赤褐色	①5 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-13	B 1	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：不明 内：不明	外：暗赤褐色 内：皓赤褐色	①5 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-14	E 2	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：不明 内：不明	外：黄褐色 内：黄褐色	①4 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	
-15	D 2	流路状 遺構01	弥生土器 底部	外：不明 内：不明	外：黄褐色 内：黄褐色	①3 mm以下の白色砂 粒・石英を含む ②良好	

図番号	出土区	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
19-1	D 2	II層	偏前すり鉢 底部	外：ナデ 内：8条からなるスリ目	外：青灰色 内：灰色	①2mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-2	F 1	II層	須恵器环	無高台底部 外：ナデ（表面が摩滅） 内：ナデ（表面が摩滅）	外：灰色 内：灰色	①白色微砂粒を含む ②やや軟質	
-3	F 1	II層	須恵器环	無高台底部 外：ナデ（表面が摩滅） 内：ナデ（表面が摩滅）	外：灰色 内：灰色	①白色微砂粒を含む ②やや軟質	
-4	E 1	III層 上面	須恵器环	無高台底部 外：ナデ（表面が摩滅） 内：ナデ（表面が摩滅）	外：灰色 内：灰色	①白色微砂粒を含む ②やや軟質	
-5	E 1	II層	須恵器环	底部高台付 外：回転系切り痕 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①7mmの白色砂粒・ 2mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-6	F 3	III層 上面	須恵器环	底部高台付 外：ナデ 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①1mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-7	E 4	II層	須恵器环	底部高台付 外：ナデ 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①2mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-8	E 1	III層 上面	須恵器环	底部高台付 外：回転系切り痕 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①精良 ②良好	
-9	F 4	II層	須恵器 蓋	口縁部が内側に屈曲しわざ かに外反しながら丸くおさま る 外：ナデ 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①1mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-10	F 2	III層 上面	須恵器 环身	たちあがりが短く内傾、口 縁部は尖り気味に丸くおさま る 外：ナデ 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	①1mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-11	F 3	III層 上面	須恵器	外：ナデ 内：ナデ	外：灰色 内：灰色	①精良 ②良好	
-12	F 3	III層 上面	円筒埴輪	外：不明（風化著しく不明瞭） 内：不明（風化著しく不明瞭）	外：明褐色 内：明褐色	①5mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-13	C 4	II層	円筒埴輪	外：不明（風化著しく不明瞭） 内：不明（風化著しく不明瞭）	外：明褐色 内：明褐色	①5mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-14	D 4	III層	円筒埴輪	外：不明（風化著しく不明瞭） 内：不明（風化著しく不明瞭）	外：浅黄色 内：浅黄色	①5mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-15	B 3	III層	円筒埴輪	外：不明（風化著しく不明瞭） 内：不明（風化著しく不明瞭）	外：明褐色 内：明褐色	①3mm以下の白色砂粒を含む ②良好	
-16	C 1	III層	須恵器 蓋	格子目状の平行タタキ目 (幅3mm) 内：内心円状の当て具痕	外：灰色 内：灰色	①精良 ②良好	

第6章 島根大学構内遺跡（深町地区）の古環境復元

1 島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区）の地質的検討

中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

1. はじめに

島根大学構内遺跡（以下、島大遺跡）第3次調査（深町地区）において、埋蔵文化財についての考古学的調査と平行して、遺跡堆積層についての地質学的検討を行った。以下にその結果について述べる。

2. 地形・地質の概要

島大遺跡は松江低地北部にあり、沖積低地と丘陵の境界部にあたる。第3次調査区は新第三系中新統松江層からなる丘陵に北から南に開けた谷の左岸側で、標高約3mの沖積低地上である。調査区の東側には、丘陵（金崎丘陵）が接している。

1994年度の第1次調査は本調査区の対岸側にあたる場所で行われ、縄文時代早期末から縄文時代中期頃（6500～5000年前頃）のこの地域は、内湾の汀線付近だったことが明らかになっている。

3. 調査区の完新統層序

本調査区の基盤は、強風化して粘土化した玄武岩で、調査区の東北側を頂点とする緩やかな尾根状の地形をなしでいる。これに不整合で泥質堆積物を主体とする完新統が重なっている（図20）。

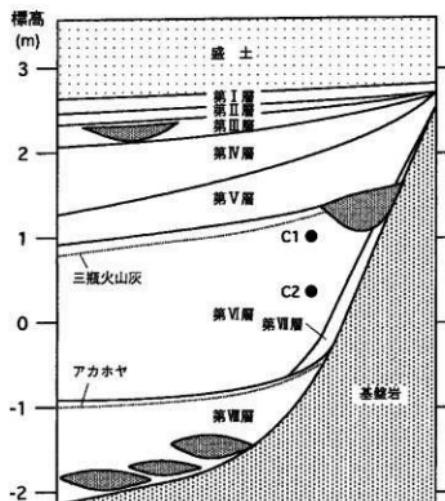


図20 第3次調査区の模式層序

今回の調査では、堆積層は層相と色調から8層に大別された。

第I層は灰色の泥層で、本調査地が島根大学敷地として造成される前の水田耕作土である。

第II層は無構造の灰色の泥層で、古い時期の水田耕作土の可能性がある。

第III層は黄褐色の泥層である。酸化鉄の沈着によって黄褐色を呈する。第IIIb層の上面から削り込んだ流路が一部に認められ、細砾～粗粒砂で充填されている。その中には弥生時代の遺物が含まれている。

第IV層は上下で色調が異なり、上部が黒灰～灰色、下部が黒色の泥層である。

第V層は灰色の泥層で、比較的厚く分布する均質な地層である。

第VI層は黒～暗褐色の暗色部と灰～灰褐色の明色部が厚さ数cm～20cmで互層する泥層である。明暗の互層は、水平方向への連続性がよく、下位の地層に対してその上を順次覆っている。この地層の上部に三瓶火山起源の火山灰層が挟まれる。また、この地層の下部からはカイとヤスの柄が出土した。

第VII層は暗灰色の泥層である。表層が土壤化しており、下方へ向かって漸移的に色調が明るくな



写真1 背後の丘陵から続く、基盤の尾根状地形



写真2 地層に含まれる水生植物の地下茎

る。

第VII層は灰色の泥層で、上部にアカホヤ火山灰（K-Ah）層（以下、アカホヤ）が挟まれる。第VIII層には数枚の砂層が挟まれ、この砂層は基盤の尾根状地形を取り巻くように帯状に分布している。

以上のように、本調査区の堆積物は泥分を主体とし、これを侵食した流路を充填する砂層と、基盤の尾根状地形を取り巻く形の砂層が部分的に分布している。

第VI層にはアシなどのイネ科の水生植物とみられる葉や茎が多量に含まれ、第VIII層にも含まれている。そのことから、これらの地層は湿地の堆積物と考えられる。

4. 火山灰層

本調査区では、第VII層にアカホヤ、第VI層に三瓶火山起源の火山灰層が挟まれている。以下にそれぞれの特徴について述べる。

・アカホヤ火山灰層

アカホヤは九州の南方にある鬼界カルデラの活動によってもたらされた火山灰で、西日本を中心として日本列島に広く分布し、完新世を代表する広域火山灰である。降灰時期は6300年前である（町田・新井、1978）。

島大遺跡では、第1次調査で厚さ2cm以下の地層として見い出され（島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1997編）、第2次調査でも調査区に隣接して行われたボーリングで確認されている（島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1996編）。周辺地域では西川津遺跡（中村、1993）や宍道湖の湖底ボーリング（中村・徳岡、1997）などで発見され、完新統中に普遍的に存在することが明らかになっている。

アカホヤは細粒砂サイズの粒子からなり、大部分が火山ガラスである。火山ガラスはバブル型>軽石型で、褐色を帯びることを特徴とする。斑晶鉱物としてシソ輝石、普通輝石をごく少量含む。

第3次調査区では、第VII層の上部に厚さ2cm以下の地層として挟まれている。分布の上限は標高-0.2mで、基盤の地形に沿って、西へ向かって分布深度が低くなる。標高-0.2m以深では、層厚が薄くなって途切れることもあるが、ほぼ連続した地層として分布するのに対し、標高-0.2m以上

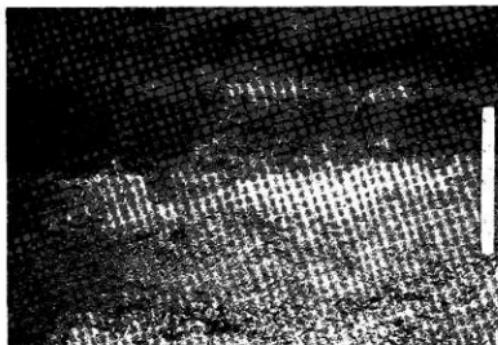


写真3 アカホヤの2次堆積層 右のスケールは長さ20cm

では地層として見い出されない。

基盤の尾根状の高まりの裾部では、アカホヤの降下堆積層の直上にその2次堆積層が分布する。これは、産状から尾根状の高まり部分に降灰した火山灰がその裾部に再堆積したものと判断できる。分布は断片的でレンズ状の形態を示し、厚い部分では層厚は5cmに達する。

・三瓶火山起源の火山灰層

第VI層の上部に、層厚0.3cm以下のごく薄い地層として、三瓶火山に起源するとみられる火山灰層が挟まれる。後で述べるように、この火山灰層に近い層準の材化石から、 4470 ± 140 yr.B.P.の¹⁴C年代が得られている。

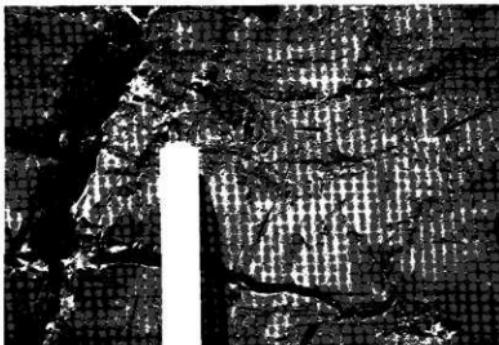


写真4 三瓶火山起源の火山灰層

スケールの先端部から水平に続く白色の層が火山灰

この火山灰は極粗粒砂～細粒沙サイズの粒子からなり、アカホヤと比べて明らかに粒径のばらつきが大きい。構成鉱物は、白色軽石、角閃石、黒雲母、石英、斜長石を主体とする。角閃石は緑色のものが多く、褐色のものも少量含まれる。軽石と黒雲母には $\phi 2$ mmを越える粗粒なものも含まれている。

この火山灰は、鉱物組成と軽石の形態的特徴が、三瓶火山の完新世の噴火活動に伴う火山灰の組成と一致する。また、粒径のばらつきが大きいことから、供給火山はあまり遠くないと判断でき、火山灰の供給源は三瓶火山である可能性が高い。そこで、この火山灰と、比較的近い¹⁴C年代値が得られている三瓶角井火山灰（松井、1997）の両者に含まれる角閃石の化学組成を、島根大学汽水域研究センター設置のJEOL8800M型EPMAを用いて分析した（図21）。図21に示すように両火山灰中の角閃石の各成分は一致する。これらのことから、第VI層に挟まれる火山灰層は三瓶火山の活動によつてもたらされたものと判断できる。

三瓶火山の完新世の噴火活動で噴出した火山灰の三瓶山山麓付近以外への分布はこれまで殆ど知られていないかった。降下火山灰と判断できるものとしては、大田市久手町の波根湖干拓地のボーリングコアで発見された火山灰（中村ほか、1997）がこれまでのところ三瓶火山から最も遠いものであった。おそらく、今回の火山灰が三瓶火山から最も遠い発見例となると思われる。

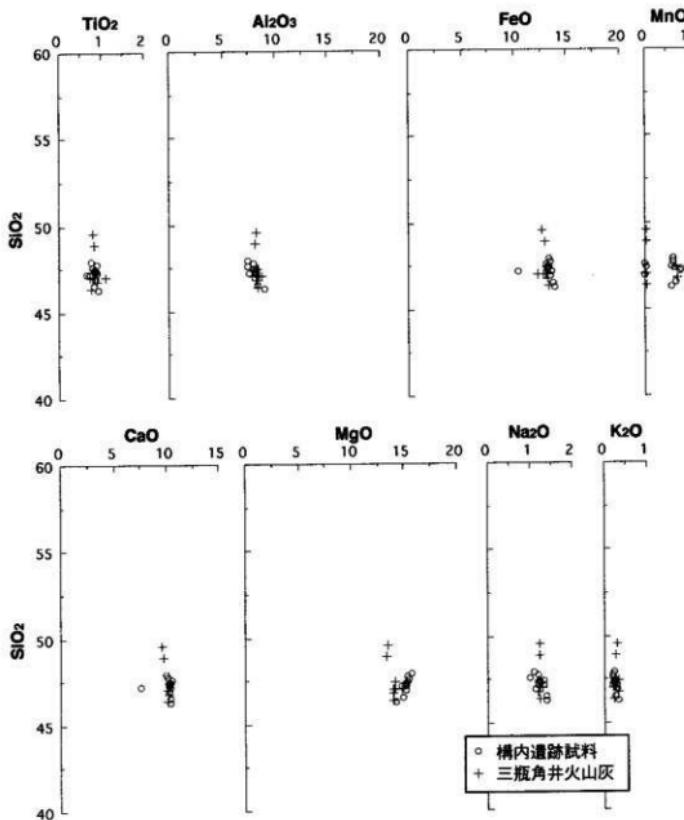


図21 火山灰中に含まれる角閃石の化学組成

第3次調査区と三瓶山の直線距離は約55kmであるが、この火山灰の層厚はわずか3mmしかなく、より遠方では発見される確率は低いと思われる。したがって、この火山灰層が示準火山灰として、遺跡調査などで有効なものとなる可能性は低いかも知れない。

5. ^{14}C 年代について

第VI層の上部(C1)と下部(C2)から採取した材化石について、島根大学汽水域研究センターで ^{14}C 年代測定が行われ、それぞれ、 $4470 \pm 140\text{yr.B.P.}$ (C1)と $5330 \pm 200\text{yr.B.P.}$ (C2)の測定値が得られている。

^{14}C 年代は、古い地層中に含まれていた化石が再堆積することで、年代値が堆積時期と異なったり、化石がより新しい時代の炭素に汚染されることによって実際の年代より若返った測定値が得ら

れることがあり、測定値の評価は慎重を要する。

今回、測定に供した材化石は、いずれも拳大以上のサイズがあり、微小なものに比べて、内部まで汚染される可能性は低いと思われる。また、得られた測定値は、2つの値と採取層準の上下関係、および、6300yr.B.P.と推定されているアカホヤとの関係に矛盾がない。したがって、この年代値は妥当なものであると考えられる。

2つの測定値を、それぞれの試料採取層準の堆積年代とみなすと、次のことが考えられる。

- ・第VI層は縄文時代前期から中期にかけて堆積した地層と考えられる。
- ・三瓶火山起源の火山灰層とC1の採取層準はごく近いことから、この火山灰の降灰年代はC1(4470yr.B.P.)に近いと考えられる。この年代は三瓶火山の活動期のうちで第V期の年代(松井、1994)と近い。
- ・試料採取地点の層厚に基づき、C1、C2の年代差(約860年)から、その間の平均堆積速度を求めるとき、約0.9mm/年となる。この値は、湖沼や内溝の一般的な堆積速度(1~2mm/年程度)と比べると若干小さいものである。
- ・上と同様に、アカホヤとC2の年代差(約970年)から平均堆積速度を求めるとき約0.4mm/年で、上記の値に比べて半分以下である。第VII層と第VI層の間の第VII層は土壌化していることから、第VII層と第VI層の間には堆積の不連続(時間的間隙)があると考えられ、アカホヤとC2の間の平均堆積速度が見かけ上小さくなるのはそのためと考えられる。

6. 堆積物の炭素・窒素濃度

調査区南西隅で、鉛直方向に10cm間隔で泥試料を採取し、炭素(TOC)・窒素(TN)濃度分析を行った。分析方法は以下の通りである。

採取した試料は75°Cで24時間乾燥した。これをメノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉碎し、1NのHClで炭酸塩体の炭素を分解した後、ヤナコCHNコーダーMT3型を用いて分析し、TOC、TNの重量%を求めた。

分析結果を図22に示し、以下にその傾向と解釈を述べる。

全体の傾向を下からみていくと、標高-1.5~-0.9mはTOC、TNともあまり変化がない。さきに述べた本調査区の地層区分ではこの層準は第VII層である。標高-0.9~+0.6mはTOC、TNとともに高い値を示し、変化も大きい。この層準は第VI層である。標高-0.6m以上ではTOC、TNともに急減し、特に、標高+1.5~+1.8m付近は低い値を示す。この層準は第II層~第V層で、特に低い値を示す層準(標高+1.5~+1.8m付近)は第III層である。

このようなTOC、TNの変化は、色調とよく一致する。TOC、TNの濃度は、比較的明るい色の第VII層と第I層~第V層では低い。縞状の構造がある第VI層では全体に高い値を示すが、その中でも、暗色層で特に高く、明色部では相対的に低い。このことから、色調の明暗は、堆積物中に含まれる有機物濃度(特に炭素)を反映しているものと考えられる。

堆積物中に含まれるTOC、TNの濃度と、両者の比(CN比)は堆積環境を示す指標となる。今回の場合は、環境が変化しやすい水域・陸域境界付近に堆積した地層であることから、TOC、TNは堆積時の初生的な濃度よりも、堆積後の分解の程度を反映している可能性が高い。第I層~第V層は、泥層中に堆積構造を残していないことや、砂層を挟むことから、陸上または堆積後に離水した地層

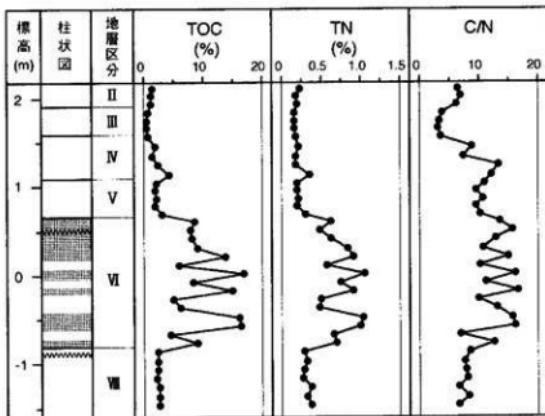


図22 炭素・窒素濃度およびCN比

試料採取地点は、第III次調査区トレンチ南西隅。

ここでは全ての地層が泥からなり、火山灰層が2枚挟まる。

上位の火山灰は三瓶火山起源、下位の火山灰はアカホヤ火山灰。

柱状図の網かけ部分は暗色層。

と考えられる。したがって、堆積後に有機物が酸化分解されたためTOC、TN濃度が低くなったと考えられる。第VIII層も同じことが考えられる。第VI層は堆積構造がよく残っていることから、水中で堆積し、堆積後も還元的な環境にあったと考えられる。ここでは初生的に有機物濃度が高かったこともあるだろうが、堆積後の分解の影響が小いために他の地層に比べてTOC、TN濃度が高いと考えられる。

7. 第VI層の明暗互層

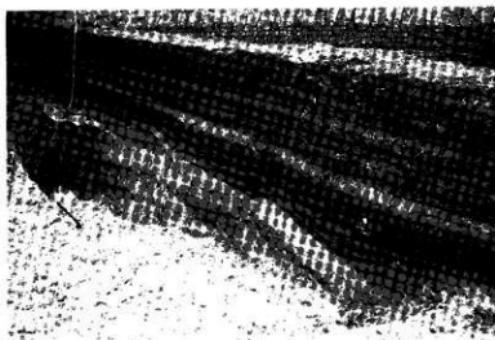


写真5 第VI層の明暗互層

第VI層は明暗の縞模様が明瞭な地層である。明色層と暗色層は、厚さ数cm～20cmで互層し、水平方向への連続性がよく、下位の地層に順次重なっている。

肉眼的には、暗色層は植物遺体が良く保存されており、明色層ではそれに比べて保存が悪い。粒度には違いはなく、いずれもシルト以下で、砂分は殆ど含まれない。両層の境界部は漸移的に色調が変化する。また、全体としてみても、中間的な色調の部分もあり、上下との相対的な違いによって明暗互層となっている。

上記のように、明暗互層は有機物濃度によって構成されていると考えられる。有機濃度が増減する原因として次の3つの要因が挙げられる。

A：陸上から流れ込む有機物の増減やプランクトンによる水中での基礎生産量変化によって、堆積する有機物の量が増減する。

B：堆積する有機物の量そのものは変化しないが、泥や砂などの無機物の堆積量が変化することによって、相対的に有機物濃度が増減する。

C：堆積時の有機物濃度は変化しないが、堆積後の有機物の分解の程度によって、地層に残る有機物濃度が増減する。

この3つの要因が作用して、有機物濃度が変化し、明暗互層が形成されたと考えられる。明暗互層の形成にどの要因が最も大きく作用したかということは不明であるが、上記の堆積速度からみて、明暗互層の形成は10年から数100年のサイクルでの環境変化を反映したものと考えられる。

8. 基盤を取り巻く砂層について

第VII層には数枚の砂層が挟まれ、それぞれが等高度で、基盤の尾根状地形を取り囲むように分布している。それを模式的に示すと、図23のようになる。砂層は基盤に上っていくような形で順次堆積しており、図23では砂層1が最下位で、砂層3が最上位という関係である。

断面で観察すると、砂層中に泥薄層や、粒径の異なる粒子の配列による堆積構造が認められ、そ

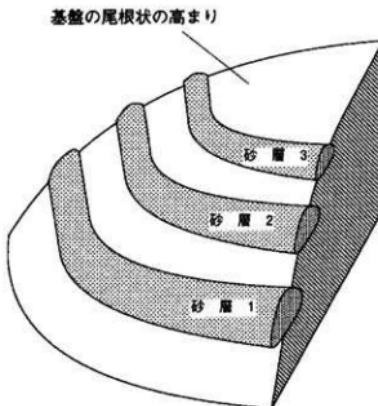


図23 尾根を取り巻く砂層の模式図



写真6 第VII層に狭まれる砂層とテラス状の地形



写真7 砂層の先端部には小崖が形成されている

これらの構造は常に基盤側へ向かって傾斜している。このことから、砂層の堆積は常に谷側から尾根側へ向かって進んだことが判る。

基盤に対しては、これを削り込んで堆積しており、基盤にはテラス状の地形が形成されている。この砂層の成因として、次のようなことが考えられる。

基盤の尾根状地形の裾部まで水域がせまり、汀線部分では基盤が侵食され、テラス状の地形が形成された。侵食によって洗いだされた砂分と、尾根の上方から落下した砂分が汀線部分に堆積して、尾根を取り巻く形で砂層が形成された。この場所は強い波浪や水流を受けることがなかったため、砂層は汀線部分に堆積したままの形で保存された。水面の上昇に伴って、砂層が堆積する場所は尾根の上方側へ移動していった。

この砂層が谷奥からの河川水流で運搬された砂の堆積で形成された可能性もあるが、その場合は、常に尾根に沿って分布していることや、常に尾根側へ順次堆積したこと説明しにくい。

9. 第1次調査区との地層対比

今回の調査区と94年度の第1次調査区は、谷を挟んで向かい合う位置にある。いずれも湿地堆積物中にアカホヤが挟まれていることから、両調査区の地層対比が可能である。

第1次調査区では、厚さ数mmから数cmで平行する明暗縞模様の泥層中にアカホヤが挟まれ、アカホヤは標高-0.5m付近を上限として分布していた。第3次調査区では無構造の灰色の泥層(第VII層)中にアカホヤが挟まれ、標高-0.2m付近を上限として分布している。それぞれの泥層の層相の違いは、標高と堆積時期の僅かな違いによる環境の差を反映したものと思われる。

アカホヤを挟む泥層の上位は、第1次調査区では疊層が重なるが、第3次調査区では疊層は重なっていない。¹⁴C年代の項で述べたように、第VII層と第VI層の間には堆積の不連続があると考えられ、疊層の堆積時に、第3次調査区では堆積が停止していたと思われる。島根大学埋蔵文化財調査研究センター(1997編)で中村ほかは、第1次調査区の層序から、アカホヤ降灰後に海面の停滞または

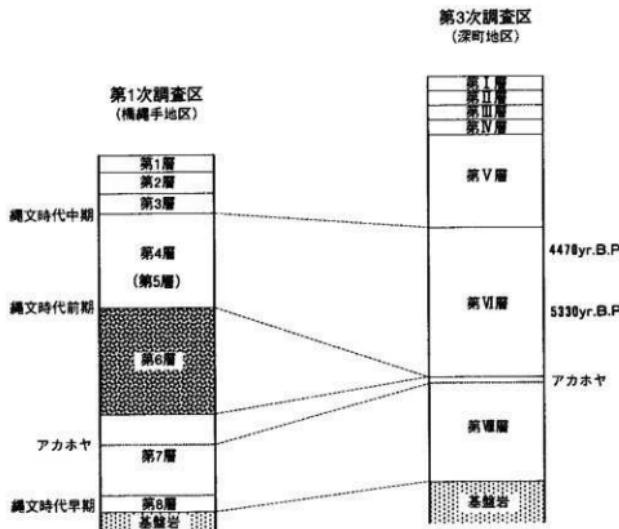


図24 第3次調査区と第1次調査区の層序対比

それぞれの調査区の代表的な層序と、その対比を示した。

第1次調査区の地層区分は島根大学埋蔵文化財調査研究センター(1997)を参照。

低下があって、その後最高海面に達した可能性を指摘したが、第3次調査区の層序もその考えと調和的である。

第1次調査区では疊層の上位に泥層が重なる。この泥層は一部で厚さ数cmから20cm程度の明暗縞模様が認められ、縄文時代前期初頭から縄文時代中期初頭に堆積したと考えられている。第3次調査区の第VI層は同様の明暗縞模様があり、¹⁴C年代から推定される堆積時期も一致する。分布する標高もほぼ等しく、両者は連続した同じ地層であると言える。

なお、これより上位の地層については年代などを示す資料に乏しく、対比が困難である。

10.まとめ

島大遺跡第3次調査では三瓶火山起源の火山灰や、明暗縞模様の泥層、尾根を取り巻く砂層などの興味深い発見があった。

第1次調査以降のこれまでの調査によって、島大遺跡は縄文海進期の海域・陸域境界部に立地し、そこでの人類の活動を示す遺物が出土することが明らかになってきている。また、縄文海進期の古環境を示す情報も得られつつある。これらの成果は島根県地域の遺跡調査の先駆的役割を果たすことにもなり、島根県下の各自治体で行われる調査で古環境についての検討が取り入れられるようになってきている。今後はこの地域における人類の歴史と古環境の関わりが明かにされていくものと期待される。

11.文献

- 町田 洋・新井房夫、1978：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究、17、143–163。
- 松井整司、1994：三瓶多根火碎流の¹⁴C年代。島根県地学会誌、9、26。
- 松井整司、1997：三瓶火山のアカホヤ以降の噴出物と旧波根湖底の試錐から得られた火山灰－对比と年代の推定－。島根大学汽水域研究センター特別報告第3号－波根湖の研究－、P 25–30。
- 中村唯史・桝田祐久・張 発勝・麻 錘權・徳岡隆夫、1997：波根湖の堆積層と古環境変遷。島根大学汽水域研究センター特別報告第3号－波根湖の研究－、P 3–19。
- 中村唯史、1993：松江市西川津遺跡のアカホヤ火山灰層。島根大学地質学研究報告、12、67–70。
- 中村唯史・徳岡隆夫、1997：宍道湖ボーリングSB1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理についての再検討。島根大学地球資源環境学研究報告、15、P 35–40。
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1996編：島根大学構内遺跡発掘調査概報II(諸田地区1)。P 38。
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1997編：島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1)－宍道湖北東側における「縄文海進」期低湿地遺跡の調査－。P 138。

2 深町地区の花粉・珪藻分析（概報）

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

はじめに

島根大学構内遺跡は、松江市西川津町の島根大学構内に分布する。今回の深町地区での調査は武道場の立て替えに伴うものであり、構内北東部に位置する。

今回の報告は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが、遺跡周辺の古植生、堆積環境などの古環境復元を行うために川崎地質株式会社に委託して実施した、分析報告書の概報である。

分析試料について

分析した試料は島根大学埋蔵文化財調査研究センターと川崎地質株式会社が協議の上、川崎地質株式会社が採取したものである。図25に試料採取地点を示す。図26の柱状図右側の数字が試料番号で、採取層準に示した。また、柱状図左には層名を示した。

分析方法および分析結果

（1）分析方法

花粉・珪藻処理は、渡辺（1995a, b）に従って示した。顕微鏡観察は、花粉分析を渡辺正巳が、珪藻分析を沢井祐紀が担当し、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。また、珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは珪藻化石総数で200を越えることができなかつた。

（2）分析結果

花粉分析結果を図26の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図27の珪藻ダイアグラム、図28の珪藻総合ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

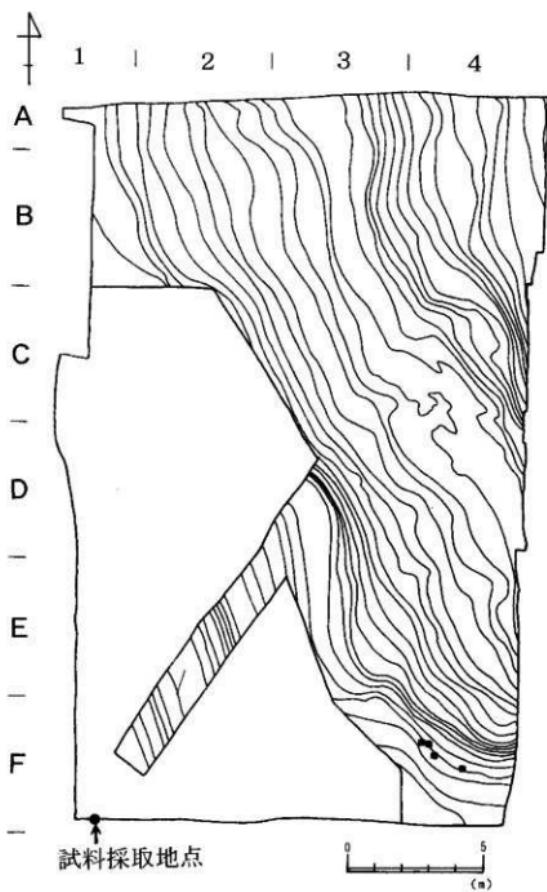
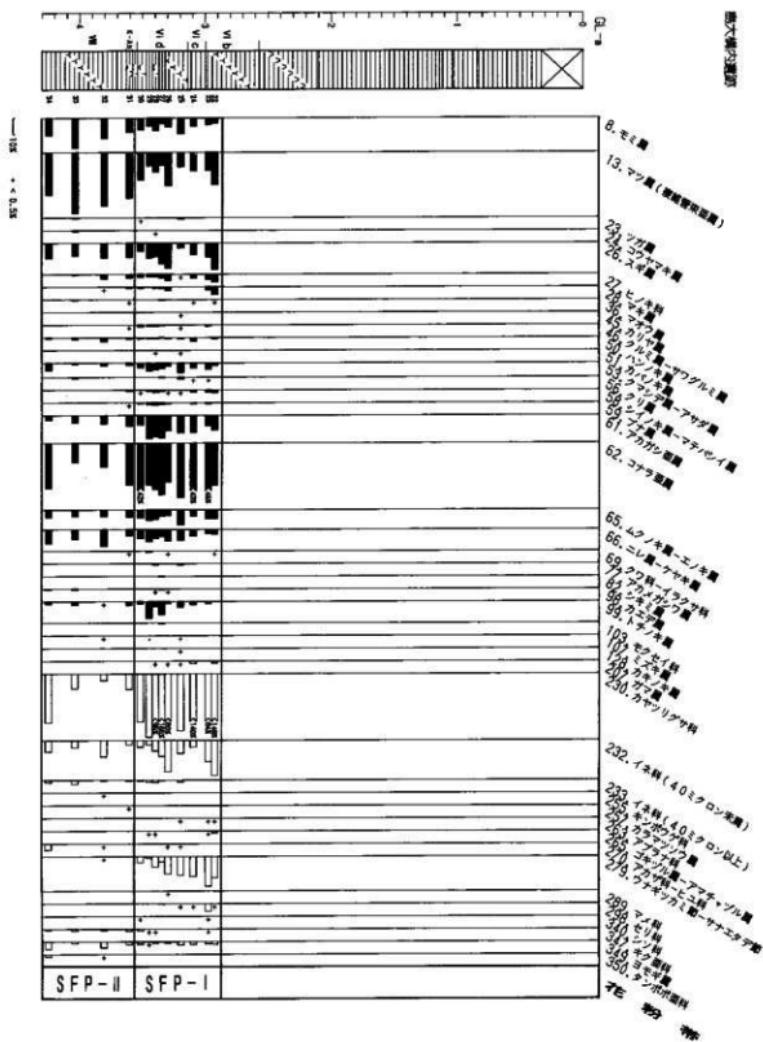


図25 試料採取地点

図26 気象アーティファクツ



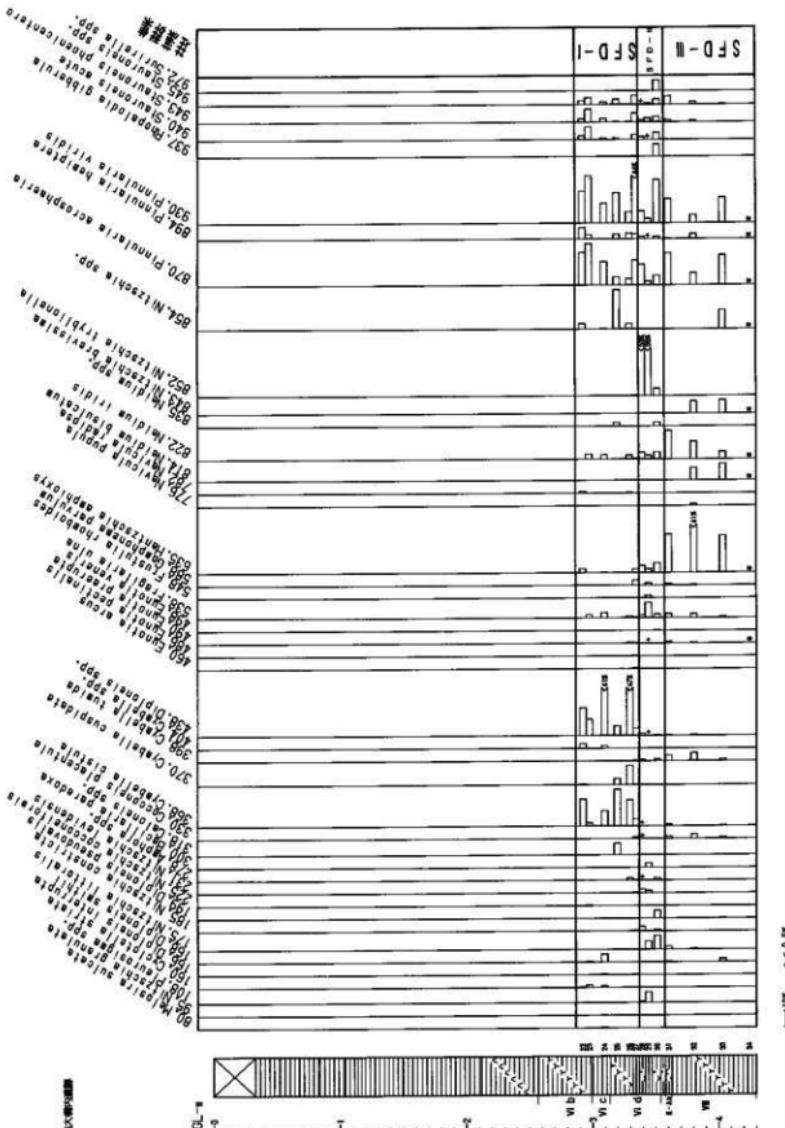


図27 珪藻ダイアグラム

表4 地域花粉帯の対比

今回の結果		橋繩手地区		海崎地区	
花粉帯	年 代	花粉帯	年 代	花粉帯	年 代
S F P - I	5330±200			h	
S F P - II	K-Ah	III	K-Ah	i, j	K-Ah

な様相を示す。以上のことから、それぞれの分析結果が同時期の地域的な植生を反映した花粉組成であることが明らかである。

S F P - I 帯では前帶に比べマツ属（複維管束亜属）が減少し、コナラ亜属が卓越するようになる。区分hでは前区分に比べマツ属（複維管束亜属）が減少し、アカガシ亜属、クマシデ、クリ属、シイノキ属、コナラ亜属が高率になる。種構成に違いがあるもののマツ属（複維管束亜属）の減少という共通点があることから、それぞれの地域的な植生の反映と考え対比可能である。

II带は、スギ属がやや増加することでIII带から区分されていた。しかし、この程度のスギ属の増加はS F P - I 、II带のいずれにも認められることから、II带の相当する標準を確定することはできなかった。

(4) 古環境復元

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果、珪藻分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

前述のように、S F P - II 帯にはK-Ah火山灰層が狭在され、S F P - I 帯（試料No.24と25の間）では5330±200yr.B.P.の¹⁴C年代値が得られている。これらのことから、S F P - II 帯期は繩文時代早期末頃、S F P - I 帯期は繩文時代前期頃を示すと考えられる。

1) S F P - II 帯期（繩文時代早期末）

発掘成果から試料採取地点は古宍道湾渕奥に位置していたと考えられている。珪藻分析の結果で海～汽水種の出現率が極めて低いことから、試料採取地点は淡水、あるいは非常に低い塩分濃度の湿地であったと考えられる。

橋繩手地区、海崎地区との関連から、遺跡の立地する湾の東側ではクロマツを要素とする海岸林が、湾の西側にはコナラ類を要素とする落葉樹林が広がっていたと考えられる。

2) S F P - I 帯期（繩文時代前期）

前半は塩分濃度がやや上がるものの、後半には再び塩分濃度が低下したと考えられる。また遺跡内は前期から引き続き湿地環境が続いた、カヤツリグサ科の草が密生していたと考えられる。またこの時期には、湾の周りにはコナラ類を要素とする落葉樹林が分布していたと考えられる。また、谷奥にはスギ林の存在も推定できる。

コナラ類が主要構成種となる森林には、ミズナラ林がある。しかし、繩文時代早期～前期には暖温帯に属していたこの地域に、冷温帯のミズナラ林が残存していたとは考えにくい。現在周辺地域で認められるのはコナラ林（いわゆる「里山」、「雜木林」）である。今回の結果では、特に湾西側を中心として千年近くコナラ林が継続したことになる。しかし、コナラ林は本来遷移林であり、シイやカシ類を要素とする暖温帯林に変わるのが通常である。コナラ林の維持には人為的な管理が必要であることから、当時の人間がコナラ林を「里山」として活用し、結果として現在コナラ林で行わ

れているような管理状態になり、コナラ林が長期にわたり継続したと考えられる。

まとめ

花粉分析、珪藻分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、SFP-I、II帯の地域花粉帯を設定した。
- (2) 珪藻分析結果から、本地域の珪藻化石群集をSFD-I～IIIに分類した。
- (3) 遺跡周辺での縄文時代早期から前期にかけての古環境変遷が推定できた。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。
 - ① 橋繩手地区に比べ湧奥であり、海水の影響が少なく、この期間はわずかに塩分濃度上がる時期があるものの、淡水に近い環境が続いたと考えられる。
 - ② K-Ah火山灰層降灰期の島根大学構内遺跡から、西川津遺跡海崎地区にかけての森林分布が明らかになった。クロマツ海岸林が遺跡の東側に、コナラ林が遺跡西側に分布していたと考えられる。
 - ③ 遺跡周辺では、およそ千年程度コナラ林が継続して分布していたと考えられる。コナラ林が継続して分布するためには人間による維持管理が不可欠なことから、当時の人がコナラ林を活用し、結果としてコナラ林が長期にわたり継続したと考えられる。

引用文献

- 川崎地質株式会社 (1997) 橋繩手地区における花粉・珪藻分析(概報)、島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1), 116-121, 島根大学埋蔵文化財調査研究センター, 島根。
- 大西郁夫(1979)花粉の分析、朝酰川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書I, 188-193、島根県教育委員会、島根。
- 大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳(1989)松江市、西川津遺跡の花粉分析、山陰地域研究(自然環境), 5, 45-54。
- 渡辺正巳(1995a)花粉分析法、考古資料分析法, 84, 85, ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳(1995b)珪藻分析法、考古資料分析法, 86, 87, ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳・会下和宏(1997)島根大学構内遺跡第1次発掘調査における花粉分析、山陰地域研究(自然環境), 13, 41-48。

3 島根大学構内遺跡第1次調査(橋縄手地区)・第3次調査(深町地区)出土木材の樹種

能城修一 (森林総合研究所木材利用部)

島根大学構内遺跡は松江市西川津町にあり、古宍道湾あるいは古宍道湖の縁辺部に位置する。同じ町内には弥生時代の木製品を出土したタテヨウ遺跡および弥生時代から古墳時代の木製品を出土した西川津遺跡がある。両遺跡では農耕具としてコナラ属アカガシ亜帯が半数以上を占め、それにスギがつぎに多く使われていた(山田、1993)。これに対し島根大学構内遺跡では縄文時代の自然木を大量に出土し、丸木船をはじめとする木製品もあるものの、自然環境復元のための資料が充実していると言える。ここでは第1次調査出土の自然木65点と、第3次調査出土の自然木137点および木製品4点の樹種を報告する。これらの木材を出土した層準とおおよその時代区分は第1次調査の第3層(時代不明)、第4層(縄文時代中期)、第5~7層(縄文時代前期)、第8層(縄文時代早期)、および第3次調査の流路03(縄文時代前期末・中期)、VIa層(縄文時代前期末・中期)、VIb・VIc層(縄文時代前期)、VId・VIf層(縄文時代前期)、VII層(縄文時代早期)である。なお第1次調査の第7c層と第7d層にはさまれて鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)が見いだされている。また第3次調査のVIa層からは 4470 ± 140 yrBP、VId層からは 5330 ± 200 yrBPという放射性炭素年代が得られている。

樹種同定用プレパラートの作製は島根大学埋蔵文化財調査研究センターの手で行われた。これらのプレパラートは同センターに保存されている。以下にはそれぞれの樹種の木材解剖学的な記載をしてし同定の根拠をしめす。

1. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科 枝・幹材 写真1:1a-1c (SHIM-141)

枝・幹材: 仮道管と放射柔組織細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はやや多く明瞭。仮道管の内壁には2~3本ずつまとまって、水平にちかく走るらせん肥厚がある。分野壁孔はやや小型のトウヒ型で1分野に2, 3個。

2. モミ属 *Abies* マツ科 枝・幹材 写真1:2a-2c (SHIM-112), 根材 写真1:3a-3c (SHIM-74)

枝・幹材: 仮道管と放射柔組織細胞からなる針葉樹材。ときに障害樹脂道をもつ。早材から晩材への移行はふつう緩やかでときにやや急であり、晩材は最も多く明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁には单壁孔が著しく、垂直壁は結節状となる。分野壁孔はごく小型のスギ型で1分野に2~4個。

根材: 枝・幹材に似るが、晩材の量は少なく、仮道管壁の肥厚も少ない。

3. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 写真2:4a-4c (SHIM-64)

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管、および垂直・水平樹脂道をとりかこむエピセリウム細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はかなり量多く明瞭。晩材にしばしば垂直

樹脂道が点在する。放射仮道管の水平壁は低い鋸歯状。分野壁孔は大型の窓状で1分野にふつう1個。

枝・幹材と根材の中間的なものが多く、両者の区別はできなかった。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 枝・幹材 写真2:5a-5c (SHIM-240)

枝・幹材：仮道管、樹脂細胞、および放射柔組織細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ないが明瞭。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が点在する。分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野にふつう2個。

5. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 写真2:6a-6c (SHIM-169)

やや小型で丸い管孔が単独あるいは2-3個複合して密に散在する散孔材。管孔の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で2細胞幅、道管との壁孔は中型で密に分布し蜂の巣状となる。

枝・幹材と根材の中間的なものが多く、両者の区別はできなかった。

6. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothrysus* カバノキ科 枝・幹材 写真3:7a-7c (SHIM-176)

枝・幹材：小型で角張った管孔が単独あるいは2個ほど複合して密に均一に散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は20本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は同性で、小型で單列のものと大型で集合状のものとからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は小型で密。

7. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 写真3:8a-8c (SHIM-139)

小型で丸い管孔が単独あるいは2-3個複合してやや疎らか散在する散孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で小型で2細胞幅ほどのものと、大型で集合状のものとからなる。

枝・幹材と根材の中間的なものであって両者の区別はできなかった。

8. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科 枝・幹材 写真3:9a-9c (SHIM-49), 根材 写真4:10a-10c (SHIM-137)

枝・幹材：大型で放射方向にのびた丸い単独管孔が年輪のはじめに1-数個ずつかたまって断続的に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は單一。放射組織は單列同性。

根材：枝・幹材にくらべ早材の管孔は小さく中型で、管孔の塊は年輪界に広がるが、連続することはない。他は枝・幹材と同じ。

9. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 枝・幹材 写真4:11a-11c (SHIM-90), 写真5:12a-12c (SHIM-192)

枝・幹材：中型で丸いやや厚壁の管孔が1-3列幅の放射方向にのびる帯をなして配列する放射孔材。木部柔組織は1-2細胞幅のいびつな帶状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で、小型で単列のものと大型で複合状のものとからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は縦にのびた柵状。

根材：中型の管孔が1細胞幅の線をなす放射孔材。接線状の木部柔組織は密度がたかく、木繊維と交互に入れ替わる。他の形質はほぼ枝・幹材と同じ。

10. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 枝・幹材 写真5:13a-13c (SHIM-195), 根材 写真5:14a-14c (SHIM-220)

枝・幹材：大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晩材ではやや小型で厚壁の丸い単独管孔が放射方向に配列する環孔材。木部柔組織は1-2細胞幅のいびつな帶状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で、小型で単列のものと大型で複合状のものとからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は縦にのびた柵状。

根材：大型でやや厚壁の丸い単独管孔が年輪界にむけて径を徐々に減じて散在する半環孔材。年輪界は不明瞭。その他の形質は枝・幹材に準ずる。

11. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 枝・幹材 写真5:15a-15c (SHIM-116)

枝・幹材：やや大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晩材ではごく小型で薄壁単独管孔が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は1-2細胞幅のいびつな帶状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で、小型で単列のものと大型で複合状のものとからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は縦にのびた柵状。

12. エノキ属 *Celtis* ニレ科 枝・幹材 写真6:16a-16c (SHIM-132)

枝・幹材：大型で丸い管孔が単独あるいは2個ほど複合して年輪界にそって断続的に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が数個-10数個ずつ塊をなして全体として斜め方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で6細胞幅くらい、不完全な鞘細胞をもつ。

13. ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 枝・幹材 写真6:17a-17c (SHIM-238)

枝・幹材：大型でやや角張った管孔が単独あるいは2-3個複合して年輪のはじめに配列し、晩材では丸い管孔が単独あるいは2-4個ほど複合して年輪界にむけて徐々に径を減じながら散在する半環孔材。木部柔組織は周間状。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1-3細胞が直立する異性で、背が高く8細胞幅ほど。

14. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 枝・幹材 写真6:18a-18c (SHIM-78)

枝・幹材：ごく小型で薄壁の管孔が単独あるいは2個ほど複合して密に均一に散在する散孔材。管孔の直径は年輪の終わりでやや減少する。木部柔組織は散在状。道管の穿孔は30-40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。道管と放射組織との壁孔はごく小型でまばらな対列状-階段状。

15. サクラ属 *Prunus* バラ科 枝・幹材 写真7:19a,19c (SHIM-79), 根材 写真7:20a (SHIM-36)

枝・幹材：小型で丸い管孔が単独あるいは2-3個放射方向に複合してまばらに均一に散在する散孔材。管孔の直径は年輪内で徐々に減少する。道管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で、4細胞幅くらい。

根材：中型で丸い管孔が単独あるいは2-3個複合して密に分布する散孔材。その他の形質は枝・幹材に準ずる。

16. ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 枝・幹材 写真7:21a-21c (SHIM-154)

枝・幹材：大型で丸い管孔が単独あるいは2個複合して年輪のはじめに2列ほど緩やかに集合し、晩材では小型で丸い管孔が単独あるいは2-3個放射方向に複合してまばらに散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状-連合翼状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で2細胞幅、外形はいびつ。

17. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 枝・幹材 写真7:22a-22c (SHIM-135)

枝・幹材：中型で丸い管孔が年輪のはじめに単独あるいは2-3個複合して3列ほど配列し、晩材ではごく小型の管孔が数個ずつ放射方向にのびる塊をなして散在する環孔材。木部柔組織は晩材で帯状となり、著しい。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で3細胞幅くらい。

18. ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科 枝・幹材 写真8:23a-23c (SHIM-40)

枝・幹材：やや大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに1列にならび、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が（斜め）接線方向の帯をなして配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で4-5細胞幅。

19. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 枝・幹材 写真8:24a-24c (SHIM-163)

枝・幹材：小型で丸い単独管孔がほぼ均一に密に散在する散孔材。木部柔組織は散在状。道管の穿孔は單一あるいは数段の横棒からなる階段状で、道管の内壁にはらせん肥厚が著しい。放射組織は異性で、直立細胞からなる単列のものと、上下端の1-2細胞が直立する6細胞幅くらいのものとからなる。

20. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 枝・幹材 写真8:25a-25c (SHIM-63)

枝・幹材：早材ではやや小型で丸い管孔が単独あるいは2-4個ほど放射方向に複合して密に散在し、晩材では徐々に径を減じたごく小型の放射方向に数個複合して散在する散孔材。木部柔組織は接線状で、晩材で著しい。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で2-3細胞幅。

21. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 枝・幹材 写真9:26a-26c (SHIM-32)

枝・幹材: やや大型で丸い管孔が単独あるいは2個ほど放射方向に複合して年輪のはじめに疎らに配列し、晩材ではごく小型で厚壁の管孔が単独あるいは2-3個放射方向に複合して疎らに散在する環孔材。木部柔組織は周囲状、晩材でときに翼状。道管の穿孔は单一。放射組織は同性で3細胞幅くらい。

合計206点の資料中には21分類群が認められた。このうち5分類群では明らかに根材と判断したものが含まれており、その他の4分類群でも根株付近の木材と判断されるものが含まれていた(表5)。

表5 島根大学構内遺跡第1次、第3次調査出土自然木の樹種

樹種名	S R	調文時代			不明
		早期末	前期	前期末・中期	
カヤ	S			1	5
モミ属	S	1	4	16	14
	R		3	2	
クロマツ	S	1		1	
	S R			1	
	-		1		
マツ属複維管束亞属	-		1		
ヤナギ属	S			1	1
	S R			5	5
ハンノキ属ハンノキ節	S			1	
クマシデ属イヌシデ節	S R			1	
スタジイ	S			2	1
	R			1	
コナラ属アカガシ亞属	S	1			2
	R		1		
	S R			1	
コナラ属クヌギ節	S		12	18	1
	S R		1	1	
	R		14		
コナラ属コナラ節	S	2	35	15	
	S R	1			
エノキ属	S			1	
ヤマグワ	S				2
サカキ	S		1		
サクラ属	S		1		
	R				1
ネムノキ	S			2	
ムクロジ	S			1	
	-			1	
ハリギリ	S				1
シャシャンボ	S			3	
エゴノキ	S		1	1	
トネリコ属	S				1
同定不能	-		4	8	
総計		6	79	84	34

S:枝・幹材、S R:根株材、R:根材

表6 島根大学構内遺跡第3次調査出土木製品の樹種

SHIM-No.	樹種名	S R	製品名	Grid	層準	時代
SHIM-238	ヤマグワ	S	板材	E 3	流路03-4	縄文前期末・中期～
SHIM-239	コナラ属コナラ節	S	角材	B 3	流路03-34	縄文前期末・中期～
SHIM-240	ヒノキ	S	板材	C 2	VI d 層 6	縄文前期初頭～後半
SHIM-241	モミ属	S	杭	G 4	IV a 層	弥生中期初頭

また2分類群は木製品のみに認められた(表6)。

自然木は序論に示した大まかな時代区分にしたがって集計した。それによると、縄文時代早期末が6点、前期が79点、前期末・中期が84点、時代不明が34点であった。前期にはモミ属やクヌギ節の根材が多く、これらは上位の層準から進入してきた可能性があり、これらの根材の時代区分を厳密に論じることは不可能である。早期末は6点しかなく樹種組成を論じるには不十分である。前期と前期末・中期の組成を比べてみると、いずれにおいてもモミ属、クヌギ節、コナラ節といった乾いた場所に生育する樹種が優占している。このうち前期ではコナラ節が優占し、これにクヌギ節が伴い、モミ属はわずかであって、それ以外には5種類しかなく、組成が単純である。前期末・中期では主要な3樹種はほぼ同率で出土しており、それ以外にもヤナギ属やハンノキ節といった水湿地に生育するものや、スダジイ、ネムノキ、シャシャンボなどやや乾いたところに生育するものなど様々な樹種が伴っており、種類組成は豊富である。根材あるいは根株材と判断されるものを含む樹種は遺跡内に生育していたと考えられる。こうしたことを考えると、前期では比較的乾いた環境が多く森林組成は単純であったものの、前期末・中期の当遺跡内には乾湿の環境条件がモザイク状に広がっていて、それにしたがって多様な森林が成立していたことが想定される。全般に落葉樹のほうが常緑樹に比べて比率が高く、落葉広葉樹林中に常緑針葉樹やスダジイやアカガシ亜属といった常緑広葉樹が混生していたと想定される。

山陰地方付近で縄文時代の大量の自然木から森林植生を復元した例としては島浜貝塚における研究がある(能代・鈴木、1990)。ここでは草創期および前期の層準から大量の木材が出土した。このうち前期の前半(羽島下層II・北白川下層I a-b)ではアカガシ亜属とトネリコ属がそれぞれ10-12%と優占し、スギ、ヤブツバキ、ハンノキ節、スダジイ、コナラ節、カエデ属、アカマツ、ケヤキ、モチノキ属と続いている。また前期の後半(北白川下層II a-b)ではハンノキ節とヤナギ属、トネリコ属といった低地の要素が12-13%と優占し、これらにスギやヤブツバキ、カエデ属、スダジイ、アカガシ亜属、コナラ節、モチノキ属、エノキ属などが伴っていた。ここでは明らかに根材とされるものは5%以下しかなく、貝塚周辺からもたらされた枝・幹材がほとんどであった。植物相としてはクロマツやシャシャンボが当遺跡にあるのに島浜貝塚にはないなど若干の違いはあるが、全体として共通している。優占種については当遺跡ではクヌギ節やコナラ節といったある程度乾いたところに生育するものが半分近くを占め、それらがヤナギ属といった水湿地に生育するものと混在していたが、島浜貝塚では優占種がそれほど目立たず、多様な環境に生育していたものが共に埋積されていたようである。これは当遺跡の化石群が生育地をほぼそのまま保存しているのに対し、島浜貝塚の化石群はある程度周辺から寄せ集められて形成されたことを反映するものである。

今後は、堆積環境に一層注目して層序を認識し、堆積環境を反映するような資料採集を行うこと

で、当遺跡内の生育環境の多様性が明らかになると考えられる。

引用文献

- 能城修一・鈴木三男。1990。福井県鳥浜貝塚から出土した自然木の樹種と森林植生の復元。金沢大学日本海城研究所報告、No.22: 63-152。
 山田昌久。1993。日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別第1号。

表7 島根大学構内遺跡第1・3次調査出土木材一覧表

SHIM-	No.	Photo	樹種名	S R	製品名	製品番号	Grid	層	準	時代	次数/地区
SHIM-	1		採取不可		板材	I465-1	E 2	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	2		モミ属		加工材	I465-2	G 7	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	3		エノキ属		加工材	I465-3	F 7	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	4		オニグルミ属		加工材	I465-4	G 8	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	5		マツ属(複雑 管束型)		加工材	I465-5	H 8	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	6		マツ属(複雑 管束型)		加工材	I465-6	H 8	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	7		モミ属		角材	I465-7	H11	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	8		アナダ属		加工材	I466-8	H 8	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	9		マツ属(複雑 管束型)		加工材	I466-9	H 8	第4層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	10		モミ属	S	棒材	I464-1	B 4	第4層下位砂層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	11		モミ属	S	角材	I464-2	B 4	第4層下位砂層		縄文中期初頭~	1次(橋繩手1)
SHIM-	12		採取不可		加工材	I461-1	B 4	第5層上面		縄文前期初頭~中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	13		マツ属(複雑 管束型)		加工材	I461-2	B 4	第5層上面		縄文前期初頭~中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	14		モミ属		加工材	I462-3	B 4	第5層上面		縄文前期初頭~中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	15		モミ属		加工材	I462-4	B 4	第5層上面		縄文前期初頭~中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	16		モミ属		円材	I463-1	D10	第6層上面		縄文前期初頭~中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	17		モミ属		角材	I460-1	C 3	第5層		縄文前期初頭~前半	1次(橋繩手1)
SHIM-	18		スギ属		棒材	I460-2	B 2	第5c層		縄文前期初頭~前半	1次(橋繩手1)
SHIM-	19		モミ属		板材	I460-3	B 4	第5a層		縄文前期初頭~前半	1次(橋繩手1)
SHIM-	20		モミ属	S	角材	I459-1	C 5	第6層下位粘土層		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	21		スギ	-	棒材	I459-2	C 4	第6層下位粘土層		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	22		スギ	S	棒材	I458-1	A 2	第7層上面(第6層)		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	23		クロマツ	S	加工材	I458-2	B 2	第7層上面(第6層)		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	24		マツ属(複雑 管束型)		加工材	I457-1	A 3	第7層		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	25		アカマツ	S	加工材	I457-2	E10	第7b層		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	26		マツ属(複雑 管束型)		円材	I457-3	A 3	第7層		縄文前期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	27		コナラ属クヌ ギ節	S	自然木		A-B 2	第3層上面			1次(橋繩手1)
SHIM-	28		コナラ属アカ ガシ節	S	自然木		F 2	第3層上面			1次(橋繩手1)

SHIM-	No	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層準	時代	次数/地区
SHIM-	29		カヤ	S	自然木		B 2	第3層上面		1次(橋繩手1)
SHIM-	30		モミ属	S	自然木		A 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	31		モミ属	S	自然木		B 3	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	32 *		トネリコ属	S	自然木		B 4 - C 3	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	33		カヤ・モミ属	S	自然木		B 8 - 9	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	34		モミ属	S	自然木		D 2	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	35		ヤナギ属	S	自然木		D 5 - 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	36 *		サクラ属	R	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	37		ヤワダワ	S	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	38		カヤ	S	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	39		カヤ	S	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	40 *		ハリギリ	S	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	41		カヤ	S	自然木		D 6	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	42		スダジイ	S	自然木		E 1	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	43		モミ属	S	自然木		E 1	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	44		ヤマグワ	S	自然木		E 5	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	45		コナラ属アカガシ属	S	自然木		F 1	第3層		1次(橋繩手1)
SHIM-	46		モミ属	S	自然木	フナクイムシ	B 4	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	47		モミ属	S	自然木		E 1	第4層(第8層上面)	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	48		クロマツ	S	自然木		E 4	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	49 *		スダジイ	S	自然木		E 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	50		シャンシャンボ	S	自然木		E 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	51		シャンシャンボ	S	自然木		E 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	52		モミ属	R	自然木		E 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	53		モミ属	S	自然木		F 2	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	54		モミ属	S	自然木		F 4	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	55		モミ属	S	自然木	フナクイムシ	F 4	第4層(第5層上面)	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	56		モミ属	S	自然木		F 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	57		モミ属	S	自然木		G 1	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	58		モミ属	S	自然木		G 5	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	59		同定不能		自然木		G 10	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	60		同定不能		自然木		G 11	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	61		モミ属	S	自然木	フナクイムシ	H 3	第4層(第5層上面)	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	62		モミ属	S	自然木		H 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	63 *		エゴノキ属	S	自然木		H 8	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	64 *		クロマツ	SR	自然木		H 10	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	65		モミ属	S	自然木		H 10	第4層	縄文中期初頭～	1次(橋繩手1)
SHIM-	66		モミ属	R	自然木		B 3	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	67		モミ属	S	自然木		B 3	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	68		エゴノキ属	S	自然木		B 4	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	69		コナラ属コナラ節	S	自然木		C 1 - 2	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	70		モミ属	S	自然木		D 1	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	71		コナラ属コナラ節	S	自然木		D 2	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	72		モミ属	S	自然木		F 2	第5層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(橋繩手1)
SHIM-	73		コナラ属クヌギ節	S	自然木		B 1 - 2	第5 c 層	縄文前期初頭～前半	1次(橋繩手1)
SHIM-	74 *		モミ属	R	自然木		D 1	第5 a 層	縄文前期初頭～前半	1次(橋繩手1)

SHIM-	No	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層 準	時 代	次数／地区
SHIM-	75		マツ属複葉管 東亞属	-	自然木	焦痕	C 10	第6層上面	縄文前期初頭～中期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	76		クロマツ	-	自然木	フナタイ ムシ	C 3	第6層下位粘土層	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	77		モミ属	R	自然木		C 5	第6層下位粘土層	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	78 *		サカキ	S	自然木		C 7	第6層下位粘土層	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	79 *		サクラ属	S	自然木		C 8	第6層下位粘土層	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	80		コナラ属コナラ 節	S	自然木		A 2	第7層上面(第 6層)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	81		コナラ属クヌ ギ節	S	自然木		B 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	82		コナラ属クヌ ギ節	S	自然木		B 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	83		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	84		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	85		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	86		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	87		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 3	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	88		コナラ属コナラ 節	S	自然木		C 3	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	89		コナラ属コナラ 節	S	自然木		D 2	第7b層 (K-Ah上位)	縄文前期初頭	1次(櫛繩手1)
SHIM-	90 *		コナラ属アカ ガシ串属	S	自然木	立木	F 1	第8層上面	縄文早期末	1次(櫛繩手1)
SHIM-	91		クロマツ	S	自然木	フナタイ ムシ?	F 3	第8層上面	縄文早期末	1次(櫛繩手1)
SHIM-	92		スキ		丸木舟		G ~ H · 1 ~ 2	第5a層	縄文前期初頭～前 半	1次(櫛繩手1)
SHIM-	93		欅	i						
SHIM-	94		欅							
SHIM-	95		欅							
SHIM-	96		欅							
SHIM-	97		欅							
SHIM-	98		欅							
SHIM-	99		欅							
SHIM-	100		欅							
SHIM-	101		モミ属	S	自然木	焦痕	E 3	V b層4		3次(深町1)
SHIM-	102		モミ属	S	自然木		E 3	V b層9		3次(深町1)
SHIM-	103		モミ属	S	自然木		E 3	V b層14		3次(深町1)
SHIM-	104		ヤナギ属	S R	自然木	焦痕	F 2	V b層2		3次(深町1)
SHIM-	105 *		ヤナギ属	S R	自然木		G 1	V b層2		3次(深町1)
SHIM-	106		ヤナギ属	S R	自然木		G 1	V b層4		3次(深町1)
SHIM-	107		ヤナギ属	S R	自然木		G 2	V b層1		3次(深町1)
SHIM-	108		ヤナギ属	S R	自然木		G 2	V b層2		3次(深町1)
SHIM-	109		モミ属	S	自然木	焦痕	G 3	V b層5		3次(深町1)
SHIM-	110		モミ属	S	自然木	焦痕	G 3	V b層6		3次(深町1)
SHIM-	111		モミ属	S	自然木	焦痕	G 3	V b層7		3次(深町1)
SHIM-	112 **		モミ属	S	自然木	焦痕	G 4	V b層2		3次(深町1)
SHIM-	113		モミ属	S	自然木	焦痕	G 4	V b層4		3次(深町1)
SHIM-	114		モミ属	S	自然木	焦痕	G 4	V b層8		3次(深町1)
SHIM-	115		コナラ属クヌ ギ節	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-15	縄文前期末・中期 ~	3次(深町1)
SHIM-	116 **		コナラ属コナラ 節	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-16	縄文前期末・中期 ~	3次(深町1)

SHIM-	No	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層準	時代	次数／地区
SHIM-	117		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-17	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	118		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-19	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	119	*	コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-20	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	120		モミ属	S	自然木	焦痕	A 3	流路03-21	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	121		ムクロジ		自然木	焦痕	A 3	流路03-22	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	122		モミ属	R	自然木	焦痕	B 3	流路03-20	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	123		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-21	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	124	×			自然木	焦痕	B 3	流路03-22	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	125		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-23	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	126		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-25	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	127		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-26	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	128		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-28	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	129		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-29	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	130	×			自然木	焦痕	B 3	流路03-30	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	131	×			自然木	焦痕	B 3	流路03-33	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	132	*	エノキ属	S	自然木		B 3	流路03-35	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	133		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-36	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	134		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-38	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	135	*	ムクロジ	S	自然木	焦痕	B 3	流路03-40	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	136		コナラ属アカガシ坐彌	S R	自然木		B 3	流路03-41	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	137	*	スタジイ	R	自然木	焦痕	B 3	流路03-42	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	138		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 3	流路03-2	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	139	*	クマシデ属イヌシダ節	S R	自然木		C 3	流路03-3	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	140		コナラ属クヌギ節	S	自然木		C 3	流路03-3	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	141	*	カヤ	S	自然木		C 3	流路03-4	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	142		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 3	流路03-5	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	143		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	C 3	流路03-6	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	144	×			自然木	焦痕	C 3	流路03-8	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	145	*	コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	C 3	流路03-10	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	146		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 4	流路03-6	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	147		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 4	流路03-7	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	148	×			自然木	焦痕	D 4	流路03-2	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	149		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 4	流路03-3	縄文前期木・中期	3次(深町1)
SHIM-	150		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 4	流路03-4	縄文前期木・中期	3次(深町1)

SHIM-	No	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層準	時代	次数/地区
SHIM-	151		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	D 4	流路03- 5	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	152		コナラ属クヌギ節	S R	自然木	焦痕	D 4	流路03- 6	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	153		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 4	流路03- 7	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	154	*	ネムノキ	S	自然木	焦痕	E 3	流路03- 1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	155		ネムノキ	S	自然木	焦痕	E 3	流路03- 1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	156		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 3	流路03- 2	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	157		スタジイ	S	自然木	焦痕	E 3	流路03- 3	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	158		モミ属	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	159		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 3	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	160		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 4	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	161		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 5	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	162	*			自然木	焦痕	E 4	流路03- 6	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	163	*	シャシヤンボ	S	自然木		E 4	流路03- 7	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	164		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 8	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	165		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 4	流路03- 9	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	166		モミ属	S	自然木		E 4	流路03-10	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	167		ヤナギ属	S R	自然木		G 3	VIA 層上面1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	168		ヤナギ属	S R	自然木	焦痕	G 3	VIA 層上面2	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	169	**	ヤナギ属	S R	自然木		B 1	VIA 層2	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	170		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 1	VIA 層3	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	171		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 1	VIA 層4	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	172		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 1	VIA 層5	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	173		ヤナギ属	S	自然木	焦痕	B 2	VIA 層1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	174		ヤナギ属	S R	自然木		C 1	VIA ~ b 層	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	175		ヤナギ属	S R	自然木		C 1	VIA 層1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	176	*	ハンノキ属ハシノキ節	S	自然木	焦痕	C 2	VIA 層9	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	177		モミ属	S	自然木		G 3	VIA 層1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	178	*	モミ属	S	自然木		G 4	VIA 層1	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	179		コナラ属クヌギ節	S	自然木		B 2	VIB 層1	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	180		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 2	VIB 層7	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	181		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	C 3	VIB 層12	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	182		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 3	VIB 層4	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	183		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 3	VIB 層5	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	184		モミ属	S	自然木		E 2	VIB 層1	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	185		コナラ属コナラ節	S	自然木		E 2	VIB 層2	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)
SHIM-	186		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	C 2	VIC 層5	縄文前期後半~前中期	3次(深町1)

SHIM-	No.	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層 準	時代	次数/地区
SHIM-	187		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	A 2	Vld 層6	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	188		コナラ属コナラ節	S	自然木		B 2	Vld 層3	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	189		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	B 2	Vld 層21	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	190		コナラ属クヌギ節	S	自然木		B 2	Vld 層22	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	191	*	コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 層23	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	192	*	コナラ属アカガシ串巻	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 層24	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	193		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	C 2	Vld 層4	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	194		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	D 2	Vld 層1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	195	**	コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	D 3	Vld 層6	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	196		コナラ属クヌギ節	S	自然木		E 2	Vld 層3	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	197		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	E 3	Vld 層1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	198		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 3	Vld 層2	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	199		コナラ属クヌギ節	S	自然木	焦痕	E 3	Vld 層3	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	200		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	E 4	Vld 層1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	201		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 3	Vld 層1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	202		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	203		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层2	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	204		コナラ属クヌギ節	S R	自然木	焦痕	F 4	Vld 层4	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	205		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层5	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	206		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层6	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	207		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层7	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	208		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层8	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	209		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层9	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	210		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层10	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	211		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld 层11	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	212		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	G 3	Vld 层1	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	213		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 4	Vld + Vld 层3	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	214		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	A 2	Vld 层3	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	215		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	A 2	Vld 层5	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	216	X			自然木	焦痕	B 2	Vld 层6	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	217	X			自然木	焦痕	B 2	Vld 层7	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	218		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 层8	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	219		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 层10	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	220	**	コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 层12	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	221		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Vld 层13	縄文前期初頭	3次(深町1)

SHIM-	No	Photo	樹種名	S R	製品名	製品備考	Grid	層 平	時代	次数/地区
SHIM-	222		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	B 2	Ⅳ層14	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	223		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Ⅳ層16	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	224		コナラ属クヌギ節	R	自然木		B 2	Ⅳ層18	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	225	×			自然木	焦痕	B 2	Ⅳ層19	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	226		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	B 2	Ⅳ層20	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	227		コナラ属クヌギ節	R	自然木		C 3	Ⅳ層13	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	228		コナラ属クヌギ節	R	自然木		C 3	Ⅳ層14	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	229		コナラ属クヌギ節	R	自然木	焦痕	C 3	Ⅳ層17	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	230		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 2	Ⅳ層1	縄文早中期	3次(深町1)
SHIM-	231		コナラ属コナラ節	S	自然木	焦痕	F 2	Ⅳ層2	縄文早中期	3次(深町1)
SHIM-	232		モミ属	S	自然木	焦痕	F 2	Ⅳ層3	縄文早中期	3次(深町1)
SHIM-	233		コナラ属コナラ節	S R	自然木	焦痕	F 3	Ⅳ層1	縄文早中期	3次(深町1)
SHIM-	234		コナラ属コナラ節	S	自然木		D 3	Ⅴb層3	縄文前期後半～前中期	3次(深町1)
SHIM-	235		コナラ属クヌギ節	R	自然木		A 2	Ⅳ層4	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	236		コナラ属クヌギ節	R	自然木		B 2	Ⅳ層17	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	237	×			自然木		C 3	Ⅳ層17	縄文前期初頭	3次(深町1)
SHIM-	238	*	ヤマグワ	S	板材	図13-3	E 3	流路03-4	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	239		コナラ属コナラ節	S	角材	図13-2	B 3	流路03-34	縄文前期末・中期	3次(深町1)
SHIM-	240	*	ヒノキ	S	板材	図13-1	C 2	Ⅴd層6	縄文前期初頭～後半	3次(深町1)
SHIM-	241		モミ属	S	杭	図18	G 4	Ⅴa層	弥生中期初頭	3次(深町1)
SHIM-	242		スギ		樺A	保存処理済	B 1-2	Ⅴd層	縄文前期後半	3次(深町1)
SHIM-	243		スギ		樺B	保存処理済	B 1-2	Ⅴd層	縄文前期後半	3次(深町1)
SHIM-	244		スギ		椿状木製	保存処理済	B 1-2	Ⅴd層	縄文前期後半	3次(深町1)

・ S : 枝・幹材、R : 根材

・ SHIM-2~9・13~19・24~26は川崎地質、92は元興寺文化財研究所、242~244は吉川生物研究所による同定。

・ SHIM-1~26の四は、「研究報告第1号」1997に掲載。

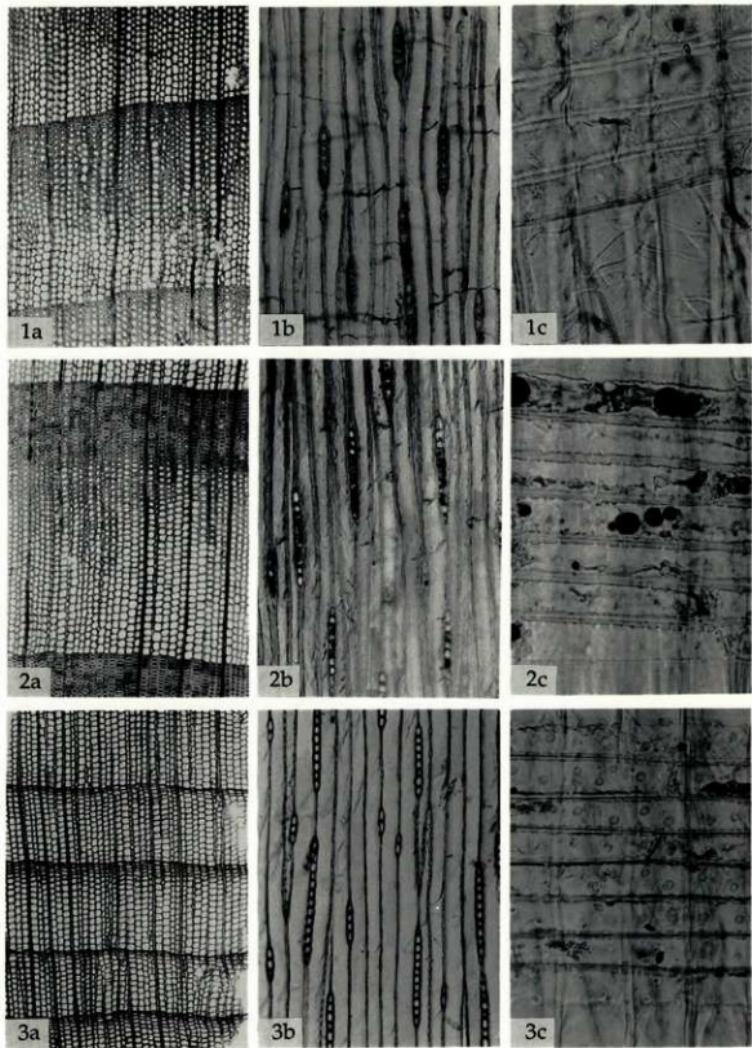


写真1. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（1）

1 a-1 c : カヤ 枝・幹材 (SHIM-141), 2 a-2 c : モミ属 枝・幹材 (SHIM-112), 3 a-3 c : モミ属 根材 (SHIM-74). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×400.

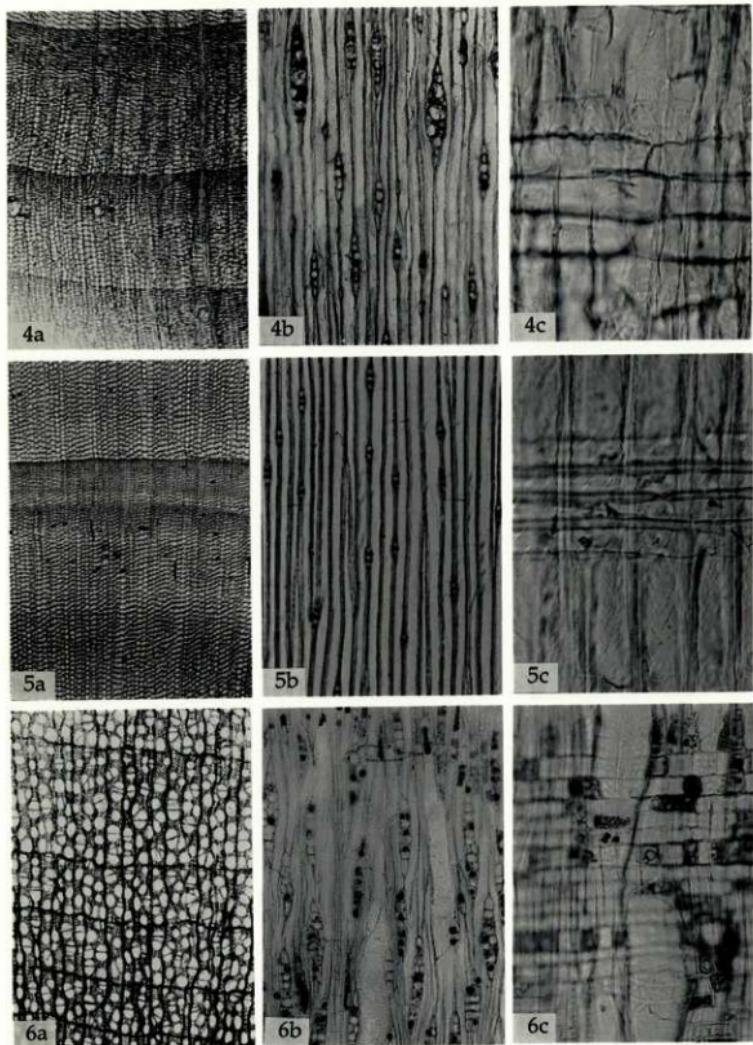


写真2. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)

4 a - 4 c : クロマツ (SHIM-64), 5 a - 5 c : ヒノキ 枝・幹材 (SHIM-240), 6 a - 6 c : ヤナギ属 (SHIM-169). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200 (6 c), ×400 (4 c, 5 c).

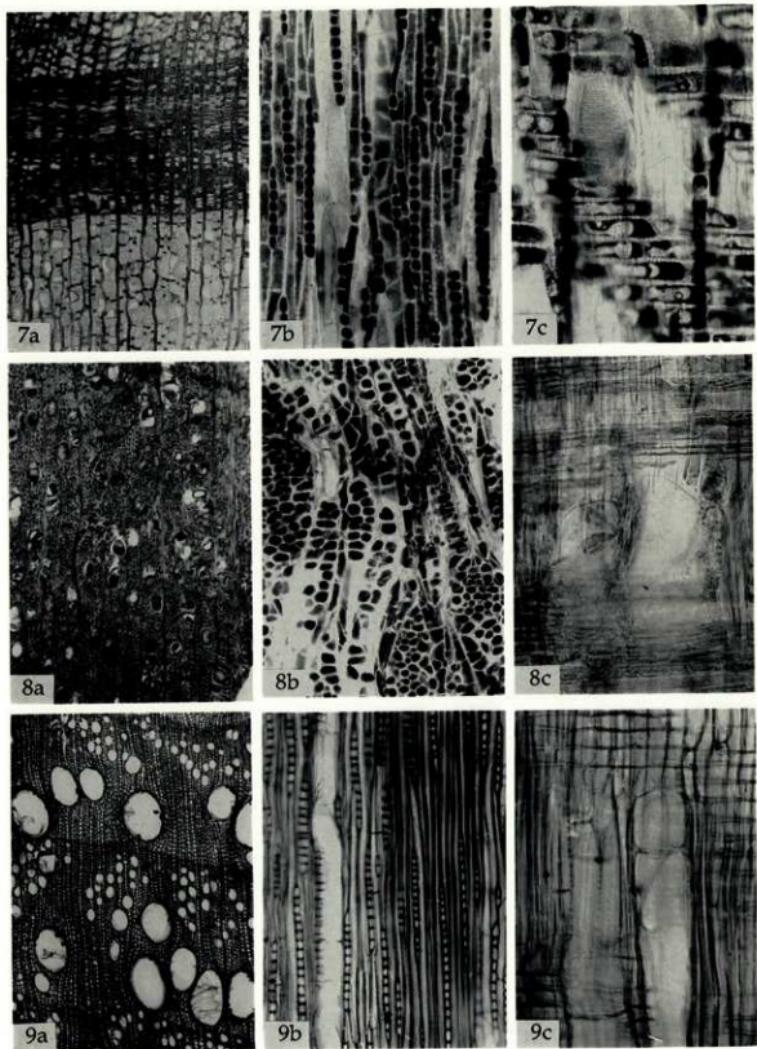


写真3. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（3）

7 a-7 c : ハンノキ属ハンノキ節 枝・幹材 (SHIM-176), 8 a-8 c : クマシデ属イヌシデ節 (SHIM-139),
9 a-9 c : スダジイ 枝・根材 (SHIM-49). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

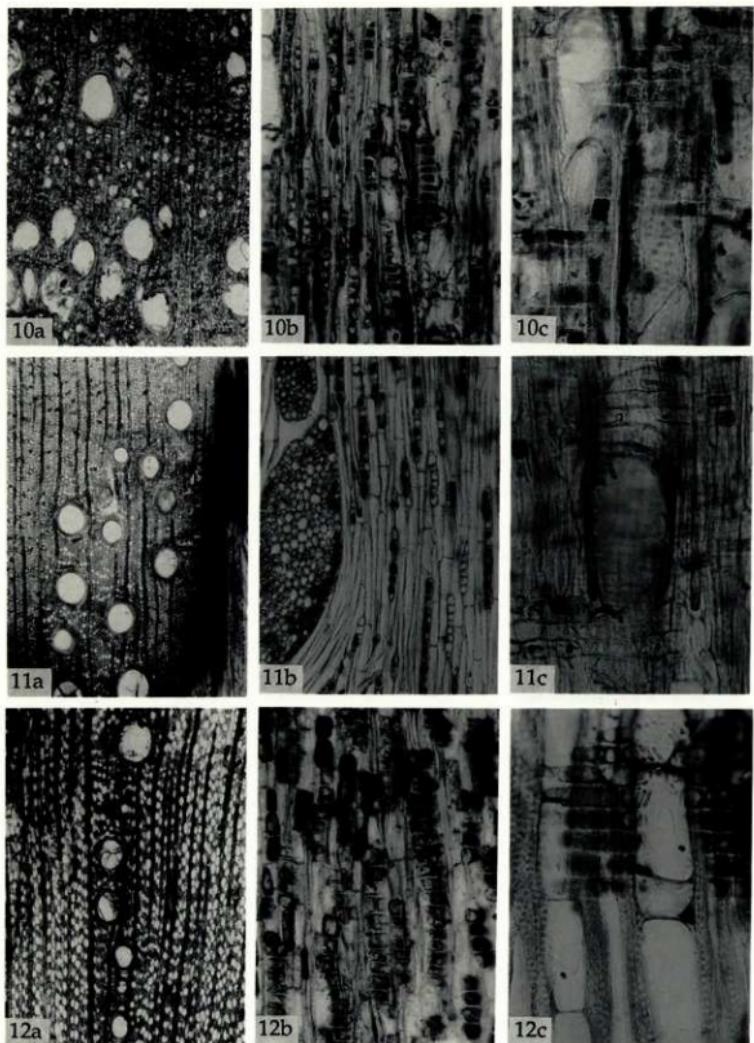


写真4. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（4）

10a-10c : スダジイ 幹材 (SHIM-137), 11a-11c : コナラ属アカガシ亜属 枝・幹材 (SHIM-90), 12a-12c : コナラ属アカガシ亜属 根材 (SHIM-192)。a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200。

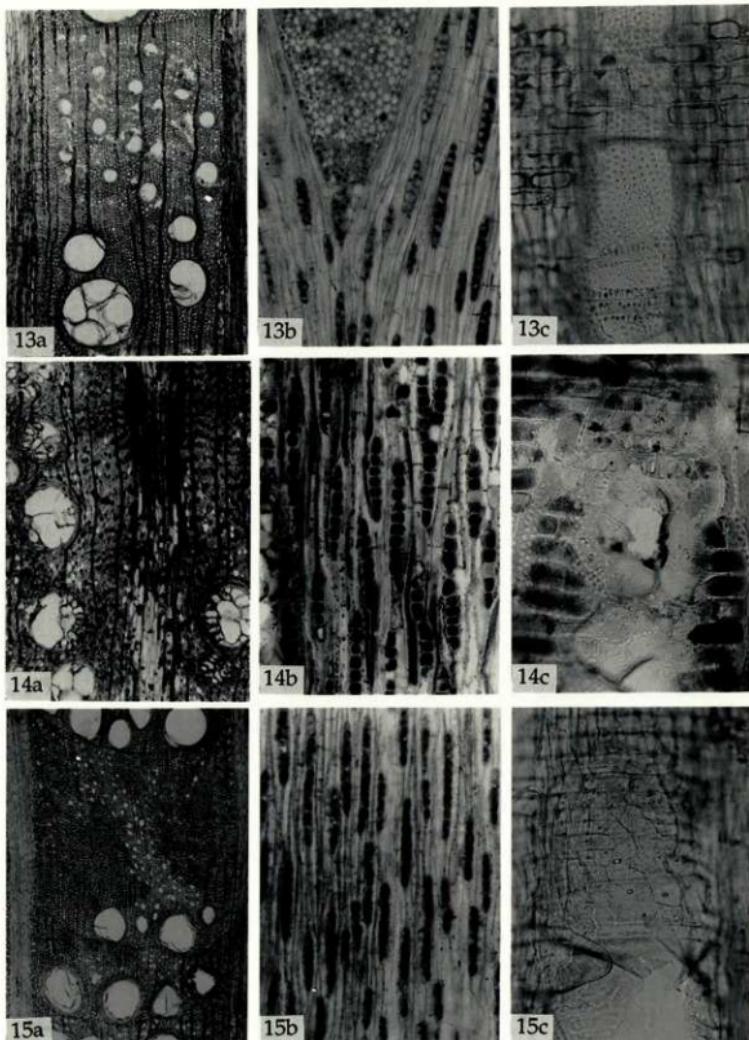


写真5. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真(5)

13a-13c : コナラ属クヌギ節 枝・幹材 (SHIM-195), 14a-14c : コナラ属クヌギ節 根材 (SHIM-220), 15a-15c : コナラ属コナラ節 枝・根材 (SHIM-116). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

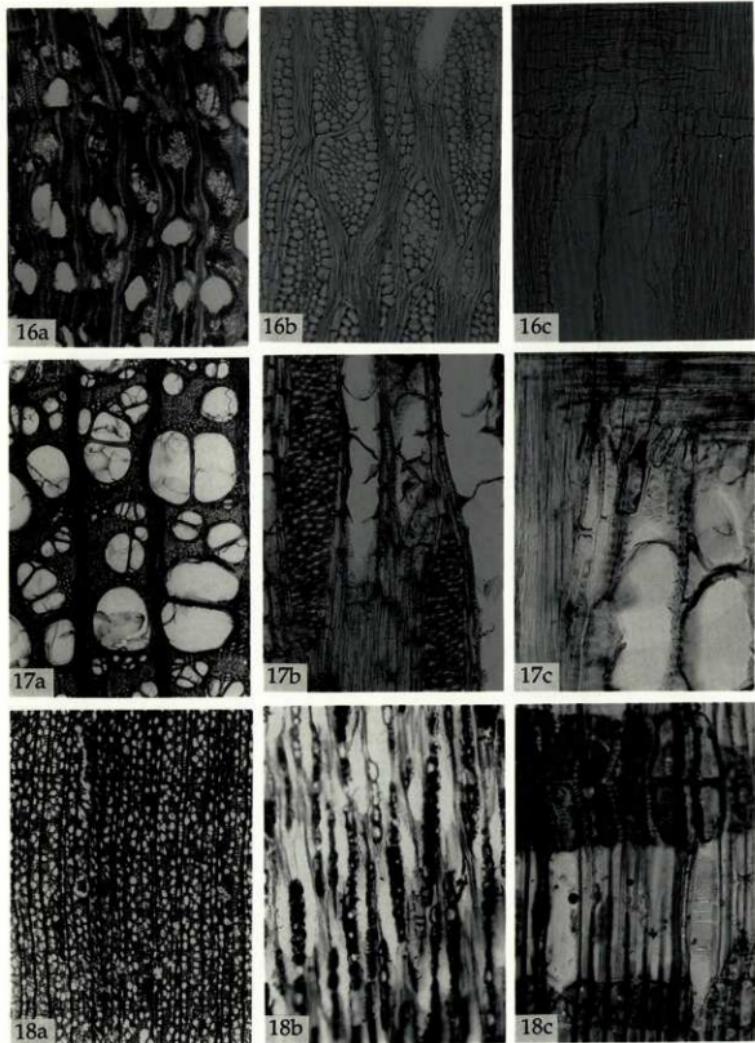


写真6. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（6）

16a-16c: エノキ属 枝・幹材 (SHIM-132), 17a-17c: ヤマグワ 枝・幹材 (SHIM-238), 18a-18c: サカキ 枝・幹材 (SHIM-78). a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×200.

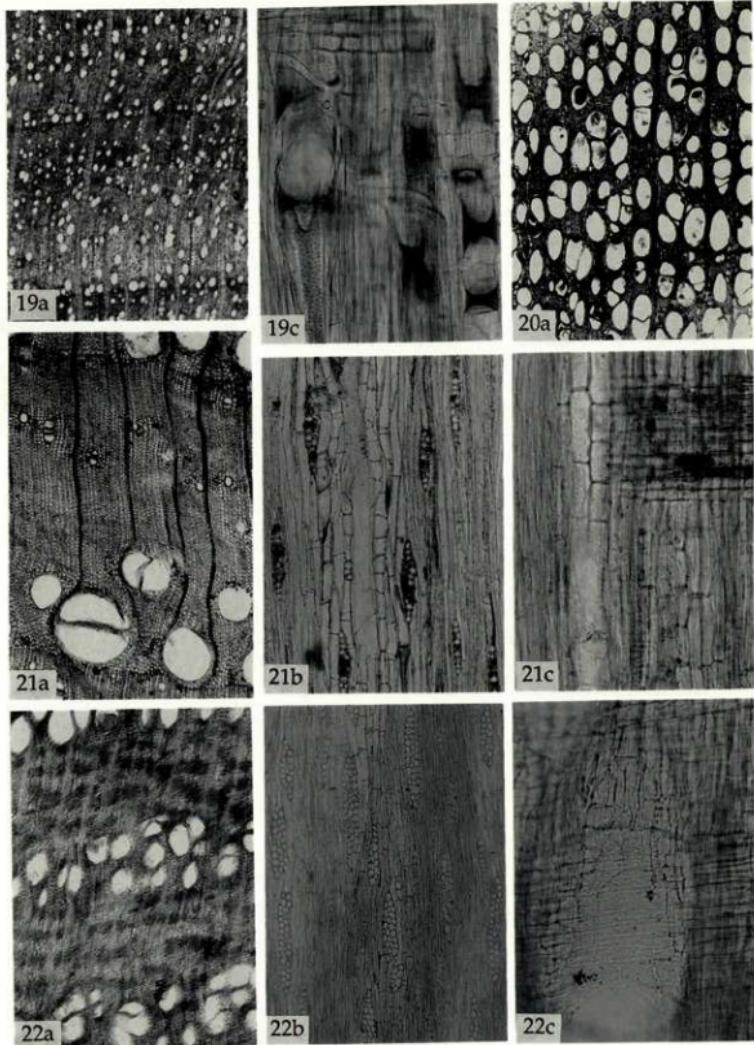


写真7. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（7）

19a, 19c : サクラ属 枝・幹材 (SHIM-79), 20a : サクラ属 根材 (SHIM-36), 21a-21c : ネムノキ 枝・幹材 (SHIM-154), 22a-22c : ムクロジ 枝・幹材 (SHIM-135), a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

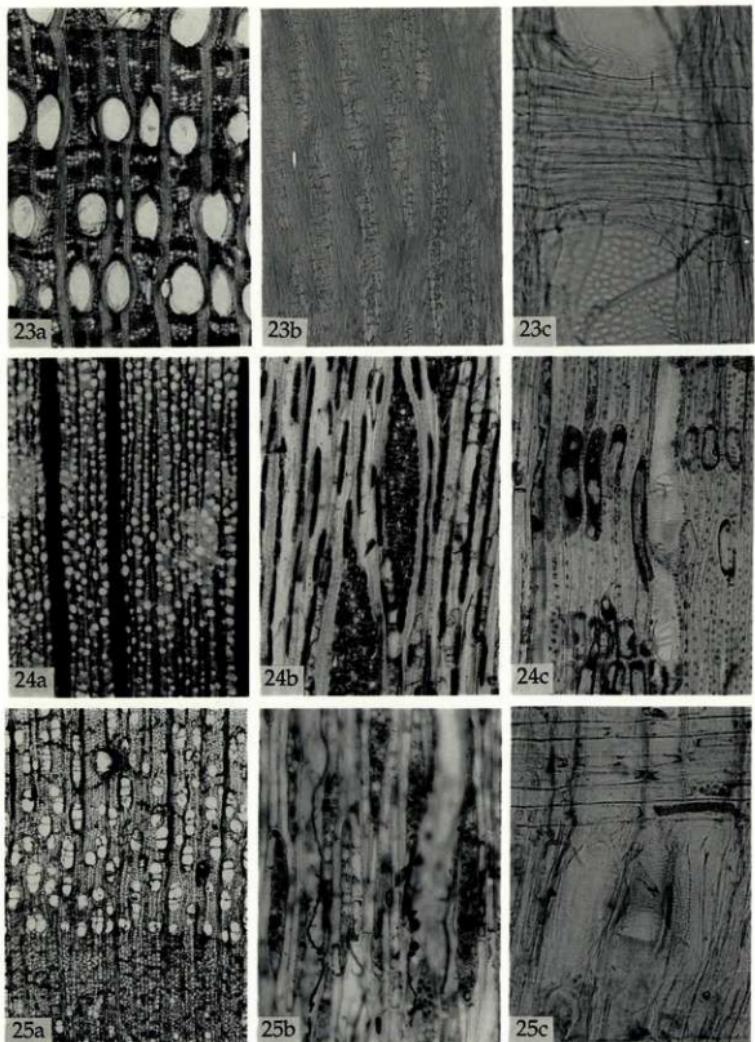
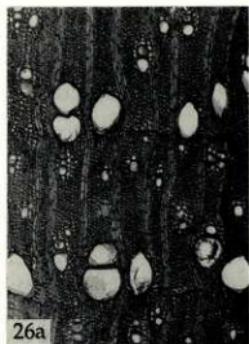


写真8. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（8）

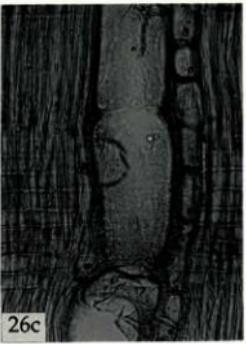
23a-23c : ハリギリ 枝・幹材 (SHIM-40), 24a-24c : シャシャンボ 枝・幹材 (SHIM-163), 25a-25c : エゴノキ属 枝・幹材 (SHIM-63). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.



26a



26b



26c

写真9. 島根大学構内遺跡出土木材の顕微鏡写真（9）

26a-26c : トネリコ属 枝・幹材 (SHIM-32). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

4 大型植物遺体

大型植物遺体は、VII層、VI層、V层、自然流路03埋土内で良好に保存されていた。これらは、現地で認識され、考古遺物と同様に採取されたものと、持ち帰った堆積物を水洗選別した結果、検出されたものがある。

水洗選別は、調査区北壁において、有機物を多量に含むVII層、VI a ~ d 層、自然流路03埋土から採取した試料を、層位ごとに1mm目の篩いで処理した。処理した堆積物の量は、4~321である。このうち、植物遺体が検索されたのは、VI d 層、自然流路03埋土のみで、その他の層位からは皆無であった。

出土した植物遺体は、表8・9に個体数で示している。破片試料の場合は、およそ1個体分になる様に破片を集めて換算している。

なお、同定出来ず、不明としたものの大半は、直径2~3mmの円形状の種子である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科トチノキ属 種子

成熟した種子が、およそ9個体分出土しており、果実はない。VII層から多く出土している。表面は黒色の光沢があり、いずれも破損している。数量が少ないため、人為的に遺棄された食料残滓か、自然落果に由来するかは判然としない。

アカガシ *Quercus acuta* Thunb. ブナ科コナラ属アカガシ亜属 果実、殼斗、幼果

果実が約18点、殼斗が約15点、殼斗内に堅果が包まれた幼果が11点出土している。果実は、いずれも比較的完形を保っている。径12~15mmで、表面は黒褐色。VI d 層、E 3グリッドで、まとまって出土している。殼斗は、椀状で輪状紋をもつ。

ナラガシワ *Quercus aliena* Blume ブナ科コナラ属コナラ亜属 殼斗、幼果

殼斗が約36点、殼斗内に堅果が包まれた幼果が18点出土している。殼斗は径15~20mm、椀状で覆瓦状の鱗片を持つ。表面は黒褐色。殼斗、幼果のみが出土しており、自然落果に由来するとみてる。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. エゴノキ科エゴノキ属 種子

34点が、完形を保って出土している。長軸が8~12mm、短軸が5~8mmの投弾形で、表面は黒褐色。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. ツバキ科ツバキ属 果実、種子

果実が1個体、種子が4個体出土している。果実は、黒褐色で、長軸が約3cm。中心の空洞部に種子が収まる。種子は、黒褐色で、径1~2cmの楕円形。

クスノキ *Cinnamomum Camphora* Sieb. クスノキ科クスノキ属 葉

長さ約5cm、幅約3cmの先端部が尖った卵形で、3主脈をもつ。

全体に、出土量が希薄で、本結果から周辺植生の全体像を考察するまでには到らない。

また、検出した遺体は自然落果に由来するものが多いとみられ、人間の食料残滓として積極的に見いだせる試料は少ないと考えている。今回は、分析量を限定しているが、試料を増やしたとしても、本調査区に関して、こうした傾向に変更はないとみている。

なお、大型植物遺体の同定にあたっては、萩村喜則氏（島根大学生物資源科学部）から有益な御教示を得た。記して、感謝致します。

表8 大型植物遺体一覧表（現地採集試料）

	VII層	VII層	VI d層	自然流路03埋土
トチノキ種子	1 (F 2) 6 (F 3)	1 (F 3)		1# (C 3)
アカガシ果実		3# (B 3)	13# (E 3)	2 (C 4)
ナラガシワ殻斗			2# (C 1)	1 (C 4)
エゴノキ種子	1 (F 3)			
ヤブツバキ果実				1 (B 3)
ヤブツバキ種子				7 (C 3)
不明	1 (F 3) 2 (F 2)	1 (F 3)		3 (C 3)

() 内は、グリッド名。#は破片から換算した個体数。

表9 大型植物遺体一覧表（水洗選別試料）

	VII層	VI d層	VI c層	VI b層	VI a層	自然流路03埋土
分析量	41	9.51	41	41	8.51	321
アカガシ殻斗						15#
アカガシ幼果						11
ナラガシワ殻斗		7#				26#
ナラガシワ幼果						18
エゴノキ種子						33
芽		283				214
クスノキ葉						4
不明		9				233

参考文献

岡本省吾・北村四郎『原色日本樹木図鑑』保育社 1959年

滋賀県教育委員会「第8章 植物遺体」『栗津湖底遺跡第3貝塚（栗津湖底遺跡I）』1997年

第7章 考 察

1 遺跡の景観と人類活動

第6章での諸検討で得られた、本調査区(深町地区1)における成果は、南西約120mの第1次調査区(橋繩手地区1)成果¹⁾と併せて、島根大学構内遺跡における縄文早期末から前期ないし中期までを中心とした生態環境をより詳細に明らかにしている。ここでは、前章での成果を咀嚼した上で、細部を捨象し、人類活動との関連を踏まえながら、統括的に整理しておく。

当該期の遺跡内は、縄文海進によって水域が進入し、第1次調査区西側の菅田丘陵と本次調査区東側の金崎丘陵との間に、内湾が形成されていたとみられる。したがって、概略的には、両調査区は、内湾を挟んで、汀線付近に対峙する様に立地していたと想定してよい。

両調査区は、近接した場所に立地するが、細部において、若干異なる環境にあった様である。

まず、珪藻分析の結果、調査区内ないし周縁の水域は、第1次調査区ではアカホヤ火山灰降灰前後で一定の海水の影響が看取出来たのに対して、本調査区では、基本的に淡水ないし塩分濃度の低い環境下にあった様である。この要因の一つは、本調査区が内湾奥部に位置し、河川淡水の影響が、相対的に強かったことにあろう。一般に、より複合的な生業を基盤として成立する縄文遺跡は、異なる環境の遷移帯に設営される傾向がある。これに照らして鑑みれば、上記の分析結果は、本遺跡が、海水、汽水、淡水域を包摂する水環境を同一領域として占地していたことになり、立地条件の優位性を示唆しているかもしれない。

陸域の植生では、花粉分析の結果、縄文早期末には、内湾東側の本調査区及び、その北東側、西川津遺跡(海崎地区)一帯にかけて、クロマツを要素とする海岸林が²⁾、内湾西側の第1次調査区でコナラ類を要素とする落葉樹林がひろがり、縄文前期には、両調査区ともコナラ類を主要構成種とする森林に包摂されていた様である。

出土した材化石の樹種鑑定成果によても、「全般に落葉樹のほうが常緑樹に比べて比率が高く、落葉広葉樹林中に常緑針葉樹やスダジイやアカガシ亜属といった常緑広葉樹が混生していた」と想定されており、花粉分析結果と矛盾しない。

第6章2で触れられている様に、従来、当該期における宍道湖周辺地域の一般的な植生として、アカガシ亜属を要素とした照葉樹林が想定されていたが、今回の結果は、これに若干の変更を迫るものである。周辺に当該期の良好な調査例が希少であるため明確でないが、こうした現象は、本遺跡周辺における局地的なものであり、なおかつ人為的な関与による可能性がある。これが遺跡形成、内容に与えた影響については、今後、追及していく課題となる。

大型植物遺体では、縄文早期末包含層からトチノキ種子が若干出土している。これを積極的に評価すれば、食料残滓である可能性を看取出来るかもしれないが、資料的に少なく、今後の周辺調査に期待せざるを得ない。

堆積状況をみると、VII層の最上部でアカホヤ火山灰を挟在し、その上位に、VII層と層厚約1.6mにも及ぶVI層(黒色腐植土と黒褐色泥土の互層が明暗縞状に堆積)が³⁾ある。地質学的検討によれば、アカホヤ火山灰降灰後のVII層上面で、堆積に不整合が認められている。一方、第1次調査区では、

アカホヤ火山灰降灰後の縄文前期初頭段階で、層厚約1.4mもの河川洪水による砂礫層（第6層）の堆積が認められており、相対水面の一時的低下が関与していることが想定されている²。第6章1で指摘されている様に、これと本調査区における前述した不整合とが対応する可能性がある。

前述した黒色腐植土と黒褐色泥土の互層（VIa～d層）は、前期初頭から堆積を開始している。VIa層上部には、三瓶角井降下火山灰層（第2ハイカ層）が部分的に挟在することが判明しており、これと土器型式との関係、放射性炭素年代等から、概ね前期末ないし中期まで、堆積が続いていると考えられる。したがって、第6章1でも触れられているが、概略的に想定すると、VI層は、第1次調査区層序における第4～5層ないし第5層³に対応するものとみている。また、こうした堆積環境と相対水面との関係性については、今後とも、周辺地形の推移と併せて、慎重に追及していくたいと考えている。

VI d層最上部からは、櫛・ヤス柄や、焦痕を受けた自然木等が出土しており、人類活動の痕跡は確かに見受けられるが、第1次調査区と比較すると、全般に縄文時代の考古遺物は希薄である。本調査区が、居住域とはやや距離のある場所に位置していたためであろうか。

さて、VI層上面においても不整合が想定され、その後、上位に、灰白色粘土層のV層や黄褐色粘土層を中心としたIV、III b層が、厚く堆積する。明確な時期は特定出来ないが、縄文中期から弥生中期初頭までの可能性がある。この間、遺物は殆ど出土しておらず、遺跡利用の証拠は見つかっていない⁴。遺跡周辺における生態条件の変化によって、縄文前期までの遺跡立地の優位性、必然性が、桎梏に転化したのだろう。

「III b層・IV層」上面には、弥生中期初頭の造構が残されており、遺跡周辺の人類活動は、新たに水稻農耕段階の生産域、居住域として再開した様である。今後、周辺部で、水田が検出される可能性は、充分、想定出来よう。

以上、本調査区における景観と人類活動の推移を生態学的検討を取り入れながら、瞥見し、派生する今後の課題を認識した。第1次調査区成果と併せて、資料は蓄積されつつあるが、なお、今後の周辺歴史調査によって前記した諸課題を解明していく必要がある。

本次調査も、関連諸科学研究者の御協力を頂き、総合的、学際的に情報が得られる様、務めた。文末ですが、記して感謝致します。

注

- (1) 「第6章 島根大学構内遺跡（橋手地区）の古環境復元」「島根大学構内遺跡第1次調査（橋手地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- (2) 中山勝博「島根大学構内遺跡にみられる側方付加堆積物」「島根大学構内遺跡（橋手地区）発掘調査概報I」島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- (3) 「第4章 基本層序」「島根大学構内遺跡第1次調査（橋手地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- (4) ただし、III b・IV・V層が、弥生前～中期初頭の堆積であれば、付近での水田利用の可能性が残される。

2 権・棒状木製品について

権は、舟の推進具として、漁撈活動、物資運搬の際、水上移動に使用されたことは言うまでもない。

これらは使用法によって大別され、両手で握って漕ぐものがパドル、舷側部に設けた権座を視点にして漕ぐものがオールである¹¹⁾。現状では、準構造船を表現した古墳中期の船形埴輪¹²⁾が権座を有する確実な古い例で、縄文・弥生時代の舟にこうした設備は知られていない。また、既出の資料は、現状ではパドルと推定される製品のみである。しかし、弥生絵画土器¹³⁾や銅鐸絵画¹⁴⁾の中には、複数のオールらしきものによって航行する舟の様子が表現されている例があり、今後、弥生時代のオールが検出される可能性はある。

特異な資料としては、千葉県八日市場大境、八日市場旧新田、検見川（畠町）¹⁵⁾、多古田¹⁶⁾（図29-43・44）等で出土している縄文後・晩期の類例の様に、柄頭のグリップに装飾的な彫刻が施された精製品がある。また、近世後半の北海道千歳市美々8遺跡からは、水搔き部にメカジキの線刻画を描いた権が出土している¹⁷⁾。これらの資料は、権に対して特別な思い入れが付加されていたことを伺わせる。また、弥生前期の資料だが、大阪府高宮八丁遺跡¹⁸⁾（図29-49）では、柄部の両端共に水搔き部が付随するものが存在する。

表10は、所属時期の確実な縄文時代の権一覧で、現状では前期以降に検出されている。このうち、福井県鳥浜貝塚では、前期北白川下層式に所属する61点もの資料が出土しており、樹種の大半は、ヤマグワ、ケヤキ等で占められる¹⁹⁾。これらは、水搔き部や柄頭の形態によって類型化出来るようである。

山陰地域でも、スギ、ヤマグワを使用した、布施遺跡（後期）、桂見遺跡（晩期）等の類例がある。本遺跡の資料もスギ製で、加工性、軽軟性、耐久性に優れたスギの材質特性を理解した上で、樹種選択したと予測される。本資料は、アカホヤ火山灰層上位から出土しており、同一層位（VId層最上部）出土木材の¹⁴C年代測定値が、5330±200y.B.P.を示していることから、概ね、前期後半の所産と推定出来る。

棒状木製品は、先端部の平坦面にヤス等を装着したか、あるいは現状のまま使用する等して魚類等を刺突した漁撈具と想定出来る。同様の類例は、鳥取県淀江町・富繁渡り上がり遺跡で、前期に所属する長さ395cm、最大径2.5cmの完形品が出土しており²⁰⁾、本製品とあわせて貴重な資料である。また、鳥浜貝塚では、ソケット状の柄にヤスを装着したままの製品が出土しており²¹⁾、装着形態にもバラエティーがあることが伺える（図30）。

棒状木製品1本と権2本は、3者が並べられた状態で検出されており、現位置に置かれたまま、ほとんど移動することなく埋没した状況が想定されることから、1艘の舟においてセットで使用された可能性をもつ。このことは、ヤスの具体的な使用方法の一例を復元する上でも手がかりとなり、推測を交えると、例えば、舟上から水中を覗きながら魚類を刺突、捕獲した、等が想像出来る。

具体的な捕獲対象魚類としては、本遺跡と環境の似た、近隣の西川津遺跡（海崎地区）²²⁾出土、縄文早期末～前期初頭の魚・海獣類残滓から看取出来る。これによれば、魚骨には、クロダイ属、マダイ、フグ科、スズキ属、エイ類、海獣骨としてクジラ目があり、竹広文明氏の研究による、内湾性、汽水性の3b類²³⁾（クロダイ属、フグ科、スズキ属、エイ類）が、60%以上を占め、主要構成種

表10 繩文時代の櫛一覧表（富山考古学会1989を底本に作成）

No.	遺跡名	遺物名	樹種		時期	長さ	幅	厚さ
1	山形 押出遺跡	櫛			前			
2	千葉 加茂遺跡	櫛(第1号)	イスガヤ	ほぼ完	前	(123.4)	6	1
3	加茂遺跡	櫛(第2号)	トネリコ属?	ほぼ完	前	(89.3)	7	1
4	加茂遺跡	櫛(第3号)	イスガヤ		前	(99.5)	11.5	2
5	加茂遺跡	櫛(第4号)	イスガヤ	断片	前	(70.5)	(7.2)	
6	加茂遺跡	櫛(第5号)	イスガヤ		前			
7	加茂遺跡	櫛(第6号)	イスガヤ		前			
8	石川 真輪遺跡	櫛	ヤチダモ		前	(76.0)		1.3
9	真輪遺跡	櫛水かき状			前			
10	福井 鳥浜貝塚	櫛1			前	(45)	6.2	1.3
11	鳥浜貝塚	櫛2			前	(14)	5.3	1.7
12	鳥浜貝塚	櫛3	ケヤキ		前	(66)	12.5	1.5
13	鳥浜貝塚	櫛4	ケヤキ		前	(70.4)	9.2	0.9
14	鳥浜貝塚	櫛5	ケヤキ		前	122.2	8	1.4
15	鳥浜貝塚	櫛(6341)	ケンボナシ属(狂目)		前			
16	鳥浜貝塚	櫛(3205)	ヤマグワ(狂目)		前			
17	鳥浜貝塚	櫛(3173)	イスガヤ		前			
18	鳥浜貝塚	櫛(1205)	ケヤキ		前			
19	鳥浜貝塚	櫛(3016)	ヤマグワ(狂目)		前			
20	鳥浜貝塚	櫛(3043)	ヤマグワ(狂目)		前			
21	鳥浜貝塚	櫛(6062・6596)	アカガシ坐属		前			
22	島根 島大構内遺跡(深町地区)	櫛A	スギ	完形	前	178	11	2
23	島大構内遺跡(深町地区)	櫛B	スギ	完形	前	172	10	2
24	鳥取 桂見遺跡	櫛J01	ヤマグワ?	完形	中後?	134	6.4	2
25	桂見遺跡	W135	ヤマグワ		後~奈良	(50.5)	(11.0)	2.1
26	桂見遺跡	W136			後~奈良	(51.5)	10.8	2.7
27	桂見遺跡	W137	スギ		後~奈良	(76.7)	8.9	2.1
28	桂見遺跡	W138			後~奈良	(93.5)	10	2
29	桂見遺跡	W139			後~奈良	(57.9)	9.1	1.9
30	東京 武藏野公園低湿地遺跡	櫛状木製品	コナラオクスギ		後	(39.7)	6.7	1
31	埼玉 伊奈氏扇敷跡	櫛	カヤ		後	(44.5)		1.5
32	寿能泥炭層遺跡	櫛状木製品0169	クスギ(狂目)		後	(20)	6.5	2.5
33	寿能泥炭層遺跡	櫛状木製品0689	クスギ(狂目)		後	117	6.3	2.5
34	寿能泥炭層遺跡	櫛状木製品0717	クスギ(狂目)		後	106	9	3.5
35	千葉 旧新田	櫛			後			
36	鳥取 布施遺跡	櫛1	スギ		後	(103.3)	6.8	
37	布施遺跡	櫛2	スギ		後	(80)	6.4	2
38	布施遺跡	櫛柄状木製品7	ヤマグワ		後	(14)		
39	布施遺跡	櫛状木製品	ヤマグワ		後	(125)	6	
40	埼玉 寿能泥炭層遺跡	櫛柄頭0726	カヤ(板目)		後晩	(5)	5.8	2.5
41	寿能泥炭層遺跡	櫛柄頭0726	カヤ(板目)		後晩	(26.5)	5.8	2.5
42	埼玉 藤子遺跡	櫛2本			後晩			
43	千葉 多古田遺跡	櫛	カマ		晩			
44	多古田遺跡	櫛	イスガヤ		晩			
45	多古田遺跡	櫛	イスガヤ		晩			
46	滋賀 滋賀里遺跡	櫛状木製品AW05	コナラオクスギ		晩			
47	滋賀里遺跡	櫛状木製品AW06			晩			
48	滋賀里遺跡	櫛状木器未製品AW07	コナラオクスギ		晩	110		

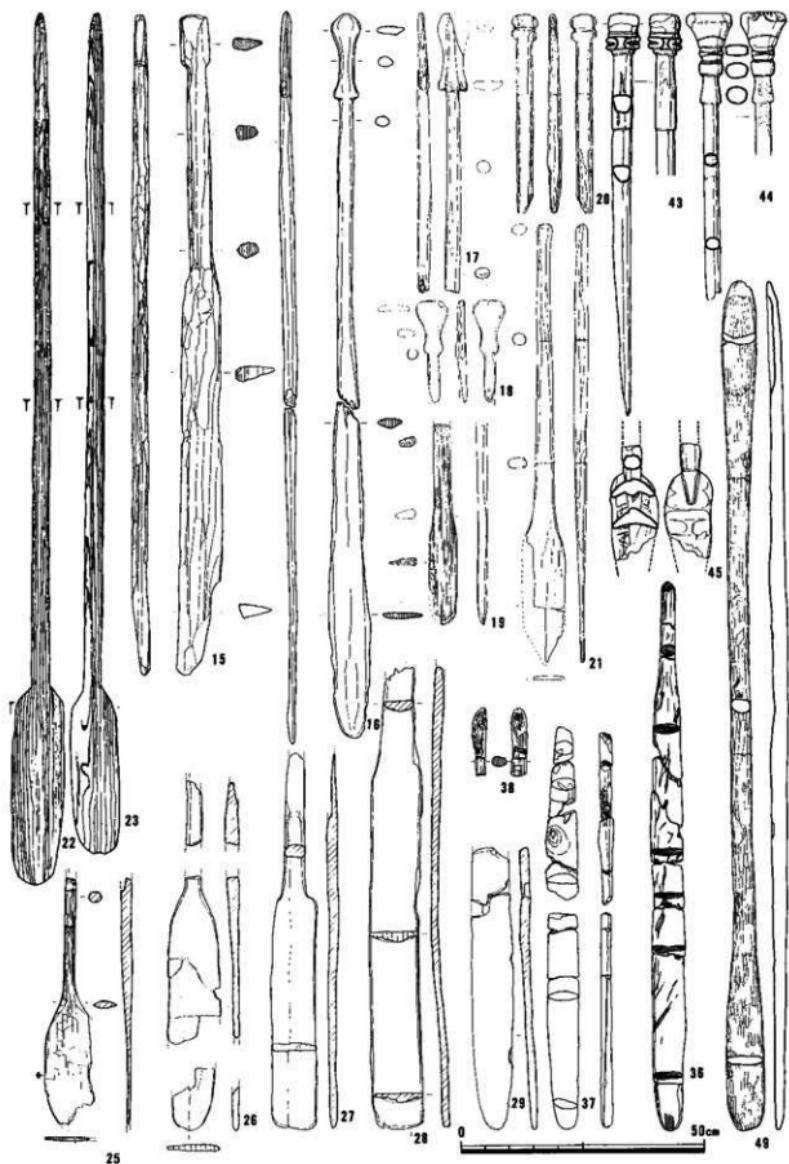


図29 繩文・弥生時代の櫂 (1/10、各文献より転載)



図30 鳥浜貝塚出土のヤス柄（1／4、注9より転載）

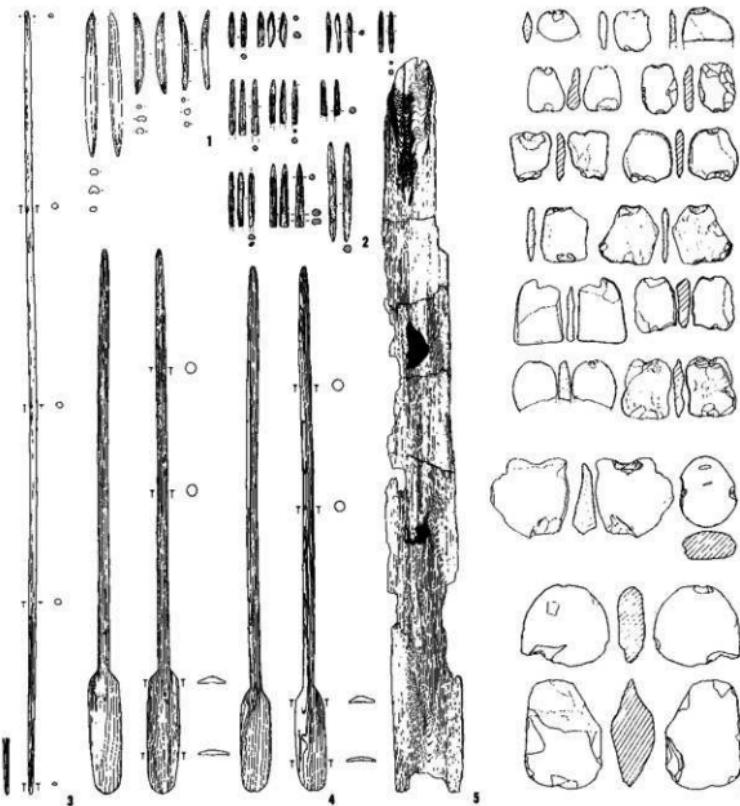


図31 縄文海進期の古穴道湾における漁撈活動生産用具

1：ヤス(佐太講武貝塚、1／4)、2：ヤス(西川津遺跡・海崎地区、1／4)、3：棒状木製品(本遺跡、1／16)
4：櫛(本遺跡、1／16)、5：九木舟(本遺跡・橋繩手地区、1／40)、6：石錐(西川津遺跡・海崎地区、1／6)

となっている。ヤスは、石錐と併に、「内湾性漁業^①」の主要な道具とみられており、西川津遺跡（海崎地区）でも多量の骨格製ヤスや大小石錐出土をみている。こうした諸資料から勘案して、本製品は、古穴道湾を主たる舞台に上記魚類を捕獲対象として使用された蓋然性が高い（図31）。

さて、北部九州地域では、縄文前期の段階から、湾最奥部、内湾、外洋等、多様な水域に適応して遺跡が存在しており^②、石鉛、石鋸、結合式釣針等、該地に特徴的な漁撈具を使用して、外洋を含む領域で漁撈活動を展開している。縄文前期段階の山陰地域遺跡では、北部九州に特徴的なこうした漁撈具は未検出で、前記した骨格製ヤス、大小石錐のみが出土している。しかし、西川津遺跡出土の大型のフグ、マダイは島根半島北岸で捕獲したとみられており、どの様な漁法を用いたのか、外洋域においてもヤスが使用された可能性を含めて、今後、外洋性の漁業形態を復元することが課題となる。

注

- (1) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿原始篇』1993年
- (2) 宮崎県西都市西都原169号墳、大阪市長原高廻り1号墳出土の埴輪等。
- (3) 奈良県清水風遺跡、坪井遺跡、岡山県城遺跡の絵画上器に描かれている、舷側部から列状に伸びた多量の櫂は、オールの可能性がある。
- (4) 福井県春江町井向1号鐸の例がある。
- (5) 松木信廣「第五章 上代独木舟の考察」「加茂遺跡一千葉附加茂独木舟出土遺跡の研究」三田史学会 1952年
- (6) 鈴木公雄「多古田泥炭層遺跡」「八日市場市史」上巻 1982年
- (7) 田口尚「北海道美々8遺跡」「日本考古学年報』44 日本考古学協会 1993年
- (8) 塩山則之「高宮八丁遺跡一寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告書」寝屋川市文化財資料10 寝屋川市教育委員会 1987年
塩山則之・露口真弘『高宮八丁』遺跡一木器編一寝屋川市教育委員会 1989年
- (9) 綱谷克彦編『鳥浜貝塚研究』1 福井県立若狭歴史民俗資料館 1996年
- (10) 岩山文章「鳥取県淀江町・富繁渡り上り遺跡」「第7回 中四国縄文研究会」1996年
- (11) (9)と同じ。
- (12) 井上貴央「西川津縄文遺跡から検出された動物遺存体について」「朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書III(海崎地区1)」内田律雄編 島根県教育委員会他 1987年
- (13) 穴道湖、中海、美保湾、外洋棲息の魚類を水環境ごとに再分類したもので、3 b類は、穴道湖～美保湾棲息種に属する。
- (14) 竹広文明「汽水域周辺の生業－縄文、弥生時代における中海・穴道湖周辺の漁撈活動－」「海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化－その地域性と一般性－ 平成7年度報告・資料集」高安克己編 1996年
- (15) 渡辺誠「縄文時代の漁業」雄山閣 1973年
- (16) 木村幾太郎「北部九州の漁撈活動」「文明のクロスロード Museum Kyushu』24 1987年

表10の文献（表のNoに文献番号が対応）

1. (財) 元興寺文化財研究所『出土物の実態調査報告書』1986年
- 2 ~ 7. 三田史学会「加茂遺跡一千葉附加茂独木舟出土遺跡の研究」1952年

- 8～9. 能都町教育委員会「石川県能都町 真鶴遺跡」1986年
- 10～14. 福井県教育委員会「鳥浜貝塚 -縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査-」1979年
- 15～21. 網谷克彦編「鳥浜貝塚研究」1 福井県立若狭歴史民俗資料館 1996年
- 22～23. 本書第5章2(3)を参照のこと。
24. 鳥取市教育委員会「桂見遺跡発掘調査報告書」鳥取市文化財報告V 1978年
- 25～29. (財)鳥取県教育文化財団「主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 桂見遺跡 -八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区-」鳥取県教育文化財団調査報告書45 1996年
30. 武藏野公園泥炭層遺跡調査会「武藏野公園低湿地遺跡」1984年
31. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書II -赤羽・伊奈氏屋敷跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第31集 1984年
- 32～34. 埼玉県教育委員会「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 -人工遺物・総括編-」1984年
35. 文献2と同じ。
- 36～39. (財)鳥取県教育文化財団「布施遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育文化財団調査報告書7 1981年
- 40～41. 文献32と同じ。
42. 埼玉県「膝子遺跡」『新編埼玉県史』資料編1 1980年
- 43～45. 鈴木公雄「多古田泥炭層遺跡」「八日市場市史」上巻 1982年
- 46～48. 湖西線関係遺跡発掘調査会「湖西線関係遺跡発掘調査報告書」1973年

その他の参考文献

富山考古学会縄文時代研究グループ「縄文時代の木の文化」真陽社 1989年

第8章 まとめ

本次調査を実施するにあたり、調査区が、第1次調査区（橋綱手地区1）と同様の立地環境にあることから、これまでに解明してきた縄文海進期における考古学的成果、古環境復元を追認、補足する、新たな資料が得られることを主要な問題関心とした。調査の結果、主として縄文早期から弥生中期初頭にかけての諸成果に恵まれた。これを要約的に述べると以下の点が明記出来る。

まず第1点は、VI d層最上部における縄文前期に比定される櫂と棒状木製品の出土である。棒状木製品は、全長258.5cm、最大径2.5cmと極めて長細で、当時の非常に高度な木製品加工技術をうかがえる貴重な資料となった。

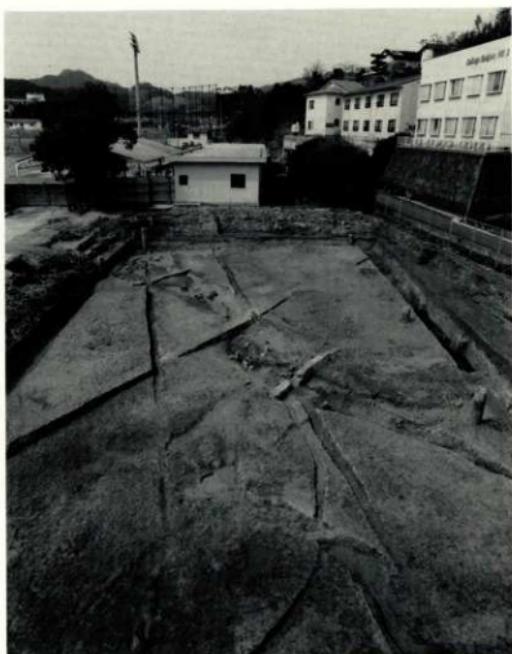
これらは、完形で出土している点に併せて、3者が現地に置かれた状態のまま一括出土し、一つの丸木舟においてセットで使用された可能性をもつて重要視される。これまでの古環境復元研究の成果⁽¹⁾によると、該期には縄文海進による水域の進入によって、内湾や溺れ谷が複雑に形成されたことが実証されている。こうした遺物は、これまでに発見されている丸木舟⁽²⁾や各種漁撈具（骨角製刺突具、石錘等）⁽³⁾とあわせて、古穴道湾縁辺部に適応、展開した、いわゆる「内湾性漁業」の具体的な漁業形態やその地域的特性を考察する上で、重要な位置を占めよう。

第2点は、「III b層・IV層」上面における弥生中期初頭の流路状造構や溝の検出である。

近隣の西川津遺跡やタテチョウ遺跡では、すでに膨大な量の土器、磨製石器、木製農工具類が出土しており、弥生時代全般にわたる大学周辺一帯の中核的位置を占めた遺跡として認識されているところである。本調査区における弥生中期初頭の遺構の検出は、朝酌川北側の谷奥部にも、農耕社会段階における生産域や居住域の存在を想定させており、今後、周辺部の慎重な調査が必要となる。また、拠点集落と目される西川津遺跡⁽⁴⁾やタテチョウ遺跡との共時的な相互関係を明らかにしておくことも、本地域一帯における集落間構造を理解する上で、追及課題となる。

引用文献

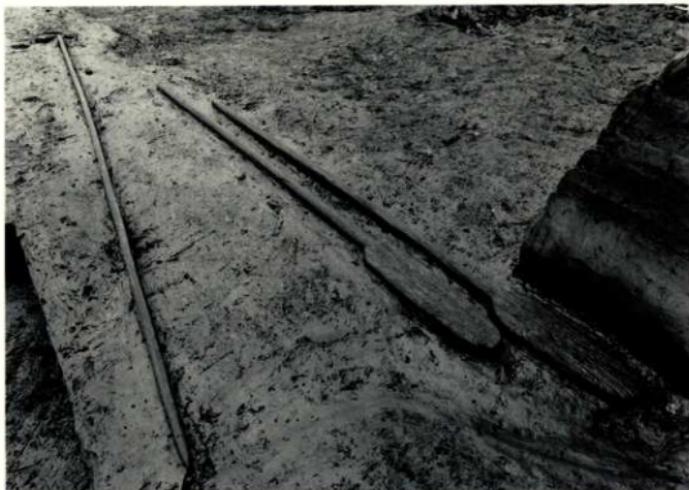
- (1) 徳岡隆夫・中村唯史他「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『汽水域研究』3 島根大学汽水域研究センター 1996年
- (2) 中村唯史「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『島根県地学会誌』11 1996年
- (3) 会下和宏他「島根大学構内遺跡第1次調査（橋綱手地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- (4) 内田律雄他「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区1）」島根県教育委員会他 1987年
- (5) 田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究（伝統文化）』12 島根大学汽水域研究センター 1996年



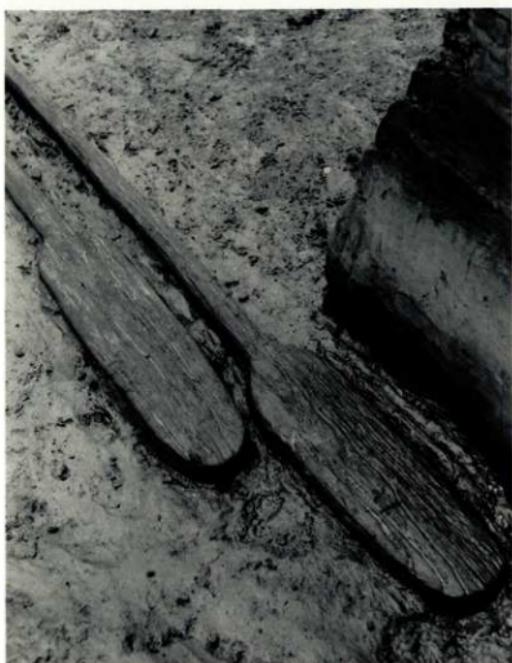
1. 「III b層・IV層」上面全景（南から）



2. 流路状遺構01（北西から）



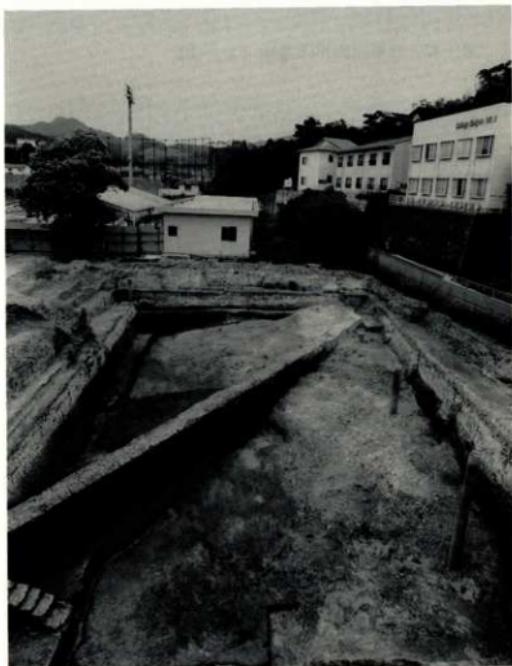
1. 標・棒状木製品出土状態（西から）



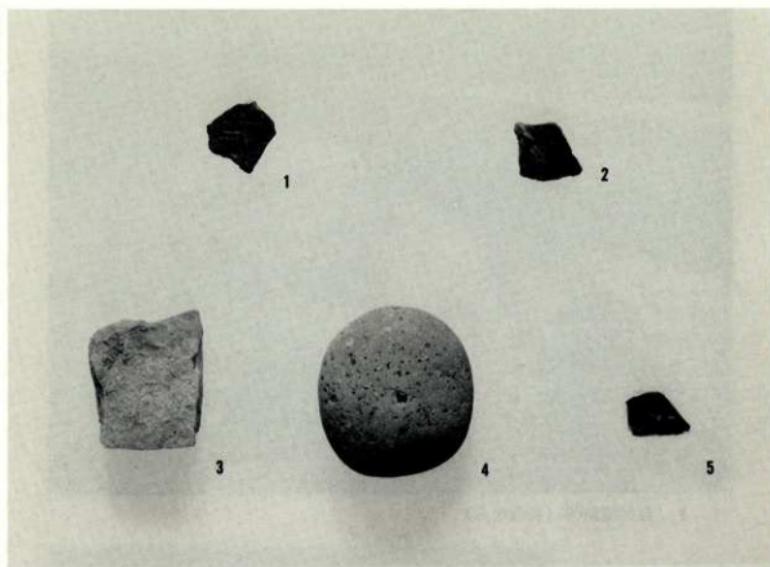
2. 標出土状態（西から）



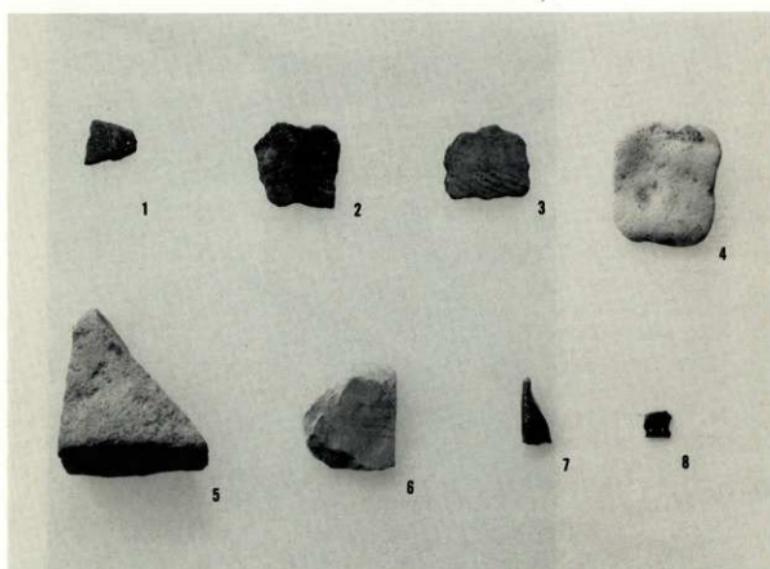
1. 自然流路03（北西から）



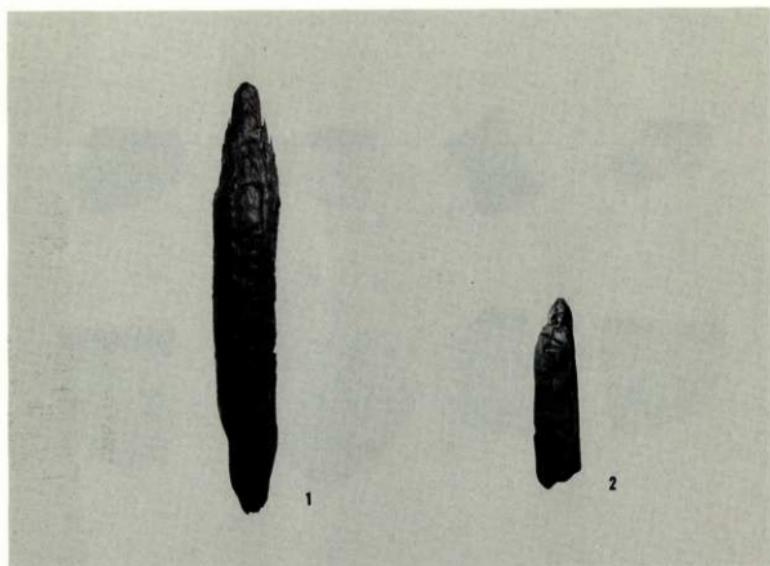
2. 区層（基盤層）上面全景（南から）



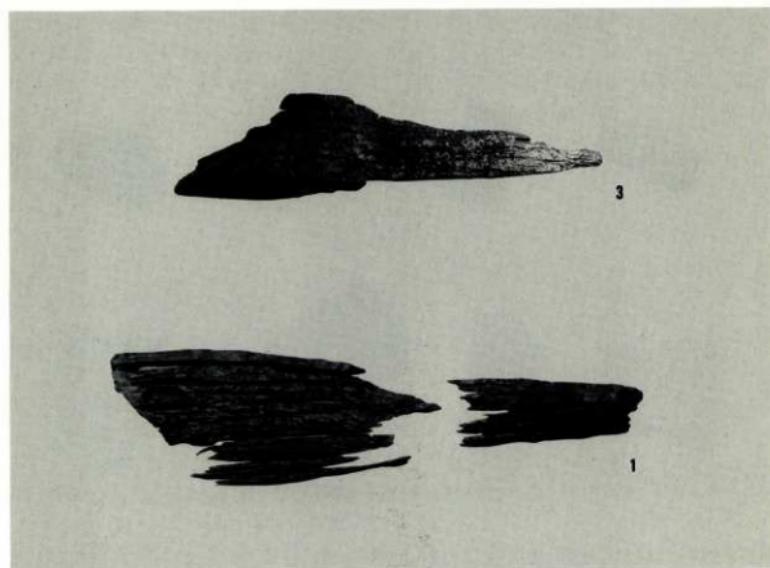
1. VI・VII・IX層上面出土遺物 (1 / 3)



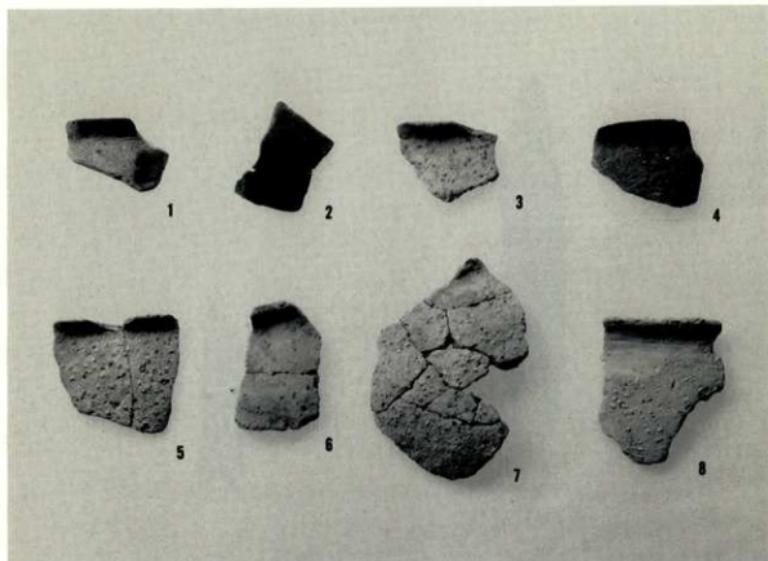
2. 自然流路03 (下底面) 出土遺物 (1 / 3)



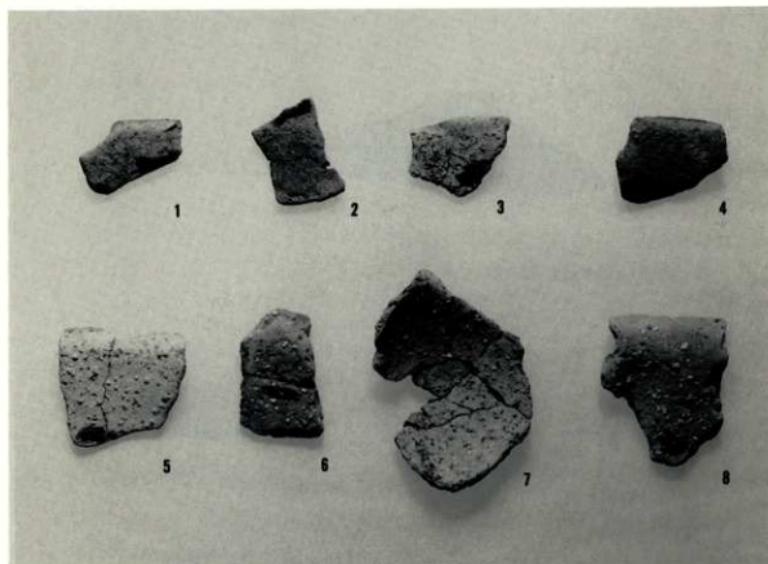
1. 木製品 (1/6 · 1/3)



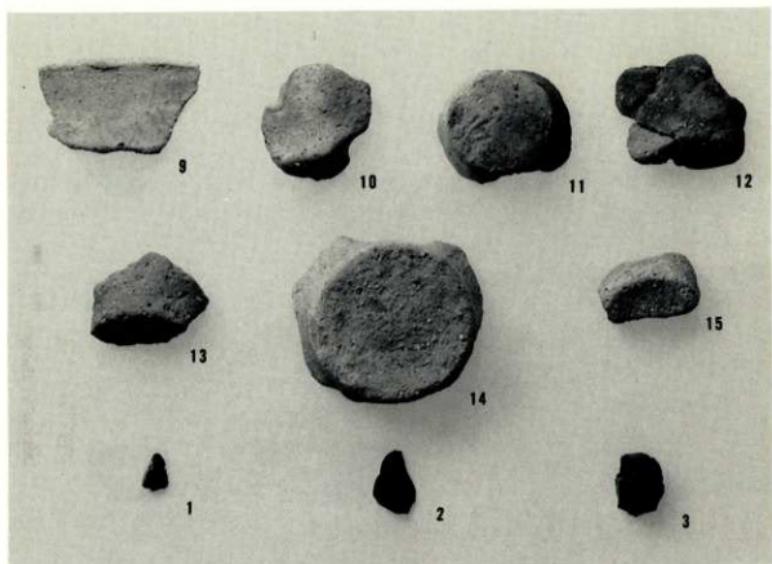
2. 木製品 (1/3)



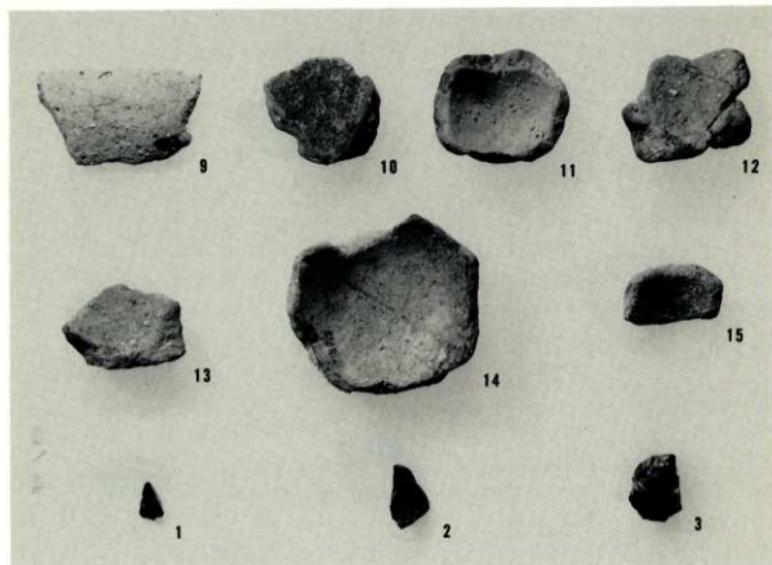
1. 流路状構01埋土出土弥生土器 (1 / 3、外面)



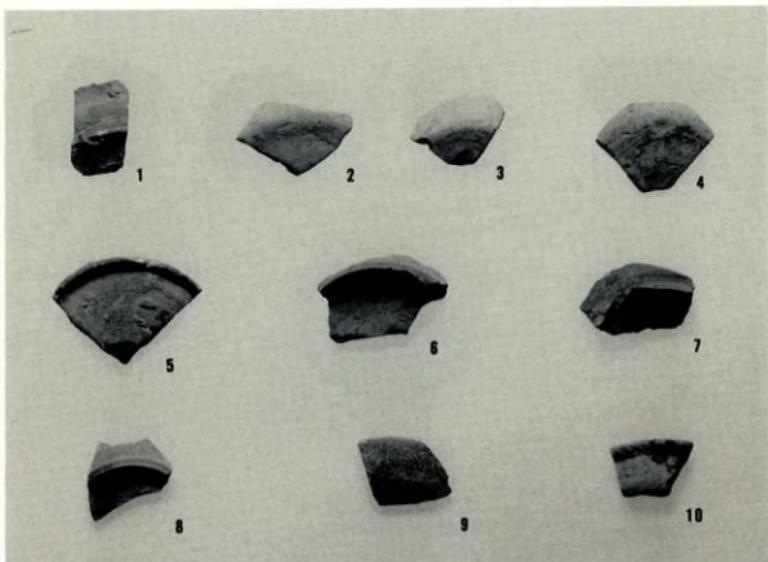
2. 同上 (1 / 3、内面)



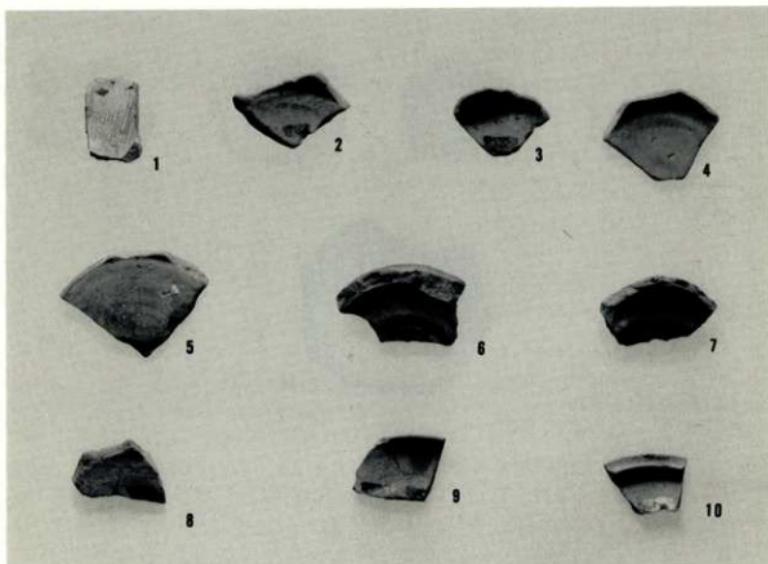
1. 流路状構01埋土出土弥生土器・石器 (1／3、外面)



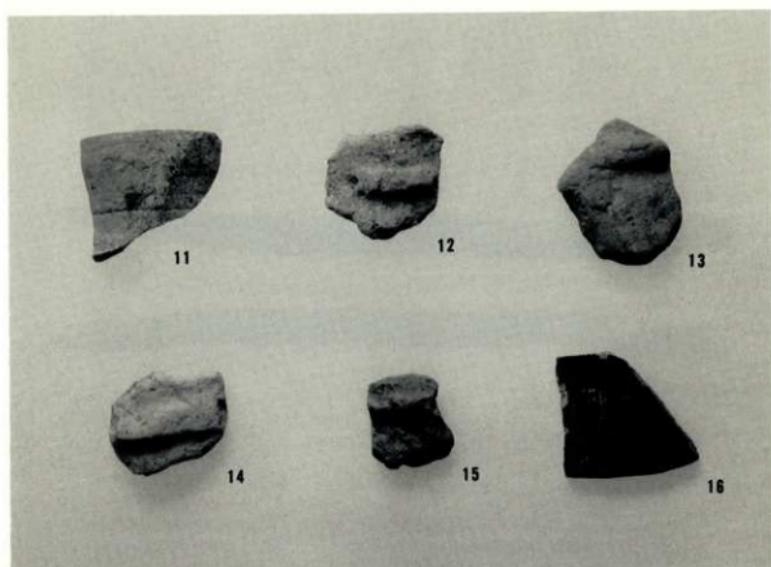
2. 同上 (1／3、内面)



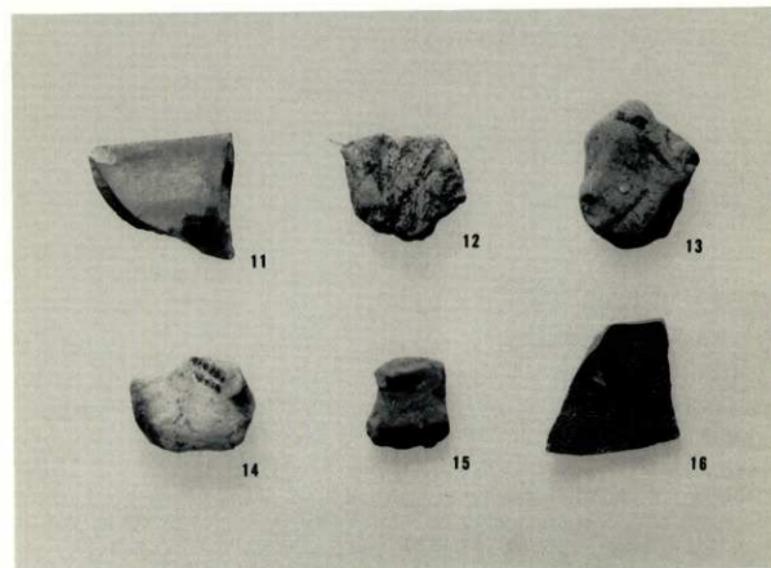
1. II層出土遺物（1／3、外面）



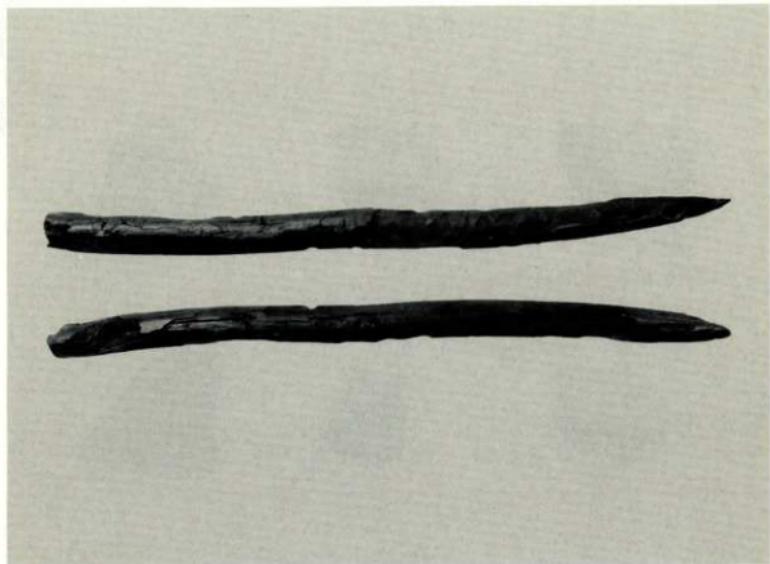
2. 同上（1／3、内面）



1. II・IIIa層出土遺物（1／3、外面）



2. 同上（1／3、内面）



1. 桀 (1/3)

島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第2冊
島根大学構内遺跡第3次調査
(深町地区 1)

発行日 1998年3月31日

編集発行 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

住所 島根県松江市西川津町1060

〒690-0823 TEL (0852) 32-6496

印 刷 **黒 潮 社**
島根県松江市向島町182-3
